
漂流者のログブック

紫藤さやか

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

漂流者のログブック

【Nコード】

N0428R

【作者名】

紫藤さやか

【あらすじ】

広所恐怖症の戦闘機乗りのお話。ログブックは航海日誌。宇宙戦闘用空母を傭兵として渡り歩くミア。ある日、任務中にパニックになったミアは撃墜される。

1 広所恐怖症

狭い所がダメ、という人がいるけれど、私は逆だ。
広い宇宙が、無限の空間が怖い。

昔、訓練中に誤って宇宙船から放り出されたことがある。
はずみがつくと、あっという間に宇宙船から離れ、一直線に遠ざかってしまう。

三日三晩広大な宇宙を独りでさまよい、無限の孤独を味わった。
奇跡的に他の訓練中の船のリーダーに映り、指導員が連れ戻してくれて事なきを得たが、その時の恐怖は今でもハッキリ残っている。

私の髪が白髪なのも、その名残だ。

綺麗だった黒髪はその時の恐怖のせいか、それともその時使用した薬の副作用なのか、それ以来真っ白になってしまった。そして、戦闘機乗りの傭兵となった今でさえ、宇宙に出るときは恐怖を忘れるための戦闘薬ドラッグが手放せない。

簡単なミッションを終え、母船に戻る。

母船に客船を迎えるための護衛だが、特に何も起こらなかった。

こんな簡単なミッションにも戦闘薬を使用している私は、完全なジヤンキー（薬物中毒）だ。

戦闘薬ドラッグはいろいろあるが、恐怖を沈め、集中力を増す薬がある。
人体への負担が重いため、非常時以外は使用しないことになっている。

私は戦闘機乗りの傭兵としてはかなり優秀なので、必ずといっていいほど前線に出なきゃならない。この戦闘機が小型で、嫌でも宇宙の広さを感じさせるのだ。母船に乗っているときはなんともないの

に、戦闘機のような小さな船で宇宙へ出るときは怖くなって戦闘薬ドラッグに頼ってしまう。止めなきゃ、と思っても戦闘薬を使ってしまう。薬のことは本部も大目にみてくれている。半年に一度の定期検診で、薬物検査の基準値さえクリアすれば、OKということらしい。本当は傭兵の体なんか、どうでもいいのだ。役にさえ立てば。

私は鼻歌を歌いながら、娯楽ルームへ向かう。

まだ戦闘薬が抜けきらなくて、少々ハイになっている。五千人が長期滞在できる、というこの宇宙船「アース」は軍事大国ブランクの戦闘用空母だ。艦全体が重力補正されていて、戦闘用空母のわりにはいろいろな施設が充実している。一見、豪華客船かと思うほど。娯楽ルームでさえ、一般人と階級のある正規職員とは別ルームになっている。

私は傭兵なので一般用娯楽ルームを使用している。

セルフでオレンジジュースをつぎ、個人用モニターの前を陣取る。狭い個人部屋にもモニターはついていますが、娯楽ルームの方が大きい。

私はものすごく古いアニメ「トムとジェリー」を選択する。

私はこのアニメが大好きだ。

猫のトムとネズミのジェリーが追っかけっこをするだけの単純なアニメ。

夢中でアニメを見ていると、不意に映像が消えた。

何事か、と周りを見ると、真後ろに立っていた男が勝手にモニターをOFFにしていた。

2 少佐1

「悪いね。話しかけても全く気が付かないから」

勝手にモニターをOFFにした男は全く悪いと思っていない口調でいう。

アレン・シーモア少佐？

私は眉をしかめた。

どうして少佐が一般用娯楽ルームへ？

VIPルームの方へ行けよ。

少佐も戦闘機乗りで、正規職員のくせに前線に出る数少ないメンバーだ。

戦場で指示を出すのは正規職員だが、一番危険な前線で戦うのは傭兵がほとんどだ。

正規職員が前線へ出ることは少ない。

少佐とは何度か一緒に戦っている。

若くして少佐になるだけあって、戦闘機乗りとしての腕は神レベルだ。でも、一緒に闘うといっても戦闘機に乗っているので顔を突き合わせておしゃべりするわけじゃないし、私の直属の上司は少佐ではなく、傭兵隊長のルークだ。だから、顔を見ることはあっても、少佐と直接話をする事なんてほとんど無い。

少佐が何の用だろう？

私は眉をしかめたまま、少佐を見あげた。

かなりデカイ。190cm近くあるんじゃないだろうか。

軍人らしい堂々とした体躯に、黒髪にグレイの瞳の整った甘い風貌。でも、戦闘機に乗るのにデカイ体は邪魔なだけだ。

ま、私のように小さすぎても戦闘機のカスタマイズに手間取るけど。

少佐は隣の椅子に腰を下ろすと私の顔をまじまじと見た。

「ミア、また戦闘薬を使ったのか？」

名前を覚えられていることにも驚いたが、戦闘薬ドラッグの事がバレているとは。

あの口軽女め。

白衣を着た色っぽい女医、ルーナに頭の中で悪態をつく。

戦闘薬はルーナ女医からもらっている。

少佐は私の顎をぐいとつかんだ。

「少し痩せたんじゃないか？」

戦闘薬を常用すると食欲が落ちる。

流動食でなんとかごまかしていたが、少し痩せたかもしれないって、そんなことまでわかるはずがない。少佐とはそんなに顔をあわせていないのだ。

「もう、薬は止める。お前の体が心配だ。ちゃんと食べているのか？ 流動食だけじゃ、筋力が落ちるぞ」

そういつて、少佐は私の大嫌いな白髪を指で梳いた。じつと目を覗き込んでくる。

私は目を逸らした。

私は自分の目も髪も大嫌いだった。

昔は綺麗な黒髪だったのに。

目も。

昔、視力補正のために手術を受けさせられた。

そのせいで、黒目は光が当たると銀色に反射してしまう。

いってみれば、目だけは機械が入っているの、分類的には一応サイボーグだ。

私の他にもいろいろな部位を強化しているサイボーグはいる。

でも、人工知能を搭載した人型の完全なアンドロイドはほとんどいない。

便利な機能は普通に機械として設備に付属させた方が使い勝手がいし、頻繁なメンテナンスと高額な維持費用がかかるアンドロイドに需要が無いのだ。

唯一作られたアンドロイドの用途は言わずと知れたエロ専門のセクサロイドだった。

最悪な事に、制作数の多いセクサロイド「ベビードール」——当時流行っていたバーチャルアクトレスがモデルだった——が、白髪だったのだ。そのせいで、白髪はセクサロイドを連想させるらしく、卑猥な言葉をかけられることも多い。だから私は自分の容姿が大嫌いだ。

私はガタン、と音をたてて席を立った。

少佐を無視して、自分の個室に戻るつもりだった。

上司を前に失礼な事はわかっている。

でも、傭兵の仕事は完全な契約で成り立つ。

契約勤務時間以外は無視してかまわない、と私は思っている。

心象を悪くして雇用継続を打ち切られる可能性はあるが、まず、大丈夫だろう。

戦闘経験が豊富な優秀な戦闘機乗りはあまり多くない。

しかも私は「アース」に搭載してある戦闘機に慣れ、癖もよくわかっている。

必要な人材のはず。

少佐は驚いた顔をして私の腕をつかんだ。

「ミア？ 心配しているんだぞ」

私は腕を振り払った。

「勤務時間内の命令なら受けます。勤務時間外のおせっかいは必要ありません」

ドラッグは止める？

止めたら戦えなくなる。

そうなれば、首にするくせに。

心配している？

笑わせないで。国営船にジャンキー（薬物中毒者）が乗っているのが困るだけでしょ。

ピンポンパンポーン♪

間抜けなアナウンス音が流れる。

『居住スペースC1からE3を燻蒸消毒します。三時半から六時半まで、立ち入らないようにしてください。繰り返しします・・・』

ついてない。

部屋に戻って昼寝するつもりだったのに。

私は仕方なく、娯楽ルームの一番端のソファに横になって目をつぶった。

3 少佐2

ミアは俺の腕を振り払うと、あてつけのように娛樂ルームの一番端のソファにゴロリと横になり、目をつぶってしまった。

ミアの白い髪が額にかかる。
長いまつげは黒い。

ミアに初めて会ったときのことを思い出す。

戦闘機から降りてきた少女。

防護スーツを着ていなかった。

無造作に白い髪をかきあげ、別の戦闘機から降りてきた男に無邪気に手をふっていた。

事務処理に手間取り、深夜3時にラウンジの前を通ったとき。

ミアは灯りの消えたラウンジで窓に背を向けて座っていた。

ボンヤリと頬杖をついて宙をみていた。

寂しそうな背中だった。

ミアがセクサロイドに似ている、とからかわれているのは知っている。
る。

だが、ミアをみていると性的な生々しさよりも、無機的な寂しさを感じるのは何故だろう？

ハッと気が付くと、周りの連中が面白そうにみている。

自分の上着を脱いで連中の視線を遮るようにミアにかけ、娛樂ルームを出た。

娯楽ルームを出て「保健室」に向かう。

「あら、少佐。どこか悪いのかしら？」

女医のルーナがクッキリとした赤い唇で笑う。

白衣、香水の匂い、美貌、微笑み、長く綺麗な脚。彼女の信者はたくさんいる。

「俺じゃない。少し聞きたいことがある」

ぶっきらぼうにいうと、ルーナは少し首をすくめるしぐさをした。

「はいはい。座ってくださいな。コーヒーでも淹れるわ」

「いや、いい。あまり時間が無い。傭兵に渡しているドラッグのリストがほしい」

ルーナは苦手だ。

綺麗で頭も良いが、笑顔からため息まで、全てが演出のようにみえる。

「一応個人情報なんですけど」

ルーナは俺のいうことは無視してコーヒーを淹れ、前に置く。

「部下の健康を管理するのも仕事の内だ」

ルーナは仕事が早い。

俺の言葉には答えず、一瞬でデータをモニターに映し出す。

「戦闘機乗りの傭兵の分でいいのね。・・・これだけよ」

簡単に薬の種類を説明してくれる。

モニターに映し出された数字の多さに絶句する。

戦闘薬に睡眠薬、鎮痛剤に避妊薬。

戦闘薬の量は半端ない。

「ドラッグを使用していないのは傭兵では隊長のルークだけよ。私の所に薬を取りにくる奴はまだマシよ。非合法のドラッグを使っている奴も多いわ。・・・監査か何かあるの？」

「・・・え？」

「経費調査かなにかあるの、って聞いているの。薬品代が高い、ってよくいわれるから。でも、安いと思わない？ 戦闘でパニックったら戦闘機が一機ダメになるのよ？ 戦闘機代の事を考えれば、ドラッグ代なんて安いものだよ」

ルーナは俺の前で長い脚を組んでそういった。

4 紅茶

「ミア。おい。」

耳元で怒鳴られて私は飛び起きた。

ルーク傭兵隊長だ。

起きた拍子に何かがバサリ、と落ちた。

拾い上げると軍服だった。

「シーモア少佐の軍服じゃん。階級章のついた服を置き去りにするなんて、減給モノだな」

ルークはいう。

軍人は階級を大切にする。

なるほど、階級章を失くすと大変そうだ。

階級章を失くすと減給で、戦闘で命を失くせば恩給がもらえるシステムはよくわからないけど。

何故、少佐が大切な階級章つき軍服を置きっぱなしにするのか理解に苦しむ。

「飯いかないか？ 今日客船の連中も来ているから、食堂混むよ。早めにいこう」

ルークはそういったけど、私は食欲がなかった。いつものことだけだ。

「うん。その前にこの服返してくる。先行つてて」

私がそういうと、ルークは頷いた。

「わかった」

ルークは私がドラッグを使った後、必ず食堂の食事に誘う。ドラッグを使った後は食欲が落ち、食事を抜いてしまう事を知っているのだ。いつも私が食べ終わるまで、見張るようにみている。

少佐の居住スペースは私達傭兵の居住スペースと違う。フロアも違う。

身分証がないと廊下にも入れない。床にわざわざ綺麗な絨毯まで敷いてある。

コーヒーをこぼしたらどうするんだろっ、と私はどうでもいいことを考えた。

「少佐、服返しに来ました。階級章、大切にしょ」
モニターごしに服をみせた。

すぐにドアロックが解除され、少佐が部屋から出てきた。

「ああ、ありがとう。入って」

少佐はいつもとは違う私服で、ラフな格好をしていた。
白のシャツを一枚さらりと羽織っている。

私は一瞬躊躇したが、VIP待遇の人の部屋がどうなっているのか興味かわいて、入ってしまった。

私の部屋と全く違う。

私の部屋は部屋というよりはカプセルに近い。ほとんど、寝る場所しかない。それでもカプセルの個人用の寝床があるだけで感謝だ。

複数雑魚寝で寝場所の陣取りあい、早くイビキをかいたものの勝ち、みたいな空母にいたこともある。

少佐の部屋は落ち着いた内装にベッド、テーブルに本棚、簡単なキッチンまである。もう一人住めそうなクローゼット。このクローゼットの方が私の部屋より大きいかもしれない。

あまりの違いに驚いた。同じ人間の住むスペースの違いに。

良い香りがして、目の前に紅茶が置かれた。

「・・・」

こんな香りは初めてだった。

お茶といえば、お湯に色さえつけばいいと思っていた。
で、なければアルコール。

でも私はアルコールは飲めない。

ドラッグを多用しているせいか、酔いが早い上にものすごく気分が悪くなってしまう。

私はコップを包み込むようにして持つと匂いをかいだ。

そつと口をつける。

静かな時間だ。

香りだけで時が経つなんて、生まれて初めて知った。

コップから顔を上げると少佐が笑ってこっちをみていた。

見たことが無いような柔らかな笑顔。

「紅茶が気に入った？ 気に入ったなら茶葉を持っていくといい」

そついわれても、私の部屋には優雅にお茶を入れるスペースなんて無い。

私は首を横に振る。

「ごちそうさまです。服を持ってきただけなので失礼します」

私が立ち上がると、少佐も立ち上がった。

「よければ一緒に食事をしよう。今日は一般の食堂は混んでいるだろう。上階にある食堂にいこう」

少佐はそうだったが、私は一般人なので、と、断った。

「ドラッグは止める。戦闘ごとに戦闘薬、睡眠導入剤はどう考えても多すぎる。体に負担が大きすぎる」

麗しく、無駄なお説教。

「戦闘薬を使わずに宇宙に出たら、パニックを起こして撃墜されま
す。私に死ねというんですか」

私はそのまま部屋を出た。

5 クスリとリスク

「悪いわね。二週間後は定期検診なの。クスリは渡せないわ」

女医のルーナはカレンダーを確認している。

ふざけた理由だ。

戦闘薬がなければ、定期検診の前にパニックを起こして宇宙で撃墜されるかもしれないのに。死んだら定期検診は受けられない。

定期検診で調べられる項目はわかっている。

薬物検査の中でも全ての物質を調べることは不可能だ。

代表的な数種類の薬物を検出するにすぎない。

非合法ドラッグの中に検査項目にひっかからないものがある。

だが、依存性があり、不純物が多く含まれる非合法ドラッグの危険性は今使っている合法ドラッグの比ではない。非合法ドラッグにはまれに、人間ではいられない。

.....。

私はゆつくりとゴミダメと呼ばれている区域に足を運んだ。

掃除もされず、通路も無いそこは、パイプがむき出しの居住外空間だ。所々に非常用の明かりが取り付けられ、死にかかった蛾のように点滅している。

「これはこれはベビードールちゃん。めずらしいな」

ゴミダメの主が嫌な笑いを浮かべながら、近づいてきた。

このゴミダメの主も傭兵だ。
ベビードール。セクサロイドの愛称だ。

「検査に引つかからないやつ。1回分。」

私がいうと、ゴミダメの主はドラッグの額を間髪入れず口にした。

「2000ルオ」

高い。

「何それ。高すぎるよ」

私が文句をいうと、ニイと笑った。

「最初だけ安くして、ドラッグ漬けにした後で値上げするよりマシでしょ。でもドールちゃん、抱かせてくれるならタダでいいよ」

これだから嫌なのだ。

私は黙ってあり金を出した。

あまりお金は持っていないし、ためてもいない。昔は一生懸命わずかな給金を貯金していた。そのときはたぶん、未来を信じていたんだと思う。なけなしの貯金は貨幣価値が替わりーその時労働していた国が他の国に吸収されてーゴミになった。馬鹿らしくなって貯金はやめた。

私がゴミダメから出てきた所に、ルーク傭兵隊長がいた。

「出せ」

私はゴクリと唾を飲みこんだ。

ルークは戦闘薬^{ドラッグ}を嫌悪している。
違法ドラッグは特に。

「買ってきたものを出せといっている」

無駄、とわかっていたが手を後ろに隠した。

次の瞬間、殴られて後ろにひっくり返った。

ルークは私に馬乗りになり、手に握りしめていた小さな袋を無理やりむしりとる。

怖い顔をしていた。

焦げ茶色の髪に、同色の瞳。端正な顔立ちのはずなのに、ルークはどこか荒んでいる。ルークだけじゃない。私達傭兵はみなそうだ。

わかっている。

私が今、こうしてまだ生きているのは、ルークがこうやって守ってくれたからだ。ルークは訓練時代からの同郷だ。その、訓練をしていた故郷は今が無い。ルークも私も故郷の無い難民として登録されている。

難民を受け入れ可の国にはどこへでも行ける代わりに、どこもアウェイだ。ホームは無い。

ルークは怖いのだ。

私がいなくなるのが。

ルークは馬乗りになったまま、私に口づける。

「二度と、こんなものを買っな」

そういうと、ルークは立ち上がった。

私は明かりのついていないラウンジに行った。
人気の無い、明かりの無いラウンジは落ち着く。
故郷を恋しいと思ったことは無い。
故郷とよばれたその場所も、ここや別のコロニーとたいして違いは
ない。

少なくとも見た目はそう大差ない。
住んでいる人間達も、食べ物食べて、寝て、働いて。やっている
ことも変わらない。

「こんな所にいたのか」

低い声がして振り返ると少佐が立っていた。

「殴られたのか？」

驚いた顔をして私の頬に触れる。暗くてもわかるくらい頬に殴られ
た痕がついているらしい。

「誰にやられた？」

私はうつむいて首を横に振った。

「誰にやられたんだ？」

少佐はもう一度きいた。

「大切な人」

私がそう言つて顔を上げると、少佐は微かに傷ついた顔をしていた。
それ以上、何もいわなかった。

勝った。

でも、何に？

6 戦闘

いつかはこの時が来るのをわかっていた。

ドラッグ
戦闘薬無しの戦闘。

恐怖で気が狂いそうだ。

撃墜されることでも、死ぬことでもない。

無限の宇宙を漂流すること。

無限の宇宙で一人ぼっちになること。

戦闘になると、前線に出る機体、メンバーが限られてくる。

そうになると、敵方も相手の弱点を攻略し、徹底的に攻めてくる。

今回のターゲットは民間人が武装して乗っている大型宇宙船で、国籍は不明。多数の戦闘機を所有している。私は国籍関係なく、多種多様の人間をつめこんでいる、とみている。攻撃の仕方でお国や育ちがわかる。私のような傭兵上がりの人間も、エリート軍人も、ジャンク屋も、海賊もいる。傭兵は攻め方がしつこい。何機落としてナンボだからだ。エリート軍人は美学を追及する。無様な戦いは恥だと思っている。ジャンク屋は攻撃には興味が無い。欲しい部品を搭載している機だけ狙い、自分達は意地でも撃たれまいとする。海賊は威嚇が上手く、とにかく機体を傷つけずに捕獲しようとする。不思議な船だ。もとは物資を運んでいた貨物船らしく、装甲の厚いかなり大型の船だ。おそらく自給自足できるだけの設備を備え、三千人以上の人間が中で暮らしている。

「あいつらと戦う必要はないんじゃないか？」

ルークは不機嫌そうにいう。

ターゲットはプーランクの領空をかすめて渡航している。
攻撃の理由はあるような、ないような。

「どうして？」

「戦う理由がわからない。それに、相手を生かさず殺さずダメージを与えろ、という命令も変だ。真剣に戦うつもりもなさそうだし」
「民間人の力が強くなりすぎると困る、ってことじゃないの？ あの手の手船やコロニー、最近増えているんでしょ」

このところ、国を持たない無国籍の船やコロニーが増えている。彼らの存在理由はまちまちで、渡航ルールは大抵守っているが国という枠にも意義にも縛られない。

ルークの気持ちはわかる。ルークは自分のような難民や民間人と戦うのが嫌なのだ。エリート軍人を叩き潰すのには躊躇ないけれど。今更だ。どうせ、末端はほとんどが難民あがりの傭兵なのだから。ルークは優しすぎる。

戦闘理由にしろ、戦闘戦略にしろ、私達傭兵に全てが明かされることは無い。前線に出ている傭兵は捕虜になることもあるし、脱走もある。機密をしゃべられたら終わりだ。だから、必要最低限の事しか知らされない。言われたとおりに動く捨て駒だ。

眠れない。明日は戦闘になるのに。

戦闘メニユーそのものは、敵艦を威嚇し、渡航ルートを変えさせるだけの簡単なものだ。

明日の戦闘は戦闘の数にも入らない。艦内はのんびりムードだ。

私は呻いた。戦闘薬が無いとわかっているだけで、このザマだ。
怖い。怖い。怖い。

私は無人のラウンジに行った。
眠ると暗闇が無限へ引きずり込もうとする。

戦闘薬が無いと思うだけで奇妙な焦燥感と不安に蝕まれる。
人肌がほしかった。

そばに誰かいる、という実感がほしかった。

ルークに頼めばきっと抱いてくれる。

でも、私はルークに抱かれたことはなかった。
もうお互いに依存しすぎている。

これ以上お互いにのめりこめば、何も見えなくなり破滅がまっているだけだ。自分達の境遇に嘆き、お互いの未来に不安を感じ、もっと多くのかなわないものを相手に求め、破滅する。

今まで、そうやって壊れていった傭兵の恋人達をたくさんみてきた。

「ミア？」

暗闇の中から声がした。

少佐。

もう、声だけでわかる。

「どうした？ 眠れないのか？」

私は黙ったまま、少佐の首に腕をまわした。

やっぱりデカイ。届かない。

少佐が微かに息を飲むのがわかった。

少佐は少し屈むようにして私の腰に手をまわした。

唇に唇を押し付ける。

少佐の腕に力が入り、強い力で抱きしめられた。

お互いを貪るように口付ける。

そのまま、2人でもつれるように歩き、少佐の部屋へなだれ込み、

ベッドへ倒れこんだ。

今まで一度だって、こんなことをしたことはない。
ドラッグをやっているときだって。

少佐に抱かれ、

・・・朝が来ても少佐は私を抱きしめていた。

ミア。

何度も何度も名前を呼ばれた。

私は一度も少佐の名前を呼ばなかった。

翌日の戦闘。

といつても、単なる威嚇で敵艦に少し航路を変えさせるだけで済む
はずだった。が、敵艦も戦闘機を出し航路を譲らなかつたため、小
競り合いになった。

少佐が寝不足だったのがいけなかつたのか、ルークが私と少佐が朝
一緒にいたのを見たのがいけなかつたのか、私がドラッグが無いせ
いでパニックになりかかつたのがいけなかつたのか、単に運が悪か
つたのか。

チームワークは見事に崩れ、私は撃墜された。

前線の中でも拔群の腕前を持つ私は無様にも敵船に捕らえられた。

1 捕獲

戦闘機は貴重な資源だ。

捕らわれて驚いたのは、戦闘機の回収だけでなく、戦闘機乗りも回収していたことだ。私は将来使えるかもしれない戦闘機乗りとして、丁重に病室と思われる個室に閉じ込められた。

ルークが泣いているかもしれないと思うと胸が痛んだ。

少佐は今回の無様な戦いの責任を取らせられるだろう。

場合によってはベビードールとの醜聞を押し付けられて。

「体、ボロボロだよ」

気が付くと、私とそう年の違わない白衣を着た少年がベッドサイドに腰かけていた。

お医者さん・・・？

金に近い茶色の髪に、同色の瞳。線は細いが決して貧相ではなく、品の良い感じがする少年だった。

少年が手にしている小さなボードには私のカルテらしきものが映し出されている。

「血液検査の結果、みる？ ドラッグ漬けだったの？ こんな数値見たことない。君、死んじゃうよ」

少年は澄んだ瞳で私をじっと見ていた。
責めるふうでもなく。

・・・でも、ドラッグがなければもつと前に死んだ。宇宙でパニックになつて。

心の中で言い訳する。

少年は私をみていたが、ボードを脇に挟み、立ちあがって言った。

「それに、栄養失調だよ。軍事大国プーランクが誇る国営船「アース」も結構お粗末だね。しばらく入院してもらつよ」

2 奪還1

捕まったときに、鎮静剤を打たれたせいだろうか。
体が怠いし、眠い。

ウトウトしていたら

「よお大将」

と、呼ばれた。

目をあけると、見知らぬ体格のいい角刈りの男が立っていた。
アンタに大将と言われる筋合いは無い。

男の体には無数の古い傷跡がある。

『アンタの方が大将』そんな感じの男だ。

「あんたがプーランクのデザートイーグルか」
その男はいった。

何それ。そのダサイネーミング。

「プーランクのデザートイーグルを落としたっていうんで、みんな大騒ぎだ。こんな娘っことは思わなんだがな。今回の戦いは珍しく精彩を欠いていたな。」

余程無様な戦いをしたらしい。

半分パニックになっていて覚えていない。

「恋人と朝までヤッてて、寝不足だったのよ」

私がそういうと、角刈りの男はニヤッと笑った。

「プーランクのアレン・シーモア少佐が捕虜の交換を要請してきた。みんなで噂していたんだよ。傭兵を使い捨てにするプーランクが珍しいってな。余程、機密に詳しい傭兵か、それでなければ幹部の恋人だろうと予想していたんだ。後者だったのか」

私は驚いて目を見開いた。

傭兵の捕虜の交換？ そんな話は今まで一度も聞いたことが無い。

「お前の意志をききたい。ここに残るか、恋人のもとに帰るか。捕虜の交換の交渉にはのるつもりでいる。こちらにとっても大切な人員が向こうに拘束されているからね。彼を返してもらうつもりでいる。ただ、お前と彼を交換するか、お前が乗っていた戦闘機と交換するか。考えておいてほしい」

角刈りの男はそういうと、去って行った。

「戦闘機との交換にしなよ。『アース』に戻ったら、体がボロボロになって、死んじゃうよ。ここにいた方がいいよ」

この前のカルテをもっていた白衣の少年――シンが枕元に座ってそういった。

彼は、ここで医者をしている。

でも。

私はドラッグがなければ戦えない。

シンの様子からいっても、ドラッグをもらえとは思えない。
ブランクのデザートイーグル（ダサイ名前）だろうがなんだろう
が、ドラッグがなければタダの人（お荷物）だ。

私はうつむいた。

あの船にはルークもいる。

「絶対、戻っちゃダメだからね」

ぴぴぴ、とタイマーが鳴り、シンは部屋を出て行った。

3 奪還2（前書き）

アレん少佐視点です

3 奪還2

ミアを、取り戻したい。

無理やり本部に要望をねじ込んだ。

捕虜となった傭兵を奪還するなど、本来、有り得ないことだった。

こちらで捕獲した捕虜と捕えられたミアを交換する捕虜交換交渉の許可が欲しかった。

たった一人の傭兵のために、渡航計画が狂い、何十人の仕事が増える。

許可が下りる可能性は極めて低かったが、どうしてもミアを取り戻したかった。

ミアの細い体を抱いた感触をはつきりと覚えている。

ミアの擦れた声も。

シーツはミアの血で汚れていた。

軽蔑の眼差しも、嘲笑もどうでもよかった。

昨晚ミアを抱いたのは誰もが知っている。

狭い艦内には隠れる場所もなく、噂は早い。

傭兵隊長のルークと、医学博士であるルーナ女医も傭兵の奪還に賛同した。

ルークの賛同は無視されたが、ルーナは両親が議員をしている。

その影響力は大きかった。

「少佐、あなたのような男が一番タチが悪いわ。どうせあの娘を一回抱いたかなんかで頭に血が上ったんでしょ。今回あなたがしたことは、あの娘の立場を悪くし、傭兵のチームワークをみだし、あなたの指揮官としての評判を地に落とし、ミッションを失敗させ、戦

闘機を一台失った。それだけよ。大人しく黙って反省していればいいものを。でも、今回だけは助けてあげるわ。貸にしておく」
ルーナのいったとおり、捕虜交換の要請はあっけなく本部を通った。

ミア。

どうか戻ってきてほしい。

4 セクサロイド

いきなり腕をまくられ、針がささった、と思ったら注射だった。同時に口に薬をつっこまれ、ベッドが起こされた。

何事か、とみると、少女がいた。

目の覚めるような美少女。

白い髪に、グリーンの目、白磁のような肌。

セクサロイド・・・？

美少女は無言で、次々と仕事を済ませてゆく。

私はモノのように扱われ、でも手早く体温脈拍を測られ、血液検査を受け、注射をうけた。

今までセクサロイドに似ている、とからかわれてきたけれど、本物はとんでもなく綺麗だ。

私とは似ても似つかない。

美少女は無表情に私を見た。

「シンは忙しい。私があなたの面倒をみる。私はN209。あなたは」

声にも表情が無い。

「私はミア。ミア・アランフェス。」

「ミア。私の事はN209と呼ばばいい。面倒なら、エヌ、と」

「エヌ？」

私は眉をしかめた。

N209では製品番号のようだ。

「名前はマスターがつけることになっている。マスターが代わるたびに、名前は初期化される。でも、私は最初につけられたこの名前が好き」

N209は淡々という。

「ミアは戦闘機乗りなのか？」

私は苦笑する。

「うん。戦闘機乗りのくせに、宇宙が怖い。もう、飛べないかもしれない」

そういうと、N209は頷いた。

「私も同じだ。セクサロイドのくせに、セックスが怖い。私のこの恐怖が人間の感情と同じかどうか分からないけれど。大丈夫だ。ヒトはみんな怖がりだ」

N209の澄んだグリーンの瞳が光に透け、光彩の隅にロット番号が浮かんでいた。私の機械の目と少し似ている。

私がN209の頬に手を伸ばすとN209は微かに微笑んだ。いや、微笑んだようにみえただけかもしれない。

「苦しければ、枕元のパネルの赤に触れて私を呼べ。お腹がすいたら、青。」

N209は淡々というと、部屋を出て行った。

5 ウイルス感染

セクサロイドのN209は淡々と仕事をこなしていたが、調子が悪いのか、時々立ち止まっている。

「エヌ、大丈夫？ 休んだ方がいいんじゃないの？ シンにみてもらう？」

N209は首を横に振った。

「シンには見てもらった。でも、いかれているのはボディの方じゃない。たぶん、ウイルス感染してる。今度、マッド博士が乗船したときに、私を初期化することになっている」

マッド博士というのは、アンドロイドやサイボーグの治療や研究を専門にしている技術者で、コロニーや船を定期的に渡り歩いている人らしい。私は会ったことがないから知らないが、次に停泊予定の衛星ロペで乗船してくるそうだ。

「初期化？」

「そう」

「どうなるの？」

「ミアと会った記憶、消える」

N209は無表情にいう。

「たくさん記憶消えて、初期化される。記憶のバックアップをとって、スキャンして戻すこともできる。でも、危険だからやめた方がいいらしい。だから、初期化する。」

私はN209の無表情な顔をみつめていた。

「何度もやり直し。先に進めない」

そうつぶやくN209の背に両手をまわし、そつと抱きしめた。

「大将、どうする?」

いきなり後ろから呼びかけられた。

角刈りの体格のいい男、『アンタの方が大将』の登場だ。

「戦闘機がミア、どちらかを「アース」に引き渡すことになる。アレン・シーモア少佐はミアを返せ、といってきたいるがね」

戦闘機か私。

「私はここに残っても戦えないし、戦闘機にも乗れない。ドラッグ無しじゃ、恐ろしくて宇宙に出られない。ドラッグをもらえなきゃ、戦えない」

私がそういうと、アンタが大将は頷いた。

「それはシンから聞いている。だが、それは関係ない。戦えなくてもいい」

ここの船の人々は不思議だ。

「戦闘機」と「戦えない私」なら戦闘機の方が価値があるにきまっている。

それを捕虜である私に選択をまかせるなんて。

「「アース」には大切な人が乗っているの。その人を置いていけない。だから・・・私が戻る」

ルークの事を考える。きっと、すごく心配している。

「いいんだな？ シンはその船に戻ればお前は死ぬといていたぞ。お前にドラッグを渡して飛ばせている少佐なんて、俺にいわせれば、ロクな男じゃないと思うがな」

『アンタの方が大将』はよく見れば、人のよさそうなオヤジだった。少し心配そうに私をみおろしている。

「少佐は・・・関係ない。」

私はいった。

少佐は・・・。

あの夜を思い出してみる。

気が狂いそうな程、怖かった。

いや、半分おかしくなっていたから、すごった。

それは、単に少佐がそこにいたからであり、ドラッグのかわりにすぎないはずだ。

でも、「アース」に戻ってドラッグが手に入ったとして、少佐の温もりをなかったことにできるのだろうか。もし、抱きしめられれば簡単に落ちていきそうだった。少佐の温もりは恐怖を忘れさせてくれた。力強い鼓動につつまれると安心した。ミア。呼び声を思い出すだけで、泣きたくなる。・・・何なの？

「アース」に戻ったところで、その境遇は前より更に悪化しているだろう。

それでも、ルーク傭兵隊長を置いていくことはできない。

故郷にいた頃、戦闘機に乗る訓練をしていた。

ルークは技術指導の教官で、私は出来の良い生徒だった。

教官と生徒となる以前に、すぐ近所に住んでいたので、少し年の離れた幼馴染のようなものだった。

コロニーからだいぶ離れた宇宙空間で訓練をしていたとき、コロニーが爆発した。

それ以来、私達は帰る場所がなくなり、ずっと一緒に宇宙をさまよって―あちこちの空母を傭兵として渡り歩いて―いる。

ルーク傭兵隊長が私を誰よりも大切にしているのは知っている。

かけがえのないもの。

ルークの記憶であり、失った故郷であり、半身であるもの。

それは私にとっても全く同じだ。

ただ、私には記憶も故郷もルークほど大切にできないだけだ。

今、ここに生存するだけで、せいっぱいで。

それでも、私の一部はルークのために存在するし、ルークに生かされている。

「大切な人、というのは、少佐ではないのか？」

角刈りの『アンタの方が大将』の言葉に私はゆっくり頷いた。

『アンタの方が大将』は暫く考えこんでいた。

「ミア、ここにいてほしい」

無表情な声がした。

N209。

「私が初期化されるまで、そばにいてほしい。そして、最初に会ってほしい」

N209は無表情なまま、そういった。

大丈夫、ヒトはみんな怖がりだ。

そういったN209。

6 帰還（前書き）

前半 アレン少佐視点、後半 ルーク傭兵隊長視点です

6 帰還

脱出用のシンプルなカプセルに捕虜を入れ、合図を送ると、相手側からも合図があった。

傭兵隊長のルークが緊張した面持ちでブリッジに立っているの見える。

ミアが帰ってくる。

そう思っていた。そう信じていた。

だが、相手が用意したものは、ミアが乗っていた戦闘機だった。

エネルギーをOFFにした生命反応のない戦闘機が静かにアースのすぐ横で停泊する。

戦闘機を簡単にスキャンし、危険物の搭載などの異常がないか確かめたあと、戦闘機は回収された。

そんな馬鹿な……。

ミアは？

俺は無人の戦闘機を茫然とみていた。

「アース」の本部の連中は喜んでいた。

「アレン・シーモア少佐、よくやった。あれだけの交渉で戦闘機一機取り戻すとは。冷静な交渉で損害を最小限に食い止めた」

ミアの使用していた戦闘機は小型で高い機動性と攻撃力を有するかなり高価な代物だ。

・・・そんな交渉はしていない。

俺はミアを返してくれと交渉しただけだ。

傭兵隊長のルークはブリッジで成り行きを見守っていたが、そのま
ま姿を消した。

・・・・・・・・・・

ミアの乗っていた戦闘機は簡単な点検の後、格納庫に収納されてい
た。

点検していた作業員も引き上げ、格納庫は静かだ。
自分の足音だけが大きく響く。

ミアの乗っていた戦闘機に乗りこみ、狭いコクピットのシートに体
をしずめる。

すかにミアの気配が残っているような気がしてしまう。
シートはミア用に調整されているため、狭い。

ミアは無事なのだろうか。

戻ってきた戦闘機のコクピット付近には殆んど損傷がみられず、中
に乗っていたミアに大きな怪我があったとは思えない。戦闘記録か
らいえば、ミアが途中でパニックに陥り、敵方に動力部分を狙撃さ
れ、捕獲されている。
頭を両手で抱え込む。

今すぐにも助けに行きたい。

だが、傭兵である自分が勝手に戦闘機を出せば、それは反逆とみな
される。無理に飛び出したとしても、相手の空母にたどり着き、ミ
アを助け出せる確率は0に限りなく近い。そして、助け出したとし

ても、その後行く所など、どこにもないのだ。反逆をおこした傭兵など誰も雇わない。

堕ちる道など無数にあるが、這い上がる道は、どこにある？

ドラッグ無しで戦闘機に乗ればパニックになることは予想できた。でも、あの日、ミアは落ち着いていた。落ち着いた表情で、シーモア少佐に肩を抱かれていた。

前日の夜、何があったか、知りたくもなかった。

それでも、ドラッグ無しで落ち着いた表情で戦闘機に乗れるというのは、わずかな希望でもあった。ドラッグを止めさせなければ、いずれミアは体を壊してしまう。

だから、その希望を信じようと思った。

だが、結局、戦闘の最中でミアはパニックになってしまった。

ミア……。今、どうしているんだろう？

ふと、思い出してディスプレイの上部に目をやる。

ミアはここに「お守り」といって自分が昔プレゼントした人形をぶらさげていた。

……。あれ？

そこには人形のかわりに、見覚えの無い緑のカエルがぶら下がっていた。

カエルを手にとる。

カエルは内側が空洞になっていた。

手紙……？

カエルの中からは小さな紙切れが出てきた。

自分とミアの故郷の文字でそれは書かれていた。

ルーク

アースが嫌になったら来て。

連絡先はJ P O 9 × ×

P S W基地で飼っていたワンコの名前・インコの名前

私は大丈夫 ミア

ミア。無事なのか。

カエルに唇を押し当てると、自分の胸ポケットに入れ、コクピットから出た。

7 ビッグマザー（前書き）

アレクサンダー視点です

7 ビッグマザー

データベースでミアの捕えられた船「ビッグマザー」の情報を検索する。

案の定、お粗末な情報しかのっていない。

「ビッグマザー」が、俺が今乗っている船「アース」と大きく違うのは、自給自足できることだ。「アース」は自国ブランクを守るための戦闘用空母として設計され、宇宙に浮かべられている。かなり長期の渡航は可能だが、基本的に必要な物資は他から運び込む設計になっている。

「ビッグマザー」は多くの動植物を持ち込み、一つのコロニーのような機能を有し、同じような船やコロニーと行き来し、貿易したり、物々交換したりしている。

「ちょっと少佐、まさかあなたまで退職するっていいだすんじゃないでしょうね？」

データベースでミアの捕えられた船「ビッグマザー」の情報を集めていると女医のルーナが声をかけてきた。

「退職？ いや、「ビッグマザー」の情報を集めているだけだ。傭兵隊長の退職の話をもうきつけたのか？ 地獄耳だな」

嫌味でいったつもりだったが、ルーナは意に介さない。

ルーク傭兵隊長が突然退職届を提出した。

ミアが敵船につかまっただのが余程こたえたらしい。あるいは、単独で助けに行くつもりなのか。かくいう自分も何かミアを取り戻す手がかりはないかと探しているわけだが。

「ルークが挨拶にきたのよ。意外に礼儀正しい子ね」

ルーナの香水の匂いが鼻につく。

・・・俺のところには挨拶に来なかったがな。

「・・・あなたが心配している小娘のことだけれど。私は無事だと思っわよ」

ルーナは少し離れた所で腕組みをしていた。ルーナはいつも白衣をきている。医者だから、というよりは、医者を演出しているからといったような。

「・・・根拠は？」

ミアが拷問にあってないか、つらい目にあっていないか、心配だった。

「ビッグマザーは技術船よ。技術者や研究者がいっぱい乗ってる。

確かな情報ではないけれど、恐らく、科学者のレントン博士や、宗教学者のモーガン博士もあの船に亡命している。あの船は比較的女性の乗船率が高いし、艦長も女性のはずよ。戦闘機乗りで、帰属意識の薄い傭兵は貴重な技術者として歓迎されていると私は思っわ」

ルーナは俺がみていた「ビッグマザー」のデータベースをのぞきこ

んでいう。

レントン博士に、モーガン博士？ 行方不明ときいていたが、亡命していたのか。

ルーナは驚く程人脈、情報網が広い。

「確かなのか？」

データベースにはもちろんそんなことはのっていない。

「学会でトラベラーズのマッド博士とお会いしたのよ。彼は3艘の技術船と3つのコロニーを定期的に渡り歩いている。マッド博士もはつきりはおっしゃらないけれど、「ビッグマザー」には高名な学者が数人乗船しているし、かなりまとまな船らしいわ」

マッド博士はその筋では有名な変人で、アンドロイドやサイボーグの治療や研究を専門にしている技術者だ。トラベラーズ―定住せずにあちこちの船やコロニーを渡り歩いている人々―だ。

「あの船を徹底的にたたかず、いかさず、殺さずに攻撃する、っていうのはそういう理由。貴重な人材、貴重な技術の宝庫なの。ただし、力を持たれすぎても困る。軍事大国にはむかうことは許さない、というけん制よ。あの船に著名な学者たちが亡命することによって、国という概念が崩壊する危機が高まっている。そういう国を脅かす連中に対する制裁の意味もあるわ。できればあの船と取引したいと上の連中は考えているわ。軍人は常に視野を広く持たないと。駒になつたら終わりよ。私だったら、馬鹿みたいに1%の可能性にかけて娘を救いに行くことはせずに、遠くからサポートし、いずれ自分の懷に抱え込む事を考えるわね」

ルーナは淡々という。

俺は目の前の女に何も言い返せなかった。

8 小鳥ちゃん

「小鳥ちゃん、体重も少し増えたし、顔色もよくなってきたね」

嬉しそうな顔でベッドサイドに腰かけたシンがいう。

私は首をかしげた。

「小鳥ちゃん？」

「デザートイーグルってあだ名、嫌いみたいだから。イーグルが嫌なら、小鳥ちゃん。ドラッグ無しじゃ飛べない小鳥ちゃん」

ニコニコしながら、悪びれない様子で言うシン。

小鳥ちゃん。

何だか可愛い名前。

「もしかして、デザートイーグルって鳥の名前だと思ってるの？」
私がいうと、シンはきょとんとした顔をした。

「・・・違うの？」

そういうシンの表情はちょっと子供っぽくて、可愛い。

「デザートイーグルって、銃の名前よ。昔の銃の名前」

私が説明するとシンはふむふむ、と頷いた。

「そっか。鳥の名前じゃなかったのか。てっきり鳥の名前だと思ってたよ」

シンはなんだか変わっている。

若そうにみえるけど白衣が妙に板についている。

それなのにお医者らしい威圧感が無く、飄々としていて。

「シンって何だか不思議な人ね」

私が思わずいうと、シンは頷いた。

「僕、ときどき自分のこと、ヒトじゃないかも、って思うんだ。一生懸命ヒトのフリをしているおサルなんじゃないのかなってね」
シンは真面目な顔をしている。

「昔ね、研究所に勤めていたんだ。開発中の新薬の試験を委託されていた所。サルをいっぱい飼っていてね。サルにいっぱいいろんな薬を投与して、データをとるの。だから、サルのドラッグ患者はいっぱいみてきた。」

（注：この話はフィクションであり、実際の新薬開発、治験等とはいっさい関係ありません）

「シンは動物のお医者だったの？」

「資格としては、ヒト用のお医者だよ。人間を癒せば誰だってみんな人間のお医者だよ。サルを癒せばサルのお医者。癒さなければ、医者じゃない。戦闘薬もいっぱい試験したよ。血管が固くぼろぼろになって、みんな早く死んだ。毎日毎日サルが死んだよ。僕はその数を調査して報告していた」

「・・・」

「小鳥ちゃんも、僕も、サルもみんな一緒だよ。小鳥ちゃんが死んじゃうと僕は悲しい」

私はうつむいた。

「小鳥ちゃんが元気になってきたから、僕は嬉しい」

シンはニツコリと笑った。

「飛べないなら、ここにいればいいよ。N209だって、エッチで
きないけど、ここにいるよ。僕も研究所からサルと一緒に逃げ出し
てここにいる」

そか。私はサルといっしょか。

なんだかちょっと、おかしかった。それからちょっと、うれしかった。

9 友達？

「小鳥ちゃん、お友達だよ」

シンの声が聞こえ、毛の塊が現れた。

オレンジ色の長めの毛。そのオレンジの毛の塊は手足が生えていて、シンにしがみついている。
その毛玉が振り返った。

「ぎゃっ」

威嚇なのか親愛の情なのか謎の音を漏らしながら毛玉がシンから手を離れた。

可愛い……のかな。

おさるさん………？

「オラウータンだよ。小鳥ちゃん」

オラウータンは謎の言葉で話しながら近づいてくる。
あうっ。どうすればいいの？

「ぎゃっ」

オラウータンはのしり、と抱きついてきた。歯をむき出したり、しまったり忙しい。

お、重いんですけど……。

「びゃはびゃは」

オラウータンは笑い声ともなんとも形容のつかない音を発している。

喜んでるのかな？ と、思ったのもつかの間、むぎつと髪をつかまれた。

「イタタ！ ちょっと、ハゲる！ 離して！！」
「ぎょぶ」

オラウータンは私の髪をつかんだまま、手をはなしてくれない。

「ちょっと！ 離しなさいってば！ 痛いよ、このっおバカ！！」

「びやはびやは」

「きーっ！ この赤毛ザルがつー！」

オラウータンの毛をつかんで引き離そうとするが、オラウータンも離さない。

「おお。白ザルと赤ザルが喧嘩か。壮観だなあ」

いつの間にか『アンタの方が大将』が見学に来ている。

「ちょっと大将！ 見てないではがしてよ、コイツ。ハゲちゃうよー！」

SOSを出しても大将は大喜びしているだけで助けしてくれない。

オラウータンの反撃が止まった。

どうやら抱きつく場所が今一つ安定せずに髪を掴んでいただけらしい。

「びやはびやは」

オラウータンはなんだか嬉しそうだ。

う・・・ちょっとだけ可愛い？

「びや？」

オラウータンにつられてなんとなく笑ってしまう。

「小鳥ちゃん、やっと笑ったね」

シンに言われて、そういえば最近笑った記憶が無い事に気が付く。

「こんなに意気投合するなんて、紹介したかいがあったよ！」

シン・・・これ、意気投合っていうんですか？

オラウータンは私に抱きついたまま眠ってしまった。

「ほらね。小鳥ちゃんとオラウータンはなかよしなんだよ」
シンは満足そうにそういった。

新しいお友達の寝顔をしばらくみていた。

とっても平和。でも、重い。

10 女艦長カーラ

「小鳥ちゃん、体調も良さそうだし、そろそろ居住スペースに移っていいよ。空き部屋が幾つかあるはずだから大将に案内してもらって」

シンが壁に取り付けてあるボードのボタンを押した。

ピンポンパンポーン♪

間抜けなアナウンス音が流れる。

この船も同じアナウンス音なのか。もしかして、これ、宇宙共通？

「大将、暇なら救護室にきてください。大将、暇なら救護室にきてください」

シンの声が艦内にこだまする。レトロな感じた。

「大将、ってこの前来た角刈りのオジサンだよね？ 本当に大将って名前なの？」

私が聞くと、シンは笑い出した。

「大将の本名は、イリヤ・何とかで、地球出身。あの人、誰にでも『よお大将』って呼びかけるから、みんなに『大将』って呼ばれている。この船は、亡命してきた人とか、脱獄してきた人とか、ヤバい組織から追われてる人とか、いーっぱい後ろ暗い人が乗っているから、本名を隠してあだ名で呼ぶことも多いんだ」

・・・かなりアヤシイ船だ。

「僕は小鳥ちゃん、って呼んでいるけど、本名でも偽名でも構わないよ。まあ、小鳥ちゃんの場合、アレン・シーモア少佐がミアを返せ、ってうるさかったから、ミアって名前、ばれちゃってるけど」

シンと話している内に、どこかという足音が聞こえてきた。

「よお、大将！　なんか用か？」

大将は暇だったらしい。

「小鳥ちゃんにお部屋紹介してあげて。使える空き部屋あったよね？」

シンがいうと大将はグツと親指を立てた。

「おう！　日当たりは悪いが、なかなかいい物件、ありますぜ。ところで、小鳥ちゃんってえらく可愛い名前だな。俺のつけたデザートイーグルの方がピッタリだと思うが。眼にもとまらぬ弾丸のように宇宙を駆け抜ける幻の翼・・・」

ウツトリとした目つきで語り出す大将。

うつつ、勘弁してほしい。

「あの、ミアでいいです、大将。デザートイーグルはやめてください。お部屋、案内してください！」

私がいうと、大将は若干、悲しそうな顔をした。

「そうかい？　じゃ、ミア、行こうか。ついでにぐるっと艦内を案内しよう。そうだ、艦長の所にも挨拶にいつてこよう」

大将に連れられて救護室を出る。

「アース」とはだいぶ趣が違う。

「アース」は戦闘用空母として設計されているから機能的に作られている。

目的別にキッチリと分けられ、傭兵である私が出入りする場所は、限られていた。カプセルのような寝床、食堂、シャワールーム、保健室、娛樂ルーム、会議室、訓練室、戦闘機の格納庫、戦闘機、機械整備室。

が、この「ビッグマザー」はなんだろう？

どこか、暖かみがある。

貨物船を色々と改造したのだろう、いろいろ手を加えたあとがそこかしこに見られる。

廊下には大小様々なたくさんの扉が並び、迷子になりそうだ。

今まで渡り歩いた空母とは全く違う。

そもそも、戦闘用には作られていないのだろう。

廊下を歩いていると、小銭が落ちていた。

拾おうと屈むと、それは床に精巧に描かれた絵だった。

「あれ？」

「それ、頭上注意のために書いてあるの」

え？ と上を見あげると、なるほど、天井が一段低くなっており『頭上注意』の張り紙がしてある。

「頭上注意、って張り紙しても、そこで頭ぶつける人が後を絶たなかったから、画家が渾身の作で小銭を描いたのさ。宇宙紀元前の騙し絵に凝っていた画家がいてね。それからみんなここで屈むようになって、頭をぶつけないようになったんだ！」

大将は誇らしげに言う。

真剣にこんなことをしている連中に撃墜されただろうか。私は。

まあ、そんな具合に「アース」ではありえない作りになっていた。

「まず、部屋に案内しよう。どの部屋がいい？ 部屋の大きさもデザインもみんなバラバラだから適当にみて決めてくれ」

大将が個人用の部屋をみせてくれる。ちゃんとベッドがあり、小さなテーブルがついている。フォルムが優しい。部屋全体が柔らかな曲線でできていて、有機的だ。

「これをデザインしたやつが大昔の天才建築家ガウディとかいう人のファンらしくてな。その影響を受けているそうだ。案外好評だぞ」また誇らしげだ。

何にせよ、私が前いたカプセルとは雲泥の差だ。文句のつけようがない。

私は幾つか部屋をみせてもらい、『物語の中のリスが住む居心地の良い巢穴』のような部屋を選んだ。

「んじゃ、次は食堂。三食ここで食べられる。自炊したければ、簡易キッチンもあるけれど、食堂のメシ旨いから、たいていみんなここで食っている」

食堂は食事時ではないのでガランとしていた。食堂自体は「アース」とあまりかわらない。

「んじゃ、次は農場。合成タンパク質とかじゃなくて、ウチは昔ながらの方法で牛や豚や鶏や食用ワニを増やして、別のコロニーに卸しているんだ。結構高値で売れる。他にもたくさん野菜果物を作っている。船でここまで大きな食料生産基地を持つて自給自足できるのはウチくらいだ」
またまた誇らしげだ。

大きな2重扉の向こうは広大な農場だった。
機械も人間も働いている。工場のような作りかと思っていたけれど、昔ながらの農場に近く、レトロな感じだ。

廊下に赤い大きな毛玉が落ちていた。

毛玉はムクリ、と起き上がると、ヨタヨタ歩いてきた。

「ギャー！」

飛びつこうとするので、慌てて止めた。

コイツ、重いのだ。オラウータン。私の友達。

オラウータンの手を握ってやると大人しく握り返してくる。
温かくて少し乾いた感じのする手だ。

「ミアにすっかりなついちゃったな」

大将は面白そうにいう。

「他にも工房やら博士たちの研究室やらいっぱいあるけれど、先に艦長のところ、挨拶にいこう。いっておくけど、おっかない女だからな。礼儀正しくな。嘘とかついてもバレるからな」

そういわれてふと思った。そういえば、嘘をついたことがない。

嘘というのは、嘘を聞いてくれる人がいて、初めて成り立つ。嘘をつく前に問答無用で殴られていたので、嘘をつく必要が、なかった。

階段を上がり、ブリッジに出る。

「カーラ艦長、この前捕まえたデザートイーグルを連れてきたぞ」ブリッジは広く、大きな窓からは宇宙が見えた。

広大な宇宙を前に悠然と立っている女性。

存在感とエネルギー、全てを引きつけるような強さをもった女性だ。赤い髪が波うち、肩にかかっている。

「ああ、この前の子か。何だ、ウー太も一緒なのか」

カーラ艦長が口を開いた。

ウー太？

ああ、オラウータンのことか。

私とウー太は顔を見合わせた。

ウー太が笑った。

「ミア・アランフェスです。厚遇感謝します」

私がいうと、カーラ艦長は微笑んで右手を差し出した。

「私はカーラだ。顔色が良くなったな。宇宙船『ビッグマザー』に歓迎する」

11 マッド博士

セクサロイドのN209は私の手を握っていた。

「エヌ、大丈夫？ 怖いのか？」

N209をみても、その表情からは何も読み取れない。

「大丈夫。・・・初期化すれば、怖いという概念も消えるはず」

昨日、永世中立衛星ロペに寄港した。

荷の積み下ろしや人の行き来で船は活気づいている。

トラベラーズのマッド博士が乗船し、セクサロイド、N209の治療を行うことになっている。

治療といってもウイルス汚染されている彼女を初期化するだけだ。

マッド博士ときいて、「ちょっと逝っちゃった系の壊れた科学者」を想像していたが、物腰の優しい美しい男だった。若いようにも中年のようにも見える年齢不詳の男だ。科学者らしい白衣ではなく、安っぽい迷彩色のシャツとズボンを身に着け、プラチナブロンドの髪を後ろで束ねている。恰好と雰囲気がちぐはぐで激しく浮いている。

私とN209は手をつないだまま、ぼんやりとマッド博士をみていた。

「おや。どちらがN209かな？」

マッド博士は悪戯っぽい笑みを浮かべ、私達を見比べた。

セクサロイドに似ているといわれるのが嫌で、自分の容姿が大嫌いだった。けれど、本物に出会ってから不思議とそういった負の感情は消えている。

N209は無表情のまま私をみたけれど、それが人間の感情で言うところの「不安」であることはわかった。

N209をみてうなずき、手をぎゅ、と握る。大丈夫。

そんな私達の無言のやりとりをマッド博士は興味深そうに見守っていた。

「エヌの記憶、消えちゃうの？」

私がマッド博士に尋ねると、博士はうなずく。

「本来N209の「記憶」は所有者であるマスターのためのものであって、N209の生存には必ずしも必要ないのだよ。もともと所有者が替わる度に初期化する設定になっている。今回はどこで拾ったのかウイルス感染してしまっているからね。最近多いんだよ。アンドロイド排除を訴える狂信的な宗教団体がいて、アンドロイドを狂わせるウイルスをばら撒いている。暴走して自爆したアンドロイドもいる」

マッド博士は顔をしかめていった。

「それでも、アンドロイド達が壊れれば壊れる程、ヒトの感情に似てくるのは皮肉だね」

そういわれて、私とN209は顔を見合わせた。

「じゃ、はじめようか」

N209はぎゅっと私の手を握った後、離れた。

さよなら。

小さな声でN209はそういった。

初期化とやらはあつけないほど、簡単に終わった。

時間にすれば一時間程度だろうか。

横になっていたN209が目を開ける。

澄んだグリーンアイズ。

最初に会ってほしい、といったN209の言葉を思い出して、そばに行く。

いつも無表情だったN209は、微笑んだ。

完璧な洗練された笑顔で。

もう、無表情だったN209はどこにもいないのだろう。
でも、私は無表情なN209が好きだった。

12 お風呂の法則

オラウータンのウー太と私は2匹1組で農場の手伝いに駆り出されている。

農場の構造は驚く程レトロだ。昔の田園風景のイメージに近く、生産性が悪そうだが、これは巨大な実験場も兼ねているらしい。テツさんという農学博士の貴重な研究材料がぎっしり詰まっている、ということだった。私には晩御飯の材料にしかみえない。

ウー太は高い所が平気だし、手先も器用なので意外に重宝する。でも、やっぱり少々おバカなので、微妙な戦力だ。かくいう私も戦闘機以外まるで駄目なので、2匹で0・8人前、といったところか。

今日は最悪だった。ウー太が堆肥置き場にダイブしちゃったのだ。^{たいひ}堆肥といっても、まだ生の糞に近い状態のヤツ。そこに何を思ったのかダイブしちゃったものだから、当然糞まみれになった。仕方なく家畜の洗い場でウー太を洗ってやったけど、なかなか二オイがとれない。人間用のシャワールームでゆっくり時間をかけて洗うことにした。

シャワールームやランドリー関係が集めてある部屋、通称「お風呂の間」の一番広いシャワールームを陣取り、ウー太を押し込む。自分もなんだか臭いような気がしてきたので、服を脱いで一緒に入った。モコモコに泡立てて洗ってやるとウー太は喜んだ。

シャワールームのドアの鍵をかけ忘れていた私がバカだった。興奮して浮かれまくったウー太は泡モコモコのまま、外に飛び出していた。あわててバスタオルを引っ掴むと後を追う。

「ウー太待ちなさい！この、おバカ！！」

「びやはびやは」

「まてい！」

まずい。おっかけっこで、余計にウー太のテンションがあがっている。

シンがいきなり「お風呂の間」の戸をあけて、入ってきた。

「小鳥ちゃん、ウー太の健康診断やりたんだけどお風呂終わった？・・・って、わああ小鳥ちゃん何やってるの？？」

シン？ 何でここに？

「だって、このバカザルがつ、逃げ出してっ！！」

ウー太は大喜びで逃げようとする。

毛ナシザルのバカザルがもう一匹。

私だ。

泡まみれで、裸でサルと取っ組み合って、何やってるんだろう。

シンの目にはバカザルが2匹に見えるだろう。

「こ、小鳥ちゃん、ウー太は僕が捕まえるから、早く服着て！」

シンが顔を赤らめながら、でもしつかり私をみていった。

「ごめん」

シンにバスタオルを投げると、シャワールームに駆け込んだ。
急に恥ずかしくなる。

シン、ガン見してなかった？
してたよね。

1 再会

ルークから連絡が届いた。

永世中立衛星ロペにルーク傭兵隊長が来ている。

そういえば、ルークはもう退職してしまったから、「傭兵隊長」ではない。

アレン・シーモア少佐が捕虜交換の要請をしてきたとき、一度は「アース」に戻ろうと思った。ルークも「アース」にいたから。でも、大將はルークも「ビッグマザー」によんでもいいといったのだ。そして、ルークと連絡をとれるように取り計らってくれた。

「大將！ ルークが到着している。迎えに行ってもいい？ 乗船させてもいい？」

私がブリッジへ行くと、大將とカーラ艦長も来ていた。

「迎えに行ってもいいけれど、彼には身体検査と、面接を受けてもらう。それで不合格なら乗船は拒否するからな」

カーラ艦長がいった。

もっともな話だ。

私はうなずいた。

「じゃ、行つてきまーす！」

衛星ロペに降りるのも初めてでワクワクするし、ルークにやっと会える。

「ミア、気を付けていけよ。一応、これ持って行け。ここ（ビッグマザー）と連絡が取れる。それからお小遣いやるよ。ロペの通貨だ。アイスクリームでも買い食いしてこい」

大將が小銭と、小さな端末をくれた。

「大將、ありがとう！」

私は駆け出していた。

あいすくりーむってなんだろう。

ルークから連絡のあった場所は、すぐ近くの小さな公園だった。

「ルークー！」

公園に佇んでいたルークは私を見つけると、大きく手を広げた。

「ミア！」

ルークの少し痩せたその胸の中に飛び込む。

私は反対に血色も良く、少なくとも3キロは太った。

ルークにきつく抱きしめられながら、ルークの鼓動を聞いていた。

ことことことこと。

安心な音がした。

私が生きている間にこの音が止まりませんように。

極めて身勝手なお願いを神様にする。

ことことことこと。

簡単な衝撃で、一瞬の判断ミスで、それは、止まる。
それをいつもみてきた。

「ミア、元気そうだな」

私は顔を上げて、ルークを覗き込んだ。

「・・・ルークは痩せたね。何か、おいしいもの食べに行こう。大将がお小遣いくれた」

ルークは驚いた顔をした。

「ミアから何か食べようと言い出すなんて、珍しいな。よかったよ。前より、健康そうだ」

「うん。とっても元気だよ」

私がそういうと、ルークは泣きそうな顔で笑った。
私を抱きしめたまま動かない。

目をとじてもう一度ルークの胸に顔をうずめる。
ルークの匂い。ルークは変わらない。

「おいしいもの！ 食べに行こう！」

私はルークとしっかり手をつなぐと、歩き出した。

自分はずっと、食べ物に興味がないと思っていた。でも、案外食いしん坊だということが、「ビッグマザー」に乗船してからわかった。
動くためのエネルギー源でしかなかったそれは、今や私の最大の関心事の一つだ。

屋台が並んでいて、その一つ一つに美味しいものが並んでいて、その一つ一つから別々のおいしい匂いが流れてくる。

幸せだ。

たぶん、生まれてから一番。

ルークの手をぎゅっと握って、ルークを見あげる。

ルークも私をみて微笑んだ。

「これ何だろう？　爽やかな匂いの黄色い楕円形の果物。オラウータンにお土産に買っていこう」

山積みになされた果物の一つを手にとる。
私達は市が出ている一角に来ていた。

「オラウータン？」

「うん。私の友達。果物が好きなの。あれ、なんだろう？」

丸いものが鉄板の上に並んでいる。
良い匂い。香ばしい、何とも形容できない匂いだ。

「たこやき、という食べ物だろう」

ルークは物知りだ。

「たこやき？」

「ああ。一昔前、開拓惑星オオサカからきたオカンとかいう人が広めた食べ物だ。食べてみようか」

それは未知の味がした。

「とても良い味だと思う」
「そうだな」

たこやきを頼張る私をルークは幸福そうにみている。
すぐく、おいしい。

「そういえば、ルーク面接受けるんだって。あと、健康診断も。でも、ルークなら大丈夫よ」

私はたこやきを食べながらいう。ルークなら大丈夫にきまっている。

「どうかな。傭兵とはいえ、ブーランクの軍事に長く関わってきたからな。スパイだと疑われたらアウトだな」

私は女艦長カーラを思い浮かべる。

私は面接を受けていない。

私が気を失っている間に、艦長や大将達で受け入れを決めたらしい。女艦長のカーラはいつも冷静だ。でも、カーラが酒を飲む姿はヤケ酒を煽っているようにしかみえないし、余裕のある微笑みも何故か地獄の底から這いあがってきたような凄みを感じる。

ルークと手をつないで、「ビッグマザー」に戻る。本当に大きな宇宙船だ。この中に住んでいる人のほんの一握りしか会っていない。「ビッグマザー」に乗船しているときも、こうして降りたときも全貌が見えない。

スカイタワーからエレベーターに乗り、そこから宇宙船に接続される。

エレベーターに乗る前にふいにルークに柱の陰にひっぱりこまれた。

「何？」

「ミア、会いたかった」

ぎゅっともう一度、ルークに抱きしめられた。

2 面接

ルークと手をつないでもどると、「ビッグマザー」の玄関スペースで出迎えがあった。

大将と、オラウータンのウー太。

「よお、お帰り。お前が傭兵隊長のブルーバロンか。戦陣を切り裂く一筋の・・・」

何そのネーミング。今度はどっからとってきたのやら。

大将の相変わらぬセンスにウンザリしていると、ウー太が私とルークの間に突進し、割り込んできた。

「ぎゃぶ」

ウー太は何故かご機嫌斜めだ。

「ウー太におみやげたよ」

買ってきた黄色い爽やかな香りのする果物をあげたのに、匂いを嗅いで、ポイ、と捨ててしまう。

「ウー太、ひどい。せっかく買ってきたのに。果物、好きでしょう？」

ウー太は私の言葉も、黄色い果物も無視して、嬉しそうに私の手を握る。

ウー太は私をみて、シシシ、と歯を剥き出して笑った。

玄関スペースを抜け、エアシャワーと簡易消毒の部屋を抜けるとシ

ンが待っていた。

「小鳥ちゃん、おかえり」

につこり笑って言うシンを、ルークは怪訝そうに見た。

「小鳥？」

「私のことよ。ドラッグなしじゃ飛べない小鳥」

説明すると、ルークは不機嫌そうな顔をした。

ルークには「小鳥ちゃん」の愛称は不評らしい。デザートイーグルよりはよっぽどいいし、私は気に入っているのだけれど。

「あなたが、ブルーバロンさん？ はじめまして。あなたの健康診断を担当するシン・ジルフィードです。さっそくだけれど、検査室にきてもらえる？」

シンはルークに向かって言うと、さっさと部屋を出ていく。

ルークも仕方なくその後についていった。

ウー太がルークの後ろ姿をみて、シシシ、と笑った。

・・・・・・・・・・・・・・・・

ルークの面接は立ち合い自由、ときいて、私も一緒にいることにした。

健康診断の結果は良好ということで、クリア。

ドラッグ漬けの栄養失調の私でもOKだったしね。

面接は、大将と、カーラ艦長と、もう一人いるらしい。

面接用の会議室には既にルークが落ち着いた表情で座っていた。
ルークは大抵のことには動じない。

目の前で故郷のコロニーが爆発したのをみてるし、何度も死にかけ
てるし。

「ブルーバロンって、またお前の書き込みか！ 余計な事、かくん
じゃない」

手元のモニターをみていたカーラが大将をどついた。

「まあまあ」

品の良いおじさん——レントン博士、とカーラ艦長が呼んでいた——
が、とりなす。

「じゃあ、さっさと終わらせるぞ」

始めるぞ、じゃなくて、終わらせるぞ、というところがカーラ艦長
らしい。

「ルーク・アロンソ。ファーストコロニー出身。難民登録済み。こ
れでいいか？」

カーラがモニターを読み上げる。

「はい」

「特技は？」

「個人用戦闘機の類はたいていどの年代のものも乗りこなせます。

機械整備も少々。」

ルークが落ち着いた表情で答える。

「腕前は大将が直接みているし、問題ないな。あとは乗船理由と乗船期間だが……。乗船理由はミアがいるから、だったな。期間もミアがいる間ずっと、か。ミアが他の男に盗られたらどうする？」

な、何いつてんの、艦長。

「盗られる、とかミアはものじゃありませんから。ミアはミアです。同郷のとても大切な人です」

ルークは落ち着いた表情を崩さない。

「へー、余裕。ミアを大好きな奴いるんだよ。この前なんか、一緒にお風呂入っていたらしいな」

大将。それは、ウー太のことですね。

「え……。お風呂？ それは……」

戸惑ったルークが私をみている。

「オラウータンのことでしょ……!!」

私が立ち上がっていうと、レントン博士はやれやれ、といった様子で立ち上がった。

「私はルークの乗船に賛成ですよ。後は、好きにしてください。研

究が途中なので、失礼しますよ」

呆れ顔でそういい、レントン博士は部屋を出て行ってしまった。
カーラ艦長が大将を睨む。

「お前、アホか。もっと真面目にやらんかい！　まあいいか。どうせ採用予定だったし。なにせ、万年人手不足だからな。大将、ルークに戦闘機や格納庫、みせてやれ」

あつけなく艦長はそういうと、大将とルークを部屋から追い出した。
面接終了？

いいの？　こんなんで。

「いいな。好きあつてるって」

カーラ艦長は笑いながら私の鼻を指でつついた。

ちよつと、驚く。カーラ艦長にそんなことを言われるとは思わなかった。

「すきあつてる、のかなあ・・・？」

素直な気持ちちが口から出る。

「違うのか？」

カーラ艦長の少し低めのハスキーボイスは耳に心地よい。

「ただ大切なんです。お互いに。もうない故郷や、昔の楽しい記憶

の代り、みたい。だから、恋愛とか、そういうのと少し違いかもしれない。故郷を愛する気持ちと同じ。もうないだけに、一層強くなってしまうだけ」

カーラ艦長は、少し笑った。

「素敵な故郷だったんだろうな」

私は躊躇する。

小さい頃から、戦闘機に乗る訓練をしていた。

両親もいた。

みんな、忙しかった。

破滅に向かって。

私の中で、確かに大切な故郷だし、大切な思い出と思う。それでも今より大切なときはないはずだと思うし、そう信じたい。ルークの真剣な眼差しは過去に囚われすぎているような気がして、ほんの少し息苦しく、寂しく感じることもある。

今の私ではなく、私を通して、もう決して蘇ることの無い故郷ばかりをみているようで。

「そうか、ファーストコロニーはもうないのだったな。ごめん・・・
。軽率だった」

カーラ艦長は謝ってくれたが、それも、違う。

「いいえ。カーラ艦長の故郷はどこですか？」

少し、気分を変えるようにいう。

「ああ。地球だ。青い宝石といわれる」

そういつて、艦長は微笑んだ。

微笑んでいるのに、淋しい顔だった。

この船、いっっぱい後ろ暗い人が乗ってるから、とっていたシンの言葉を思い出す。艦長も遠い所に何かを置いてきた人なのかもしれない。

艦長はニコリと笑って私の頭にポン、と手を置く。

「幸せになろうな」

プロポーズのようにクサイセリフをはく艦長に噴出した。

「はい。幸せにします」

ルークを。ウー太を。シンを。艦長を。

3 惑い1

惑星ロペの寄港は20日間の予定だ。

その間に必要な荷の積み下ろしや、色々な渡航手続き、人の乗り降りがあるらしい。

出航まであと2日というとき、大將が困惑した顔でやってきた。

「ミア、お前と会いたいという面会申し込みがきているんだが。アレ・シーモア少佐だ。どうする？ もうすぐ出航だし、理由をつけて断ることも可能だが」

少佐が・・・？

何かの感情が滑って行くのを感じるが、つかむことができない。

私は完全に「ビッグマザー」に馴染んでいた。「アース」に戻りたいとは微塵も思わない。

「あの男もたいがいしつこいな。ことわっちゃおうか？」

大將はいう。

アレ・シーモア少佐。「アース」の正規職員の中で、彼だけが私の健康を気にかけてくれた、というか人間として見てくれた。自分の抱いた女が翌日に敵艦の捕虜になったら、気にはなるのかもしれない。元気だといえば、安心するのだろうか。でも、なぜか、会うのが怖い。

「機密とか、そういう意味で、敵艦の人と会うのは不味くないんですか？」

「そうはいっても、ここは永世中立惑星だからな。ここに寄港している間は、自由に連絡がとりあえるようにすること、諍いを持ち込まないことが義務付けられている。領空侵犯で多少トラブルがあったが、プーランクとウチが開戦しているワケでもないし、何処の国の誰と会おうと問題ない。ただ、乗船メンバー等しゃべられると困ることもあるが・・・。特にプーランクの連中には・・・」

大將はいいよどむ。

亡命とか、追われている人とか、いろいろ事情があつてあまり内情をばらされるのはマズイのかもしれない。

「こちらの船のことは、一切もらしません。でも、少しだけ、会つて話してもいいですか」

私が言うと、大將は心配そうな顔をした。

「付き添った方がいいか？」

・・・それは・・・。

私は首を横に振った。

「いつて、すぐ戻ってきます」

「わかった。・・・申し訳ないが、通信記録を付けさせてもらつ。」

私は頷き、小さな端末を受け取る。

スカイタワーのロビーに少佐はいた。

エレベーターが開いたとたんに、少佐の姿が目に見えびんできた。
何かの感情が湧き上がるのを感じるけれど、それが何かわからない。
少佐は流れるように歩いて私のそばまでくる。

「無事だったか」

少佐はまるで恋人にするかのような自然な動きで私の腰を抱いた。

「・・・・・・・・」

「心配した。捕虜交換も、ミアではなく戦闘機が帰ってきてしまっ
たし。でも・・・、元気そうだな」

そういつて、少佐は私の頬を撫でた。

「傭兵隊長のルークには会ったのか？」

そういわれて、これは「ビッグマザー」側の機密にかかわることな
のだろうか、と心配になる。話してはいけなのかもしれない。

「ルークはお前が囚われたあと、退職届を出してやめてしまったが」

少佐は私の目を覗き込んでくる。

暫く答えを待っていたようだが、私が沈黙しているので、あきらめ
たように息をついた。

「いこう」

少佐は私の肩を抱いて、歩き出した。

「ちょっと、待って。どこへ？」

私はそういつて少佐を見あげたが、少佐は不機嫌な顔をした。

「どこだつて、いいだろう。少し、歩こう」

半ば引きずられるように、少佐についていく。

「・・・少佐？」

しばらく少佐は無言のままだった。

スカイタワーから出るつもりらしい。

「戦闘機が戻ってきたのは、ミアの意志なのか？ ミアはもう、「アース」には戻りたくなかったのか？」

そういわれて、少佐が無理をして私を呼び戻そうとしてくれていた事実には思い当たった。捕虜交換の話があった時、単純に驚いただけだった。

でも、考えればわかることだった。

ベビードールとからかわれている傭兵と一夜を過ごし、その傭兵が敵艦につかまったのを取り戻そうとした。それがどれほど大変なところか。嘲笑や侮蔑。特に少佐のようなエリートとよばれる男への風当たりは相当に強かったであろうことは想像に難くない。

「・・・飛べないんです。戦闘薬なしじゃ。でも、体ももうぼろぼろで。もう、戦闘薬を長く使える状態ではなくて。だから、もどつても、もう」

私に居場所はなかったんです。

言葉を飲み込む。

少佐は少し遠くをみる目をした。

「……今は、どうしている？」

この答えも難しい。

「戦闘機乗りとは別のお仕事をしています。でも、ほとんど食べさせてもらっているだけかも」

私がいうと、少佐は歩みを止めた。

「誰に？ 誰か知り合いがいるのか？」

私は戸惑った。

少佐は私が個人的に誰かに面倒をみてもらっていると思っているのだろうか？

「アース」には空母としての役割があり、乗組員は階級がすべて決まり、仕事も何もかもきちんと割り振られ、給金に対し労働していた。「ビッグマザー」は全く違う。あれは、たぶん一つの村だ。脛に傷を持つ者同士が身を寄せ合って暮らしているような、へんてこな。

何を、どこまで話していいのかよくわからない。

「誰、ということではなくて……。その、あまり話せないんです。少佐は一応、敵の艦の方だから。少佐のお話を聞くことも、私の話

をすることも、お互い困ることになるだけだと思っから」

そういつて、私は小さな端末を取り出してみせた。小さな端末は私のいる場所や、会話など、全て「ビッグマザー」で傍受することを可能にする。少佐なら端末をみれば、それが何を意味するかわかるだろう。

「敵ね。俺が？」

自嘲するように少佐が笑った。

「少佐は、敵じゃ、ありません。でも・・・」

でも、なんだろう？ 自分で自分がわからない。

「いいよ。ミアは前よりずっと元気そうだし、生き生きとしている。ただ心配だっただけだ。敵艦に捕えられたミアがづらい目にあっていないか、気が気じゃなかった。それだけだ。杞憂ならそれにこしたことはない」

私の言葉を遮るように、つきはなすように、少佐はいった。

スカイタワーの周りには、ホテルや公官庁、ショッピングモールなどの高層建築物が所せましと建っている。その間を縫って、日当たりの悪い露地に小さな公園や市場、取り壊しかけた建物にテントを張っただけの簡易な住居などが雑居している。

スカイタワーと、ホテルやショッピングモールが入った建物をつなぐ渡り廊下の途中で私達は向き合って立ち止まっていた。

無理をして私を「アース」に呼び戻そうとして、こうして今も心配して会いにきてくれた。

簡単なことじゃない。

でも、どうしてそこまでして。

少佐を見あげて、不意に理解した。

つきはなすような口調とは裏腹に、 그레이の瞳は私を見つめていた。

逃げなきゃ。

卑怯な自分が思ったのはそれだけだった。

抱きしめられたら、落ちる。

少佐の腕の中に。

でも、少佐に連れて行かれる場所に、私の居場所は、無い。

そう思っても、動けなかった。

馬鹿みたいにずっと少佐を見あげたまま、動けなかった。

腰にまわされた手に力が入るのがわかってても。

「一緒にくるか？」

いつもの低い声で少佐はいった。

いくら考えても、少佐と一緒にいる自分が思い描けない。

どう考えても、「アース」に自分の居場所があるとは思えない。

「飛べないなら、宇宙へ出るのが嫌なのなら、地上で待っていてくれ。プーランクの首都に俺の家がある。そこで・・・俺を待っていてほしい」

あの夜を思い出す。

怖くて気が狂いそうな夜。

少佐は温かった。

力強い心臓の音と温もりは私を落ち着かせた。
もし、心臓の音で雄を選ぶなら、私は間違いなく少佐を選ぶ。
でも……。

知らない国の、知らない場所で、ポツンと、少佐の温もりを待つ自分がわからない。危険な任務を常にこなし、いつも忙しい少佐を待つ自分が思い描けない。幸せな構図が思い描けない。本当は違うのかもしれない。面白おかしくプーランクで暮らせるのかもしれない。でも、どの未来もどうしても思い描けなかった。

少佐と自分が一緒にいる未来がどうしても思い浮かばない。
ウー太や、シンや、カーラ艦長や、ルークや、農場の牛と一緒にいる未来はカラフルに思い浮かぶのに、「プーランク」も「少佐」も灰色の混沌の中に沈んでしまう。

身分が違うから、というのではなく。

生まれた国が違うから、というのではなく。
たぶん、生き方が、生きる世界がまるで違うのだろう。少佐とは。たとえ、同じ戦闘機乗りだったとしても。

私は首を横に振った。

「無理です」

そっさいながら、淋しくて仕方なかった。
泣きそうだった。

心のどこかで連れて行ってくれ、と泣き叫んでいた。
少佐の両腕に力が入り、抱き寄せられるのがわかった。

「帰ろう、小鳥ちゃん」

ふいに後ろから声がして、少佐の手が緩んだ。

シン？

シンはオラウータンのウー太を背負って立っていた。

窓から差し込む光が、シンの金色に近い髪とウー太の赤い毛をやさしく照らしていた。

ウー太は器用にシンの肩のあたりに重心を寄せ、シンの頭の上にちょこんと頭を乗せている。

ウー太は私に気が付くと、するするとシンの背中からおりてきた。

「帰ろう？ 小鳥ちゃん」

シンはもう一回言って、手を差し出した。

ウー太はよたよた、ごそごそと近づいてきて、当たり前のように私の左手を握った。

私は、ウー太とシンに両手を握られて、強制送還されるみたいに、「ビッグマザー」に戻った。少佐は、もう何も言わなかった。ただ、私が連れて行かれるのを黙って見ていた。心が引き裂かれるような気がした。

私はその日、泣いた。

ずっと、泣いていた。

どうして泣くのか、よくわからなかった。

自分の部屋に閉じこもって泣いた。

シンは締め出したけれど、ウー太は締め出しそこねたので、ずうつと横にいた。

朝起きると、頭がいたくて、ぼおとした。

横にはウー太がすやすやと平和に眠っていた。

4 惑い2（前書き）

少佐視点です

4 惑い2

ミアが囚われた船「ビッグマザー」の渡航ルートはわかっている。概ね3つのコロニーを順番に巡回している。自分の日程と、星やコロニーを結ぶシャトル便などを考慮し、「ビッグマザー」と接触できる場所と時間を割り出す。永世中立衛星ロペへ寄港しているのが20日。これを逃せば、もうミアと会えない。行ったところで、ミアと会える保障もないが。

永世中立衛星に寄港している間は、どの国のどの船も自由に連絡をとりあえるようにしておくことが義務付けられている。本国どうしが開戦していても、ここでは一時休戦しなければならない。それゆえ、重要な国際会議や、スポーツ祭典、学会など数多くのイベントがここで行われている。

「ビッグマザー」の公用メールに用件を書き込むとすぐに許可の返事がきた。少し驚く。緊急回線を使用しなければ、連絡すらとれないと思っていた。

「ビッグマザー」が停泊している「スカイタワー」という建物のロビーでミアと会えることになった。あっけなさに驚く。これなら無理して捕虜交換などする必要もなかった。女医のルーナはこういつたことも見通していたのだろうか。停泊しているのが、永世中立衛星でなければ会えなかったのかもしれないが。

エレベーターの扉が開くたびにミアが出てこないか見ていた。エレベーターの扉が開いた瞬間にミアがいるのがわかった。

目に飛び込んできたミアは、自分の知っているミアとは随分違っていた。

青白かった頬は、ほんのりと桜色になり、少しふつくらしている。どことなく影のあった瞳も真っ直ぐで強い光を帯びていた。

ルーナ女医は無事だろう、といっていたが、拷問でもされていたらと思うと気が気ではなかった。が、ミアを見る限り、暗い影は一切見当たらない。逆に健康になった、といって間違いないだろう。細いミアの体を抱き寄せると、前より肉がついているのがわかった。しっかり食事をとれているのだろう。

ミアの腰に手をまわしながら、自分が来たことの無意味さを悟った。自分がいなくても、ミアは幸せになっている。

ルークにも会ったのかもしれない。ルークの事を尋ねると、言葉を濁した。ルークのことを聞いてこないということは、ルークと連絡をとっているか、もう会っているかのどちらかだろう。

あまりミアは自分の事を話したがらなかった。俺を敵艦の人間、と見なしているようだから、こちらに戻る気も無いのだろう。ドラッグを使って恐怖を沈め、危険な任務ばかりおしつけられ、かといって昇進や昇給とも全く縁が無く、未来も無い。無理やり流動食で食事をし、たまに暇になるといつもネコとネズミのおっかけっこのアニメをみている。いつも同じアニメだ。そんな場所に戻りたいはずがない。

自分はミアを救い出せると思っていたし、救わなければならないと思っていた。

自分のそばに置き、守り、愛するつもりだった。ミアからドラッグを取り上げたら、パニックになって宇宙に出られなくなる、というのは実証済みだ。難民の飛べない戦闘機乗りを「アース」に滞在させる理由が無い。それでもミアを守り、そばに置

くには法的に自分のものにするしかない。そうすればいいと思ってここに来た。でも、ミアは守る必要もなく、救う必要もなく、自分の足で真っ直ぐに立っているように見える。

奇妙な少年がミアを迎えにきた。
頭にサルを乗せた少年だ。

「帰ろう、小鳥ちゃん」

少年の声は小さいけれど不思議とよく響いた。
なぜか、かなわない、と思った。

信仰心はあまり篤い方ではないし、聖職者など胡散臭い者も多いと思っている。それでも、一度だけ本物の聖職者にあったことがある。物静かな老人だったが、その老人の周りの空気だけ、他とは違っていた。静かで優しい明るい空気をまとっていた。

少年は何故かあの聖職者を思い出させた。

少年がまとう澄んだ明るい空気はあの聖職者とよく似ていた。

「帰ろう？ 小鳥ちゃん」

少年はもう一度言った。

ミアの手を少年とサルがとり、一緒に帰っていつてしまった。
お伽噺のワンシーンをみているような、不思議な気分だった。

5 はちみつれもん

ぼおっとする。頭が痛い。

フラフラ歩いて何となく救護室をのぞく。

シンがテキパキと働いていた。

何してるかよくわかんないけど。

シンがこっちに気が付いて手をふったので、戸を開けて入る。

「シン、頭痛い」

私がいうと、シンは私の顔をじっとみて、いっぱい泣いたんだね、といった。

「頭痛いなら、お薬をあげるよ。座って」

シンはそういうと、ビンをもってきた。

ビンの中には黄金色の液体と輪切りになった蜜柑が入っていた。

「ハチミツレモンっていうんだよ。口を開けて」

シンは、はちみつれもんを、そっとすくって、一枚口に入れてくれた。

「はちみつれもん？」

「そう。ハチミツレモン。レモンはこの前ウー太がポイしたやつを失敬したんだ」

じわって、冷たくて、甘酸っぱい味が口に広がる。

「おいしい」

もう一枚はちみつれもんをくれるといいのになあ、と思ってビンを見て、シンを見あげると、シンはおかしそうな顔をした。

「気に入った？」

シンは私の目をのぞきこむと、優しく笑った。

6 大切な気持ち

ルークの部屋は、私の部屋の隣の隣だ。

私の隣の部屋は空き部屋になっていて、みんなが持ち寄ったガラクタ置き場になっていて、無人フリーマーケット状態になっている。

「ルーク、タオルもらってきたよ」

私もルークも荷物がほとんどない。

タオルや服など、中古がもらえた。重宝する。

「ありがとう」

ルークが荷物整理をするというので手伝いにいったけれど、もう終わっていた。

ルークはベッドに腰を下ろして、のんびりしていた。「アース」にいた頃はどこか荒んだ感じがしたけれど、今は余裕を感じる。

たぶん私の部屋と同じ大きさのベッドなんだろうけど、ルークが座ると小さくみえる。

ルークの部屋は、潔い青と白をベースにした青空に浮かぶ島みたいな部屋。

タオルを小さな洗面台の横の棚に入れる。

一部屋毎にちゃんと洗面台が付いている。すごい、と思う。

棚の中まできちんと色が塗ってあり、細々した小物の絵が描いてある。

コップとか、タオルとか。

きつと、あのだまし絵好きの人が描いたに違いない。

「ミア」

いつの間にか、すぐ後ろにルークが立っていた。

「なに？」

私は聞いたけれど、ルークは無言で後ろから柔らかく抱きしめてきた。

しばらく、ずっとそうしていた。

ルークの体温が心地よい。

「大將が教えてくれたけれど、家族用の部屋もあるんだって」

ルークは後ろから抱きしめたまま、いう。

「うん・・・？」

「一緒に、住もうか」

ルークと一緒に住める。

信じられない。

夢みたいだ。

「うん！ 住む！」

私は即答した。

ずっと昔、ひどい空母にいた。

女部屋に複数雑魚寝。

しょっちゅう警報が鳴り、ボロい戦闘機で宇宙に出た。

ルークも同じ空母に雇われていた。

ドラッグはもらえたけれど、給金はスズメの涙だった。

でも、そのスズメの涙から、金魚の涙くらいの貯金をしていた。いつか、お部屋を借りて、一緒に住もうね。

ルークと約束して、2人でお金を貯めた。

貯めた所で、2人で住める場所なんてあるとは思えないけれど、信じていた。

いつか。

でも、せっかく貯めた金魚の涙くらいの貯金も、貨幣価値がかわり、消えた。

それ以来、あきらめてしまっていた。

今も毎日働いてはいる。

私はまだ満足な働き手とはいえないけれど、艦内の人々の衣食住くらいはどうかなるらしい。

右も左もわからないけれど、ウー太と一緒に教えてもらいながら、

鶏の世話をしたり、掃除をしたり。

鶏のつかまえかたも覚えた。

足の付け根を2本一緒につかんで即、さかさまにする。

そうすれば、つつつかれない。

この前は鶏に注射をした。

毎日体を動かして、ご飯がおいしくて、眠れる場所があつて。

その上、ルークと一緒に暮らせるのだろうか。

本当に、夢みたいだ。

ルークは私の頭にキスをした。

「じゃあ、一緒に住もう。・・・さすがにまだ、俺も艦の中のこともわからないし、仕事もまだだから落ち着いたら、きっと」

私は向きを変えて、正面からルークと向き合った。

ルークは真っ直ぐに私を見てくれている。

前みたいに、私を通して、昔を、もう無い故郷をみているんじゃない。

そう思うと、嬉しかった。

ルークの首に腕をまわし、キスをする。

「ルーク大好き」

そういうと、ルークは微笑んでいった。

「家族になろう」

故郷と故郷。

思い出と思い出。

わずかな希望とわずかな希望。

たくさんのお互いの中だけに共有してきた。

もう、家族よりずっとずっと近い存在だった。

でも、あまりに近い存在というのは、恋人のそれとは大きく違ってしまっていたのかもしれない。

それが何をもたらすのか、そのときはまだ気付けなかった。

7 終わり

毎日、忙しかった。

ルークも私も忙しくて、ちょっとしか顔を会わせていなかった。

別々の場所で働いていたし、行動時間がずれていた。

そんなことは今までにだってよくあった。

でも、体を動かして、美味しいごはんを食べて、ぐっすり眠れる。
私には天国だった。

農場での作業を終え、くたくたになって食堂に行く。
体を動かすとお腹が減る。

「よお、大将、食事か？」

大将が立っていた。

「はい。」

朝昼晩と食堂で食事が出る。

簡易キッチンもあるので、自炊している人もいるけれど、私は全食、
食堂で食べている。食堂の食材の生鮮食品のほとんどは艦内で作ら
れている。

私が一生懸命世話している鶏さんたちも、そのうちオカズになっ
ちゃうのだ。あーめん。

大将と並び、食堂のテーブルにつく。
少し遅い時間なのでわりと空いている。

「ミアはちつこいによく食うな」

大將は感心したように私を見るけれど、大將のような大食漢に言われたくない。

ふと、大將が眉間に皺を寄せて離れたテーブル席を見ているのに気づく。

「？」

ルークがいた。

すぐ隣には、女の人がいた。

2人は資料を広げ、話し合っている。

「ルークが技術指導をしているマーガレット・ハニガンだ」

大將は説明するようにつぶやく。

「技術指導？」

「ああ。ルークはどんな戦闘機でもすぐに乗りこなせるから、若手の指導をお願いしている。マーガレットは戦闘機の操縦はまだ半人前だから、ルークに指導を頼んだんだ」

大將は「ビッグマザー」の自衛・警備の総括をしている。

ルークも大將の元で、戦闘機乗りとして働いている。

今は特に危険な状況もなく、戦闘機が出勤するような事態にはない。大將がルークにマーガレットの指導を頼んだ、ということなら2人が一緒に食堂にいるのは不思議なことではない。

けれど、大將の眉間の皺は、おそらくルークとマーガレットの距離

が異様に近いことにあるのだろう。

2人を見たときに、一瞬違和感を感じた。

今までのルークには無い、親密な空気。

大将も同じことを感じたのだろう。

大将の視線に気が付いたのか、ルークが顔を上げ、手をあげた。

女の人、マーガレット・ハニガンさんも顔をあげてニコッと笑った。

私とルークも、戦闘機の乗り方の技術指導の生徒と先生だった。

私はもう戦闘機には乗れない。

ルークは真面目で良い人だ。

技術指導も丁寧に、真剣にやるはずだ。

自分ではどうしようもできない時間が、経っていくのがわかった。

次に見たときも、その次に見たときも、2人は一緒にいた。

一緒にいる、というよりは、寄り添っている、といった方が正しいような。

自分達が一緒にいたときとはまるで違っていた。

自分達は生き抜くための同志だった。

ただただ、生き抜くために互いの存在を拠り所に使っていた、とでもいうのか。

ほとんど分身ともいえる相手に憧れとか、そういったものを抱くこととはない。

恋愛は未来を想う気持ちだと思う。

憧れや未知も未来だと思う。

明るい未来を思い描ける環境の中で、お互いを知りあっていけるのか、

絶望に押しつぶされそうな中で、お互いの何もかもを共有してしま

ったのか。

その差は大きかったのかもしれない。

誰より大切な相手だけれども、恋愛には必要な何かをどこかで壊してしまったのかもしれない。

そして、新しい恋はやっぱり、同志愛などよりも勢いがあるし、強いのだ。

いろいろな何かが壊れていくのを目の当たりにしても、何もできなかった。

大將はときおり、心配そうに私をみたけれど、何もいえなかった。ルークはもう、一緒に家族部屋に移ろうとはいわなかった。

カードが揃えば、物事は簡単に変わっていく。

それから、ある日、突然にルークからいわれた。

彼女が、マーガレット・ハニガンさんが妊娠していて、結婚するつもりだと。

とつきの昔に2人は公認の恋人で、私はかやの外だった。

ごめん、と謝られたけれど、それはおめでとうと返すことしかできなかった。

艦内の明るい雰囲気の中、ルークとマーガレット・ハニガンさんの結婚が伝えられ、家族部屋へのお引っ越しがあり、お祝い会があった。

今まで会ったことの無い戦闘機乗り達が、大騒ぎしながら2人を祝福していた。

ある程度の事情を知っているのは、大將と、カーラ艦長と、シンだけだ。

面接に参加していたレントン博士もだけれど、博士はいちいちそんなこと覚えていないだろう。今日のお祝い会も最初の乾杯に顔を出して、後はいなくなっていた。

大將は、自分がマーガレットさんの指導をルークに頼んでしまった事を気にしていたけれど、そんなことをいつていたら、キリがない。カーラ艦長は生きていればいろんなことがあるさ、とつぶやいた。きっと、すっごくいろんなことがあったんだと思う。

シンは何もいわなかった。

ウー太はいつもと変わらず、ご機嫌でバナナを食べていた。

マーガレットさんはルークの隣で綺麗だった。女らしい魅力的な体型をしている。

私は自分の体を見下ろす。

成長期にドラッグを常用していたせいだろう。

子供のような体形だ。

たぶん、この先もそう変わらないだろう。

だらだら続くお祝い会を抜け出し、自分の部屋のベッドの上で膝を抱えて座っていた。
とても静かだった。

ルークのことを大切に思っている。

でも。

ルークはこれからはマーガレットさんを大切に守っていくのだろう。

ルークの中にあつた自分の存在意義が消えてしまい、自分を見失いそうになる。

行くべき場所も、帰る場所もないけれど、立ち止まれる場所もない。

1 疫病

シンが難しい表情をして、大将とカーラ艦長と話をしている。
どうしたんだろう、と私は足を止めた。

「次に寄港するハズレの星では、人の出入りを極力制限してください。ハズレの星や周辺コロニーで疫病が流行っています。病原が特定できていない上、感染ルートもハッキリしません。感染力は非常に強くて、子供や体力の無い老人は結構死んでいます。万が一艦内に病気を持ち込んだらどうなるか、大将ならわかるでしょう？」

シンの声は小さくても良く通る。

「しかし、ハズレの星から乗船してきた人をいちいち3日間も隔離するのか？」

カーラ艦長の困惑気味な声。

「はい。感染しているかどうかわかるのに3日かかるので、3日間隔離します。かなり強力に空気感染することがわかっています。ダクトを伝わって、一気に感染する恐れがあります。空調も全艦循環型から各ブース独立型に切り替えたい。「ビッグマザー」の設計図を用意させてください。それから空調整備やっているヤツをすぐに集めてください。」

シンの真剣な声には有無をいわせない強さがあつた。

つぎに「ビッグマザー」が向かう星はハズレの星、という変な名前の星だ。

未開風亜熱帯の開拓惑星で、一時人気の観光地にもなっていたらしい。

今は第一次産業が盛んな星の一つで、「ビッグマザー」も取引している。

私も今度の星で鶏を卸すための準備で忙しい。

「そんなにヤバイ星かなあ。なんか南の島風で観光地のイメージが強いけれど。今度の星でバカンスの計画立てていたヤツらから苦情がきそうだなあ」

大將はノンビリした口調でいい、それが更にシンの神経を逆なでしている。

「封鎖を恐れて、どここのコロニーや星も情報を出さないけど、もうかなり広まっている。わかったら、つべこべ言わず、さっさと動いてください」

シンは結構いい性格していると思う。

大將を平気でこき使うし、カーラ艦長にも遠慮しない。

カーラ艦長は頷くと、許可を出した。

「艦内の設備調整の総括、ジーンを呼ぼう」

艦内設備の調整の総括をしているジーンさんという男が呼ばれた。

ジーンさんには初めて会うけれど、つなぎの作業服を着て、癖のある髪を肩まで無造作に伸ばした妙にセクシーなオッサンだった。マツチヨで、濃い。

シンは「ビッグマザー」の設計図を手にとると、簡潔に説明した。

私もついでに一緒に話を聞いていた。

これから行く予定の「ハズレの星」及びその周辺コロニーで原因不明の疫病が流行っていること。感染力が強く、空気感染の恐れがあり、致死率も高いらしいこと。「ビッグマザー」の乗組員は無菌状態に慣れていて病気に弱いこと。病原が特定できていないため、治療の目途がたたず、病気の持ち込みを阻止するしかないこと。

「オレはどうすればいい？」

設備調整の総括をしているジーンさんが「ビッグマザー」の設計図を確認しながらいう。

「空調整備を全艦循環型から各ブース独立型に切り替えたいのです。それから、病人が出たときに隔離できる部屋と、ハズレの星から乗ってきた人が入れる部屋をいくつか作りたい。ハズレの星に着く1週間の内にお願したい」

シンがいうと、ジーンさんは苦笑した。

「できないことはないけれど、艦内の設備を大幅に動かすことになるな。ちよつと誰かに手伝ってもらわないと・・・」

そうついいながらジーンさんは私をみると無駄に色気のある笑みを浮かべた。

2 宇宙での仕事

艦内の空調を、循環型空調から各ブース独立型空調に切り替えるため、家畜達を一時的に巨大コンテナに移し、「ビッグマザー」から外に出し、宇宙に浮かべておくことになった。

私は思いきって、コンテナを宇宙に運び出す作業を手伝うことに、つまり、ドラッグ無しで宇宙に出ることにした。作業はジーンさんが指示しながら見守っていてくれるし、宇宙に出るといっても、母船の「ビッグマザー」のすぐ横で行う作業だ。

これくらいなら、なんとかできそうだ。
時間にして、三十分。

コンテナとトラック（コンテナを牽引する乗り物）をつなぎ、トラックに乗り込む。

ハッチが開き、宇宙がみえる。一瞬ひるみそうになるが、慎重にトラックを運転し、「ビッグマザー」のすぐ横にコンテナを浮かべ、固定していく。

コンテナの中には私が世話してきた鶏さんたちがいっぱいいるはずだ。

ジーンさんの命令アナウンス通り、作業を終える。

あまり宇宙の方を見ないようにして、「ビッグマザー」に戻る。

できた。

丁寧にトラックを格納庫の定位置にもどす。

最後が肝心だ。

最後まで、集中して。

ドラッグを使っていたころは、めちゃくちゃやっていた。

もちろん、「アース」の造りが軍事用に徹底していたのもあるが、戦闘機で宇宙からそのまま艦につっこみ、定位置に1cm違わず停止する。神業といわれることを次々やってはみんなとゲラゲラ笑っていた。正規職員達のキモをつぶし、それでいて完璧な仕事をするのは快感だった。

まさか、トラックを運転する日が来るとは思わなかったが、仕事は仕事だ。ドラッグ無しで宇宙に出て作業して戻ってこれたのだ。

進歩のはず。

私は自分を納得させて、トラックをおりる。

「ミアさんだろ、あれ。プーランクのデザートイーグル」

「あの凄腕の？ 体の故障治ったんだね。そりゃ、是非ウチにきてもらわないと」

「プーランクのアレン・シーモア少佐の恋人だって？」

戦闘機乗りの連中がたむろしていた。

私の方をみて、勝手な事をいつている。

戦闘機の格納庫も、トラックの格納庫も隣り合っている。

ちようど戦闘機乗りの訓練が終わった後だったらしい。

なるべく戦闘機乗り達の顔を見ないようにして歩く。

緊張が解けたのか、足に力が入らない。

早く、戦闘機乗り達の声の届かない所に行きたい。

「ミア？ 宇宙に出たのか？」

驚いたような声が追いかけてきた。

ルークの声。

力の入らない足で、壁を伝うように振り向かずに歩く。
手足が氷のように冷たくなっているのがわかった。

「ミア、トラックの運転ご苦労さん」

ジーンさんが迎えに来てくれた。

ジーンさんにはドラッグの経緯を全て話してある。
心配して迎えに来てくれたらしい。

ふらつく私をさりげなく支えてくれる。

「大丈夫か？」

ジーンさんにきかれて、大丈夫と答える。

たかが、コンテナをちょっと移動させただけでめげるわけにはいかない。

私は高速で飛びながら、前後左右上下の敵機を同時に見極め、自由に攻撃できる神機だったのだ。
悔しかった。

窓の向こうの宇宙を睨みながら、悔しくて、涙が出た。
たかがコンテナ数百メートルの移動でふらふらになって。
毎日笑いあっていたルークの声だけで、動揺して。

「ミア、苦しいのか？」

ジーンさんが心配している。

「違う。悔しいだけ」

「そうか」

ジーンさんがいった。

大丈夫。

まだ、いける。

こんなところで、こんな気持ちのまま、終わるわけにはいかない。

ご飯が食べられて、安心して眠れる場所を得たのだ。

行くべき場所や、帰る場所を見失ったぐらいで。

そんなもの、もともとなかったのだし。

ブリッジに戻ると、シンがウー太にもたれてうたた寝していた。

ウー太もすぴすぴと眠っていた。

2匹はぼんやりと明るい光に包まれているようにみえた。

平和で愛しい光景だった。

3 前進（前書き）

前半シンの視点です

3 前進

ここ2、3日、小鳥ちゃんがドラッグ無しで宇宙に出ている。

宇宙で作業する時間は短い、トラックを運転したり、空調の配管の手伝いをしたりしている。空調設備の調整をしているジーンに頼まれて駆り出されたいらしい。心配だけれど、ジーンも見守っているし、小鳥ちゃんもやる気なので反対はできない。

小鳥ちゃんはもう一度、飛びたいのだと思う。
ドラッグ無しで。

この前の夜、小鳥ちゃんがとことこ廊下を歩いていくので、なんとなく後をつけてしまった。小鳥ちゃんは誰もいない広い格納庫に入りこみ、黙ってじっと戦闘機を見あげていた。戦闘機を見あげるその横顔は、綺麗で厳しい表情をしていた。

小鳥ちゃんは宇宙で作業した後、緊張して強張った顔のままブリッジへ戻ってくる。そして、オラウータンのウー太の毛にリボンをつけてみたりして、しばらくこそごそしている。きつと、そうすると緊張が解けて落ち着くのだろう。今日はウー太がリボンをポイと捨ててしまったので、小鳥ちゃんはあきらめて僕の髪にリボンを結んだ。小鳥ちゃんがそれで落ち着くのなら、かまわないけれど。

小鳥ちゃんは不思議だ。

壊れそうに儚いくせに強靱。

いつも一生懸命なのに、どこか冷めた目で世界をみている。

独りでいることが好きなようにもみえるし、寂しくてふるえているようにもみえる。

このままいけば、小鳥ちゃんはドラッグ無しでも、飛べるようになるかもしれない。

そうしたら、もしかしたら、どこか遠いところへ飛び立ってしまうのだろうか。

僕の手の届かない所へ。

小鳥ちゃんは僕の頭に上手にリボンをつ結ぶことができて満足したのか、ブリッジから出ていった。

こんなことを「頭にリボンをつけられて喜んだり」している場合じゃない。

忙しい。

疫病の情報収集。

病人が出たときの対応策のシミュレーション。

病人が出たときの準備。

空調設備の打ち合わせ。

「ビッグマザー」乗組員に対する疫病の説明。

そして、普段のルーチンワークや病人の診察。

もうじきにハズレの星に着く。

病気は待ってくれない。

艦内に患者を出すつもりはない。

一人も。

僕は頭にリボンをつけたまま仕事に戻った。

・・・・・・・・・・

ジーンさんのお手伝いで、トラックの運転を繰り返す。他の作業員も一緒だ。

空調の配管を組み替えるために必要な操作らしいけれど、私はジーンさんのいうとおり動かしているだけで、何がどうなっているのかさっぱりだ。

ジーンさんのお手伝い兼、宇宙に出る訓練、と思ってやっている。

誰もいないときをみはからって、格納庫の戦闘機もチェックした。戦闘機には乗れない。

ただ、格納庫に鎮座している戦闘機を見あげるだけ。

それでもいろいろな戦闘機があつて面白い。

裏ルートで入手したと思われるマニアックな戦闘機から量産型まで、各種取り揃えてある。

ブーランクの戦闘機もある。

また、飛ぶ日は来るのだろうか。

ドラッグ無しの今の私にできるのは、トラックの運転と、オモチャみたいな年代ものの戦闘機シミュレーターで操縦ゴッコをすることだけ。

ため息が出そうになるのを飲み込む。

シンは忙しそうだ。

もうすぐ着くハズレの星での疫病情報をもとに過剰とも思える対策を練り、指揮をとっている。

「ビッグマザー」の艦内の空調を全艦循環型から各ブース独立型へ切り替えさせ、病人用の隔離施設から、ハズレの星から乗ってきた

人用の部屋まで別に作っている。

そうこうするうちに、ハズレの星に着いた。

シンの決めたとおり、ハズレの星から乗船した人は病気の診断がつくまで、隔離部屋で生活してもらう。大した混乱もなかった。ハズレの星から乗船した人々の内、一家族が感染していたが、いずれも軽症で済み、2週間後には普通の生活に戻った。

なんだ、そこまで大騒ぎする必要なかったよ、と思っていたけれど、その後、しばらく不気味なニュースが立て続けに流れた。

無人の漂流船。

正しくは、生きている人が乗っていない、漂流船。

小さな宇宙船などは医療設備も整っていないし、空調の隔離などもない。

一人でも疫病の者が船に乗り込むと瞬く間に全員感染してしまう。長期間無菌状態に慣れていた所に急に強力な病原が入り込む。艦内には大した医療設備も無い。しかも、医療施設のある場所に寄港しようにも、相手側があれこれ条件をつけたり、拒まれたりで、手遅れになる。

その、慣れの果の残骸が宇宙を漂流している。

寒々とした話だ。

設備が整った大型船でも多くの病人が出たり、老人や子供など死者が出ている模様だ。

シンが躍起になってやっていたことの意味がようやくわかった。

「ビッグマザー」は疫病の本拠地である「ハズレの星」と直接やりとりし、病人家族まで乗せている。それで一人も新たな患者が出な

かったのはシンが不眠不休でがんばったおかげだろう。ハズレの星から出航し、最後の疫病家族が完治したその日、ようやくシンはフラフラと自室に引き上げて行った。

4 あーめんな鶏さんのサンドイッチ

シンは爆睡しているのか、丸一日たっても、部屋から出てこない。働き魔のシンが部屋に戻るのはほんの数時間だ。その辺の椅子で仮眠して、夜通し働いていることもしばしばだった。さすがにちよつと心配になった。中で死んでるんじゃないかと思って。食事だっ、していないはずだ。

食堂でサンドイッチを作ってもらう。例の、私が育てたあーめんな鶏さんの、チキンサンド。

「シン？ 大丈夫？」

ノックをするが返事が無い。

シンはたいてい戸に鍵をかけない。

「シン？ 入るよ？」

もう一度、ノック。

返事無し。

まさか、本当に過労で死んでるんじゃない？

心配になっていつきに戸をあける。

シンは眠っていた。

毛布が半分ずり落ちている。

灯りもついたままになっている。

平和そうな、いつもの寝顔。

ホッとした。

シンの寝顔が、なんだか好きだ。
平和で、太陽の匂いがしそうな、優しい寝顔。

持ってきたサンドイッチと水差しをテーブルに置くと、シンを起さないように部屋を出ようと思った。

「・・・小鳥ちゃん？」

シンがもぞもぞ動いた。

「シン、起しちゃった？ ゴメンね。あんまりずっと部屋から出てこないから、死んでるんじゃないかって、心配になっちゃった」

シンはむっくりと起き上がると、毛布とぐしゃぐしゃになったシーツから脱出し、ベッドの端に腰掛けた。まだボーっとした顔をしている。

「んー・・・。死んでたのかもしれない。今何時？」

「夜の九時。昨日の夜、寝るって部屋に入って、丸一日経っても出てこないんだもの」

私が言うと、シンは目を丸くした。

「え？ 20時間以上寝てたってこと？」

「そうみたいね。お腹すいたでしょ？ お水飲む？」

水をコップについでわたすと、シンは一気に飲み干した。
飲み干して、息を吸い込んで、はいて。

「生き返った」
といった。

それから、ベッドに腰掛けたまま、猛然とサンドイッチを平らげた。
それは、もう、あっけにとられるような食いつぶりだった。

「あー、おいしかった。死ぬほどおいしかった」
食べ終わったシンはニツコリと笑ってお腹をポンポンっとたたく。

「生き返ったのに、また死んだの？」
私が笑いながらお水をもう一杯、コップについでわたすと、それも
シンは一気に飲み干した。

「ふー、おいしかった」
シンは幸せそうな顔で、しばらくボーっとしていた。

「僕ね、昔、修学旅行で地球にハイキングにいったの」
唐突にシンはいう。

修学旅行で、地球？

修学旅行なんてもの、私の通っていた学校にはなかった。
シンは地球出身じゃなかったのか。なんとなく、地球出身だと思っ
ていた。

でも修学旅行で地球に行けるって事は、相当お坊ちゃんの学校だ。
きつと。

「ハイキングっていつでも、結構本格的で、山小屋に一泊して山登りするの。その山で湧水を飲んで飲んだの。すごくおいしい水だったんだ。今でも覚えている」

水が？

よくわからない。

そう思って、不意に少佐がいれてくれた紅茶を思い出した。とても良い香りのする紅茶。

あの香りは今でも覚えている。

「でもね。今日のお水とサンドイッチも、同じか、それ以上においしかった」

私が丹精込めて世話して、あーめんになった鶏さん達だしね！シン、3食抜いちゃった後だし。

「今日のお水とサンドイッチ、きつと忘れないんじゃないかな。ずっと先まで」

忘れられないくらい、おいしいもの・・・。

ルークと食べた「たこやき」という食べ物を思い出す。

でも。

たぶん、もう一度同じものを独りで食べても、あのときの味はしない。

「次にすごくおいしいものを食べるとき、小鳥ちゃんと一緒に食べてるといいなあ」

シンはにこにこしている。
心臓がぎゅってなった。

「あのね。小鳥ちゃんがこの船に来たばかりの頃、すごく辛そうだったでしょ。砂を嚙んで飲み込むみたいな顔して食事して。だんだん元気になって、おいしそうに食事するようになるのがわかって、僕、本当に嬉しかったんだよ」

シンはじつと私の目をみていう。

それから、シンはそつと、本当にそつと私の唇にキスをして、いった。

「小鳥ちゃんが、好きだよ」

1 魔の海域と海賊

最近、ジーンさんのお手伝いをすることが多い。

ジーンさんは艦内の設備調整をやっていて、どこがどうなっているのかを教えてくれる。相変わらず無駄にセクシーでマツチヨ。

空いた時間に格納庫へ行く。お気に入りの戦闘機をみつけた。ちょっと古いけれど、よく手入れされたブーランク製の戦闘機で、外見は量産型に似せて作つてあるが、中身はマニアック。半自動操縦も完全な手動操縦マニュアルもできる。

最近の量産型戦闘機はたいした技術がなくてもある程度操縦できるようになっている。戦闘機乗りには、機を操縦するテクニクはもちろん、攻撃のテクニク、判断力、忍耐力、体力等要求される。全てを習得するには生まれ持った適正の他、かなりの訓練が必要だが、戦闘機乗りの寿命はそう長くない。技術力の高い戦闘機乗りを時間かけて育てても、実際に戦闘に出られる期間は短いし、殉職は多いし、効率が悪いことこの上ない。だから、技術力が無くても乗れる戦闘機が開発、量産されたのだ。

この目の前にある戦闘機は乗り手を如実に反映する。画一的な量産型自動操縦とはわけが違う。美しい戦闘機だ。

私が戦闘機に見惚れていると、肩を叩かれた。

「気に入ったか？」

後ろにいつの間にか大将とジーンさんが立っていた。

「その機はいつでも使えるようにしてある。それに乗れるやつはもういない。ミアが使える。ちょっと乗ってみろ」

ジーンさんがいった。

それに乗れるやつはもういない、か。

私はもう一度戦闘機を見た。

戦闘機も私を見ている。

コクピットに身をしずめ、目を閉じる。

宇宙を思い描くだけで心臓が跳ね上がる。

操縦自体はできそうなのに。

取扱説明書の類は無いが「アース」にいたころ乗っていた戦闘機とよく似ている。

緊急用の赤いわざとらしい大きなボタン以外はほぼわかる。赤いボタンは押すとどうなるのだろう？ 構造からいって、モジュール式の脱出装置―コクピット部分が外れて操縦者が脱出できる―ではなさそうだ。

・・・だが、そんなこと以前に。
宇宙が怖い。

無限の宇宙に怯んでしまう。

なんとか恐怖を沈めようとして、不意にアレン少佐の温もりを思い出した。

胸に耳を押し当てたときに、抱きしめられたときに聞こえた力強い鼓動。

恐怖が微かに薄れる。

アレン少佐の温もりを表面上に想い出し、恐怖を起さないように意識の底に沈める。

私はそつと目を開いた。

深呼吸し、集中力を高める。

試運転を開始して、20分間が精神的な限度だった。

戦闘機で20分間「ビッグマザー」の周りをくくると回って、帰ってくる。

ドラッグ無しで戦闘機に乗れた。前進した、ということにしておく。

それからは、暇をみてジーンさんや大將が戦闘機乗りの訓練に付き合ってくれた。「ビッグマザー」から戦闘機の離着陸の誘導をしてくれる。少しずつ、宇宙に出る時間を増やし、「ビッグマザー」から離れてみる。

操縦の勘がもどってくるのがわかる。

凍えていた手足に温かな血が戻ってくるように。

戦闘機の訓練を始めて何日かたったところだった。

その日はジーンさんが艦内から私の戦闘機乗りの訓練を見守ってくれていた。

通信機器の調子が悪く、戦闘機の誘導をしてくれるジーンさんの声にノイズが交じるようになった。

「ミア、そろそろ「魔の海域」にさしかかる。しばらく戦闘機乗りの訓練はお預けだ。A1ゲートに戻れ」

ジンさんから帰れコールがかかった。

「魔の海域」は有名な場所だ。

どういう原理なのかはよくわからないが、その一帯は計器類が狂いやすく、通信などもノイズが多くてつながりにくくなる。魔の海域で迷ってしまう船、事故を起こす船が後を絶たず、宇宙船乗り達に恐れられている場所だ。そんな危険な場所で、わざわざ戦闘機乗りの訓練を行う必要はない。

「魔の海域」を迂回して通ればいいようなものだが、迂回ルートは軍事大国ブランクの植民コロニーの空域となっているため、渡航にはブランクの許可が必要になる。ブランクは国籍の無い船の渡航を認めていないため、「ビッグマザー」は通ることができないのだろう。

「了解。F1999、A1ゲートに戻ります」

私は「ビッグマザー」の航空機離着陸用のA1ゲートに向おうとして、視界の隅に何かを捕えた。私の眼は機械が入っているため、高性能だ。

何だろう？

かなり高速で近づいてくる・・・宇宙船？

何というのか、勘でわかる。

嫌な感じの船だ。

「ジンさん、右後方から宇宙船が近づいている。何か変だ。大將につないで」

私がいうと、ジーンさんの声がすぐに返ってきた。

「了解した。ミア、すぐゲートに戻れ」

ノイズが交じる。

「魔の海域」にさしかかっている。

宇宙船はスピードをゆるめることなく、まっすぐ「ビッグマザー」に近づいてくる。通常、「魔の海域」を通る宇宙船はスピードを落とすことが暗黙の了解となっている。

海賊船の可能性が高い。

「ミア、機器の調子が悪くてハッキリしないが、海賊船DDDの可能性が高い。すぐ戻れ。ゲートを閉鎖する」

大将の緊迫した声が響く。

DDD。

海賊の中でも、残虐で好戦的なことで知られている。

よりによって、一番厄介な相手だ。

「大将、逃げ切れるの？」

私が聞くと、少し間があって大将の声が返ってきた。

「・・・相手の船の方が早い。それにこの海域で下手に動き回れば位置がわからなくなって迷子になる。この船は装甲が厚いから、開口部を全て閉鎖してやりすごす。だから、ミア、早く戻ってくれ」

たいていの海賊ならそれでやり過ごすことができる。大型船である「ビッグマザー」は装甲が厚く、開口部さえ閉鎖してしまえば外から侵入するのはかなり難しい。しかし、相手はDDDだ。相手の船に取りついて数分で足場を組み、穴を開けて侵入して、船ごと乗っ取る。手口も大胆で荒っぽい連中だ。DDDの船はせいぜい100人乗れるかどうかの小型船だ。対して「ビッグマザー」は三千人以上が乗れる大型船だが、戦闘に慣れた残虐な海賊数十人を相手にするのは、容易な事ではない。乗りこまれてマシンガンをぶっ放され、人質でもとられれば手も足もでない。規模の問題ではないのだ。

「大将、逃げ切れないなら戦うしかない。DDDは船に取りついて足場を組み、船を壊して侵入する。DDDに追いつかれたら終わる。その前に相手を叩かないと」

「・・・わかった。戦闘準備態勢に入る。ミア、A1ゲートはもう閉める。裏のC1ゲートを開けるからそこから戻れ」

大将からの通信はかなりノイズが交じっている。

「了解」

そういつて、戻ろうとしたが、海賊船はかなりの距離に近づいている。

目視でわかる。

DDDだ。間違いない。

今から攻撃準備をして間に合うのか？

私は戦闘機に乗ったまま、「ビッグマザー」の裏側に回り、様子を見ていた。

「ビッグマザー」が威嚇射撃と思われる攻撃をするが、DDDは全く動じない。

威嚇なんかしている場合じゃない。すぐに撃ち落とさなければこちらがやられるのに。

DDDの様子も少し変だ。全く余裕が無い感じで、なりふり構わずつつこんでくる。

「ビッグマザー」が攻撃用射撃をするが、DDDは上手かわし、射程の死角に入りこんでしまった。

攻撃したいが、私の戦闘機は武器を搭載していない。

このままでは、まずい。

「ビッグマザー」の裏ゲートから戦闘機が飛び出してくる。
が、DDDと「ビッグマザー」の距離が近すぎる。

大型船の周りを数機が飛び回って攻撃すれば、同志撃ちのリスクが高くなってしまう。

特攻しかないか。

DDDを、止める。

ブーランク製のこの古い戦闘機はかなりの強度を誇る。

今まで多くの戦闘機や、宇宙船を相手にしてきた。

昔の宇宙船は結構頑丈に作られていた。が、最近の宇宙船は、性能が良い割に、脆いことがわかってきた。

高速飛行の性能、爆撃の正確さ、居住空間の快適性、燃費、そういったものは抜群に良くなったかわりに脆いのだ。動力部分、居住部分、外壁、燃料電池、それらがバラバラの企業で作られ、プレハブ工法で組み立てられる。それぞれの性能は良いが、結合部などが脆弱なのだ。例えば動力部分と居住空間の間を上手に爆撃すれば、結構簡単にバラバラに外れてしまうのだ。

DDDは武器を大量に積んでいるが、船は新しい量産型の船だ。宇宙船としてはかなり小型の部類に入る。

DDDの船の動力部分と居住空間の間に戦闘機の先端を当てれば・
・、動力部と居住空間がはずれ、DDDを止められるのではないか。

かなり無謀なことにはわかっている。もちろん無傷ではられない。
船ごと爆発する危険もないではないというか、かなりありうるが・
・。

・・・・運が良ければDDDを止め、ボロボロの機体でビッグマザーに
戻れる。あるいは機体から脱出すれば「ビッグマザー」に拾ってもらえる。

運がよければ。でも、私は悪運が強いと常に言われてきた。

今までもそうやって生きてきた。

昨日生きていたから、今日も生きている。

今日生きぬけば、明日になる。

DDDの船は目前に迫っている。

他の戦闘機が砲撃を開始するが、DDDは止まらない。少々撃たれるのは想定内という事か。どのみち、いまDDDが乗っている船は捨てるつもりでいるのかもしれない。

「大将、DDDを止めてみる。他の戦闘機は退いて！」

「ミア？ 何を馬鹿なことをいつている」

大将の声が途切れる。

勝算は絶対にある、はず。

「ビッグマザー」の裏から飛び出て、DDDとの間を見極める。狙いを定め、突っ込んでいった。

ミア

ルークの声が聞こえたような気がした。

2 絶望

私の望み通り、DDDの船の動力部分と居住空間部分との間に戦闘機はめり込んだ。

DDDの動きが止まる。

が・・・。

甘かった。

DDDの動きを止められても、これでは。

DDDの船につつこんだまま、戦闘機の機体がひっかかってびくとも動かない。

DDDの船からはバラバラと小型の脱出ポッドが飛び出した。

爆発するのを恐れ、船を捨てて逃げ出したらしい。

でも、私は動けない。

DDDの船は不穏な閃光を時々みせながら、私が与えた衝撃の方向へそのまま流されている。

どんどん、「ビッグマザー」から遠ざかっている。

まずい。船が流されている。当然操縦もできない。

漂流・・・している。

宇宙が圧倒的な重苦しさに目の前に広がった。

息が浅くなる。

頭が恐怖で白く痺れる。

視界が狭く、暗くなる。

無限の宇宙。

このまま、壊れた海賊船と一緒に宇宙を彷徨うの？

絶対無理。

それぐらいならいつそのこと爆発してほしい。

このまま、宇宙で気が狂うくらいなら。

もう終わりにしてほしい。

「ミア、戦闘機から脱出して海賊船から離れる。爆発する危険がある。必ず助ける。早く脱出しろ」

大将の声を拾った。
意味を、理解する。

「ミア、・・・・・・・・・・」

あとはノイズだらけだ。

声すら届かないこの宇宙で。

壮大な宇宙の中で。

ちっぽけな私を見つける？

ノイズだらけで声すらまともに拾えないのに？

無理にきまっている。

それくらい、私にはわかる。

それに、脱出しようにも戦闘機は海賊船にめりこんでいる。ハッチが開かない。

「ビッグマザー」がどんどん小さくなる。
手足がしびれる。

恐怖で。

もう、無理。

シン、ルーク、大将、艦長、ウー太。おとうさんおかあさん。・・・

アレン少佐。

独り ということに気がついてしまった。

寂しいなんて生易しい感情じゃない。

怖い怖い怖いたすけて。

もうゆるして。

身を刻まれるような恐怖。

恐怖の先には、狂うことしか残っていない。

ふと、赤いボタンに気が付く。

何だったっけ、これ。

たぶん緊急用のボタン。

よく、チンケなドラマかなんかで、最後に主人公が押すやつ。

緊急脱出用とかのボタン。

それを押したら何分か後に緊急脱出用のボートが発射されて、本船は爆発。

でもこれは戦闘機で、脱出ボートなんて親切なものはない。
戦闘機は空飛ぶ棺桶だから。

たぶん、あれだろう。

特攻用のやつ。

自爆用のボタンだ、きっと。

丸い赤いボタン。

えい。

おした。

3 電話（前書き）

アレん少佐視点です

3 電話

電話の発信元を見て、笑いが浮かぶ。
珍しいヤツからだ。

「アレ、久しぶりだな。元気にしていたか？」

モニターに映る友人の姿は昔と変わりなかった。

「ああ。ハラウェイ、お前こそ。最近どうだ？」

「ボチボチだな。それよりあのゴシップ、本当なのか？ マクバガン議員の娘だったわけ？ ルーナ・マクバガン医師・・・とかいう美女と付き合っていると出ていたが。週刊誌に追われるなんて、アレも出世したな。ハンサムで血統正しい独身のエースパイロットとくれば、俳優よりも人気があるのかもな」

ハラウェイの言葉にウンザリして苦笑する。

なぜだか、ルーナ女医と俺が付き合っているというデマが流れ、くだらない雑誌にスクープされ、それらしい写真まで載せられた。ルーナは両親が著名な議員で、俺が所属する「アース」の軍医をしていた才色兼備な女性だ。

今では軍医の仕事から離れ、議員である両親のあとを継ぎ、政治家としての活動を始めている。そういったデマは迷惑ではないかと思っただが、あの女、それすら政治家活動の宣伝の一つにしているようだ。自分の崇拜者は多い方がいい、ということらしい。こちらはそのせいで見合いの話がいくつかつぶれた。マクバガン議員の娘を敵

にまわしたくないのだろう。まあ、見合いなど望んでいなかったし、ありがたいといえはありがたいが。

「そんなわけないだろう。」

つい不機嫌な声になってしまふ。

「やっぱり違うのか。あの美女、お前の好みとは少し違うと思っていたんだ」

そういつてハラウェイは電話の向こうで笑っている。

「そんなくだらない用件で電話してきたのか？ それよりちゃんと仕事しているのか」

ハラウェイは俺の後輩として軍に入隊したが、年齢は同じだ。抜群の戦闘センスを買われて民間から中途入隊してきたが、一匹オオカミ的なところがあり、仲間からは浮いていた。上下関係が厳しく、親・親戚などバックグラウンドがものをいう世界だが、彼は誰とでも堂々と渡り合う気持ちのいい男だった。俺とも先輩後輩という枠を超え、いつの間にか友人となっている。

「そうそう、そのことで相談があつて電話したんだ。実は海賊船の討伐を命じられていたのだが。おれともあろうものが失敗しそうになったわけだ」

ハラウェイは淡々と話す。

仕事内容は機密が多いため、ハラウェイがこのような話を切り出すこと自体めずらしい。

「いつも余裕のお前が？ 珍しいな。それに、海賊討伐なんて普通は民間にやらせるだろ？」

海賊討伐などは民間の軍隊に委託することが多く、正規軍を動かすことは稀だ。よほどの事情があったのだろう。

「相手が悪くてな。海賊のDDDだ。軍の施設に搬入予定の希少鉱物が盗まれた。ブランクの面子にかかわるっていうんで、DDD討伐と鉱物奪回の命令を頂戴した。けれど、DDDはとにかく残忍で好戦的な連中でさ、へたな空域で戦うわけにもいなくて、DDの船に発信機をとりつけてしばらく泳がせたんだ。やつら、それに気が付いて魔の海域に逃げ込みやがった」

魔の海域は計器類が狂いやすく、通信などもノイズが多くてつながりにくくなる。

「それで？」

俺は次をうながした。

「魔の海域は通信とか、とにかくうまくいかなくてさ。発信機を取り付けられたのはよかったが、それを追うのも至難の業だ。大体の位置はわかるけれど、計器は狂うわ、ノイズはひどいわ、正確な位置がわからなくなっちゃった」

よくある話だ。

だからこそ魔の海域だし、悪人どもの根城になるのだ。

「DDDが船を乗り換えたらアウトだ。追跡できなくなる。さすがにあせったよ。とにかく、DDDが向かった方向を洗うしかなかった

た。やつらがどこかの船を襲って派手なドンパチを始めればわかるだろうと思って必死で後を追ったんだ。けれど、意外な形で鉱物を乗せたDDDの船が見つかったんだよ」

ハラウェイは続ける。

「DDDの船につけた発信機の信号と、プーランクの船からと思われるSOS信号を同時に拾ったんだ。でも、魔の海域だろ？ 罔かもしれない。警戒しながら船に近づいた。船はあったが、これが妙でな。プーランク製の戦闘機が俺たちの追っていたDDDに突き刺さった形で漂流していたんだ。壮観だったよ。SOS信号を出していたのはプーランク製の戦闘機で、一見量産型に見えるけれど、レアな名機だ。あの手の戦闘機は乗り手を選ぶ。盗品を乗りこなせず、無茶をしてDDDに接触したのかとも思ったが違う。誘爆しにくい場所に上手く戦闘機を当ててDDDの動きを止めているんだ。そんな芸当ができる戦闘機乗りなどそういない。DDDの海賊達は残念ながら脱出ポットで逃げ出しちまって、船のそばに残っていた半分以上くらいしか捕えられなかったが、DDDに例の希少鉱物は残されていて、無事回収できた。」

「プーランク製の謎の戦闘機か。その戦闘機に乗っていたやつは何者だ？」

「そう、それで上に連絡する前にお前に相談したかったんだ。調べたら、お前のところにいた傭兵だったよ。可愛い女の子だ」

「まさか、ミアなのか？ 無事なのか？」

「そうそう、名前はミア・アランフェス。プーランクの「アース」の傭兵部隊所属で、現在は行方不明（捕虜を含む）扱いとなってい

る。彼女は冷凍ガスっていうの？ あれで戦闘機の中で冷凍睡眠状態になっていた。旧式の船にはよくあっただろ？ 緊急時にクルーを冷凍保存して、SOS信号だして仲間に拾ってもらっているタイプ。彼女はそのまますの軍の病院に収容された。まだ覚醒中だが、たぶん上手くいくだろうとドクターはいつていた。綺麗な子だな。セクサロイドの「ベビードール」みたいで。まだ彼女のことは極秘にしてある。で、彼女の処遇が問題なんだよ」

ハラウェイは言葉を続けた。

「魔の海域で、彼女が捕らえたDDDの船に鉱物が積まれていた。魔の海域はこの領空でもない。となると、一般的に鉱物の所持権は彼女にもあることになる。けれど、ウチの上の連中は鉱物を全て奪回したい。それ以前に民間の可愛い女の子がDDDを制して鉱物を取り返したなんてことになると思面子にかかわる。そうすると、彼女は邪魔だ。彼女がプーランクの傭兵として、任務の一環としてDDDを襲ったことにすれば、プーランクの手柄となる。また、彼女を脱走兵として俺たちが狩ったことにすれば、彼女の身柄とDDDは俺たち、つまりプーランクのものとなる。まあ、どのみち彼女はプーランクにいいように利用されるだけだけれど、一応お前の意見も聞いておこうと思って」

「ミアは、彼女は脱走兵なんかじゃない。前の戦闘のときに、戦闘中に「ビッグマザー」の捕虜になってしまったんだ。脱走兵扱いだけは止めてくれ」

俺がいうと、電話のむこうでハラウェイが笑った。

「わかっているよ。お前が彼女に惚れこんでいるのは有名な話さ。彼女が捕虜になったとき、やっきになって奪回しようとしていたら

しいな。じゃあ、彼女の身分は傭兵としてウチと協力してDDDを捕えることに成功したというシナリオでいけるようかけあってみよう。ひょっとすると、功績が認められて彼女のブランク帰化が可能になるかもしれん。何せ、あの鉋物、目玉が飛び出るくらい高価なモノだし、隣国からの贈り物、という政治的な意味合いも強いから」

ハラウェイからの連絡はありがたかった。

だが一抹の不安が残る。

ミアがブランクの傭兵としてDDDを捕えたというシナリオになるとは限らない。ミアの存在自体を消し、ハラウェイらがDDDを捕え、鉋物を回収したというシナリオになる可能性もある。その場合ミアを口封じに脱走兵として投獄するかもしれないし、最悪、消される可能性すらある。それくらい、軍は簡単にやる。

もうワンランク上の援護が必要になるな・・・。
仕方ないか。

久しぶりにルーナ女医に連絡をとった。

4 対面（前書き）

アレク少佐視点です

4 対面

ハラウェイから電話があった後、ルーナ女医（今はもう医者ではなく政治家だが）に連絡をとり、ミアの収容された病院へ向かう。ミアは、緊急冷凍の覚醒技術があるプーランクの軍の病院に収容されていた。

案内されたフロアは他のフロアと違ってガラシとしていた。長い廊下を、落ち着かない気持ちで歩く。

曇りガラスで仕切られた病室にミアは寝かされていた。

白すぎるシーツに包まれて眠るミアは、まるでセクサロイドの「ベビードール」のように見える。

せつかく桃色でふっくらしていたほおも元通りになってしまっていた。

長い睫が濃い影をおとしている。

こんなことになるのなら、あるとき無理やりにも連れ帰ればよかった。

そつとほおに触れてみる。

「大丈夫、健康体よ。この子、本当に悪運が強いわね」

ルーナがミアの寝顔をのぞきこんでいう。

「さつき、ドクターと話をしたの。なんでも冷凍ガス保存された状態で漂流していたんですって。旧式の船にはよくある装備らしいけ

ど、緊急時にクルーを冷凍保存して漂流させ、SOS信号を出して仲間に拾ってもらうの。まあよく無事だったわよね。とりあえず体は異常なく覚醒したそうよ。さっきドクターが全部調べたっていつていたわ。覚醒に失敗すると体が腐っちゃうし、最近は絶対にやらないらしいけど。うまくいつてよかったわよ。後は彼女の処遇だけれど、あつちで話しましょう」

ルーナは病院内に設置されたセルフ式の小さなカフェを指さし、長い脚で歩いていく。

今日は白衣ではなく、颯爽としたスーツだ。

今は医者ではなく、政治家としての活動を始めている。

そのせいか、髪型もクールなショートボブになっていた。

そんな多忙な彼女へ、ミアの処遇のことで無理にお願いをしたのだ。議員の両親を持ち、自身も政治家として動き始めた彼女の発言権は更に強まっている。

「相変わらずあの子に甘いよね。あの子、傭兵隊長のルークと駆け落ちしたのかと思っていたわ」

クツキリと紅い唇で彼女はいう。

「あの子が不利にならないよう、プーランクの「アース」所属の傭兵として、DDDから荷を奪還した、というシナリオを軍部にゴリ押ししておいたわ。DDDから奪還した荷物は国宝級のモノらしいし、勲章ものの功績になりそうよ。ついでに功績を理由に、あの子がプーランクの国籍を取得できるよう、軍部に働きかけておいたわ。居住歴の無い外国人がプーランクに帰化した場合、一年間は身元引受人が必要というきまりがあるの。だから、あなたがあの子の身元引受人になるといいわ。また一つ貸しね。」

ニツコリ笑って言う彼女は、前のような挑発的な笑みではなく、絶
対的な笑みへと変わっていた。

5 ベビードール1

「この病室の説明だけなかったな」

「患者の名前も書いてないし、変ですね」

知らない若い男達の声が聞こえてくる。

「ベビードールじゃねえの？ コレ」

「動くのかな。あ、息してる」

ほおをつつつかれる感触。

「なんでこんな所にあるのかな。病院で寝ているってことは病気なのか？ コレ」

「さあ、どうでしょう？ ベビードールってアンドロイドでしょ？ 病気になるものですかね？」

髪に触れられる感触。不快。

「コイツ、裸じゃない？」

「ええ。僕もそう思っていました。シーツの下、裸ですよ。この子」

そろそろとシーツが下げられ、首筋、鎖骨に知らない指が這う。不快だ。

私は目を開いた。

ひっ、と息を飲む音がして指が離れた。

「やっぱり、ベビードールだよ、コレ。銀色の目をしている」

「僕が見たベビードールは綺麗なグリーンでしたよ」

「銀色バージョンもあるんだろ。綺麗なもんだな。ベビードールってことは、やっぱりアレだろ？ セクサロイド。もっとう、肉付きがいいのかと思ったけど」

「初期のタイプはみんなこんな感じですよ。肉付きの薄いスラッとしたドール体型。その後です。巨乳やらケツやら抱き心地のいいセクサロイドにしたのは。初期バージョンのセクサロイドは看護師として開発されたアンドロイドのボディがもとになっていますから、こんなものですよ」

2人の白衣の男が無遠慮に私を見下ろし、勝手な事を言っていた。白衣は着ているが医者には見えない。まだ若い。

学生か何か、そんな雰囲気だ。

セクサロイドと人間の区別もつかないなんて、相当の阿呆だ。

ここは、どこだろう。

私は何をしているのだろう。

私はそろそろ体を動かして、上半身を起こして、愕然とする。

はらり、と落ちたシーツの下は全裸だった。

シーツを慌ててひっぱりあげる。

ごくり、と男達が唾を飲みこむのがわかった。

ただでさえ、男達は私をセクサロイドと勘違いしているらしいのに。これでは挑発しているようなものだ。

まずい。

傭兵をしていた頃はそれなりに用心していた。

傭兵隊長をしていたルークが防波堤となっていたため、からかわれ

ることはあっても、私に直接ちよっかいをかけてくる男はほとんどいなかった。

それでもタガが外れるときはある。

そんなときは徹底的に相手を痛めつけた。

生半可な事じゃ、逆に相手の恨みを買って陰湿な仕返しを待っている。相手をぶちのめし、どちらが上か体に覚えこませる。そうしてきた。

が、体は鉛のように重い。

頭が上手く働かない。

どうして、私はここにいるのだろう。

病院のようにみえるけれど、ここは、どこだろう。それよりも。

この男達をどうにかしないと。

「ドクターを呼んできて」

男達の注意を遠ざけようといってみるが、声が震えてしまう。

小さなかすれ声しかでない。

「どこか具合が悪いのですか？ 一応私も医者のお卵です。まだ研修中ですが」

男の内の一人が嗤いながら手を伸ばす。

シートで胸元を押さえ、後ろへ下がる。といっても狭いベッドの上だった。

頭をつかまれ、ベッドに押し付けられた。血の気がひく。

「痛いところは？」

首筋を指が這う。

不意にグイ、とシーツをつかまれ、下げられた。
上半身がむき出しになる。

私は悲鳴をあげて、男を払いのけようとした。

「ちょっと、悲鳴をあげるのはやめてくれないかな。診察している
だけなんだから」

男は嗤いながらいい、私の口を手でつかんでふさいだ。

「ベビードールの診察をできるなんて光荣だ」

男はそういつて、私の体を指でなぞる。

涙がにじむ。

シーツははぎとられ、男の荒い息が顔にかかっていた。

顔を背け、なんとか男を払いのけようと暴れると、男がのしかかっ
てきた。

「何をしている」

怒号が響き、男の体が吹っ飛んだ。

「この馬鹿を病院からつまみ出せ」

廊下に男が投げ飛ばされた。

なぜか、アレン少佐とルーナ女医がいた。

アレン少佐が男達を殴りつけ、廊下に投げ飛ばしたのだ、と、なんとなくわかった。

「あらあら、可愛そうに」

ルーナ女医は棒読みの口調でいい、落ちていたシーツを拾い上げると私に巻きつけてくれた。

カタカタと体が震える。

震えを止めたくて自分で自分の体をきつく抱く。
でも、震えは止められなかった。

「ミア」

心配そうな声に思わず顔をあげる。

「少佐？」

どうして少佐がいるの？　ここはどこ？

6 スピードール2（前書き）

アレク少佐視点です

6 ヘビードール2

ミアの病室に戻り、目の前の光景に、頭に血が上った。

ミアは全裸でベッドに仰向けになっていた。シーツは剥がれ、ベッドの下に落ちていた。

白衣の男がミアの口を手で押さえ、声を奪っていた。

卑猥な手つきでミアの体をなぞり、覆いかぶさるうとしていた。

ミアの目からは涙があふれていた。

男が何をしているか一目瞭然だった。

男を殴りつけ、病室の外へ投げ飛ばした。

学生臭い。

ここは軍の施設だ。

軍医を目指す研修中の学生なのかもしれないが、当然未来は無い。殺してやりたいくらいだ。

ルーナが気を利かせてすぐにミアにシーツを巻きつける。

ミアはカタカタと震えていた。

泣きながら震えていた。

死ぬか生きるかの戦いするときも眉一つ動かさず平然と戦闘機に乗りこんだミアが。

「しょうさ?」

小さなミアの声がした。
その声も震えていた。

思わず、ミアを腕に、抱きしめる。

シートにくるまれたミアは小さかった。

震えるミアをずっと抱きしめていた。

震えが小さくなり、完全に止まるまで、ずっときつく抱きしめていた。

震えの止まったミアはしばらく腕の中でじっとしていた。

俺の胸に耳を押し当て、目をとじている。

長い睫。

シーツの隙間から白い肩と鎖骨がのぞいていた。

細い首筋。

もう一度抱きしめなおそうとするとミアが顔をあげた。

ずっと涙がミアのほおを伝う。

我慢の限界だった。

ミアの小さな唇を吸った。

ミアがしがみついてくるのがわかった。

俺は周りに人がいるのも忘れ、ミアの壊れそうな体を抱きしめ、唇を貪り続けていた。

7 安心な場所

薄いシートを通して少佐の腕の感触が伝わってくる。少佐の腕の中は、絶対的な安心感があつた。少し落ち着いて、少佐を見あげてみる。優しい目。

アレン少佐は絶対に私を傷つけることはしない。

暗い怖い広すぎる宇宙を忘れさせてくれる。嫌な奴等を遠ざけてくれる。

怖かった、ようやくそう思えた。

危険の最中、怖いと認識してしまえば、恐怖を恐怖として認識してしまえば、動けなくなってしまう。

だから、なるべく恐怖は恐怖と感じないようにしてきた。危機として受け止め、分析し、できる限り回避する。

でも。

アレン少佐の腕の中にいれば怖いと思ってもいい。

ここは、安全だから。

怖かった。

思わずつぶやくと、アレン少佐はもう一度強く抱きしめてくれた。

心臓の力強い鼓動を聞くとすごく安心する。

ここに、ずっといたい。

目を閉じて少佐の胸に顔をうずめてみる。

「ミアはもう戦闘機には乗らないといっていたから、連れ帰らなかったんだ。なぜ、こんな危険なことをしている？ また戦闘機に乗ると知っていれば、無理やりにも連れて帰っていた。『ビッグマザー』の連中に戦闘機に寄せられたのか？」

少佐は少し怒った声でいった。

「少佐？」

まだ、状況がよく呑み込めない。

ここはどこで、なぜ少佐がここにいてくれるのか。

「今は少佐じゃない。役職名なんて変わる。名前ですんでくれ」

少佐は私を抱きしめたまま、いう。

「・・・アレン・シーモア。サー？ ミスター？」

どう呼べばいいかわからず、困惑して少佐を見あげると、少佐は静かに私を見下ろしていた。静かで優しい眼差し。紅茶をいれてくれたときと同じ眼差し。

「アレンでいい。アレンと呼べ」

少佐は、アレンはそういつて私の髪を梳くようになる。

「アレン・・・」

私がつぶやくと、少佐、じゃなくてアレンは、小さくうなずいた。

それから、アレンは順を追って、説明してくれた。

ビッグマザーを襲った海賊DDDはプーランクの荷を奪って逃げて
いる最中で、プーランクの精鋭部隊に追われていたこと。私はDD
Dの船に突っ込んだまま、戦闘機についていた緊急ボタンにより、
冷凍ガスで保存され、魔の海域を漂流していたこと。DDDを追っ
ていた精鋭部隊でアレンの親友でもあるハラウェイ達の軍に回収さ
れたこと。私の身分はまだプーランクの「アース」所属の傭兵のま
まであったこと。傭兵としてハラウェイ達と協力し、DDDの荷を
奪回したという取扱いになっていること。

驚くことばかりだ。

DDDが「ビッグマザー」を乗っ取るうとしたわけがわかった。

プーランクの精鋭部隊に追われていたのだ。

私が押した赤いボタンは特攻用の爆破ボタンではなかったらしい。
人体を冷凍ガスで眠らせて保護し、SOS信号を出して仲間に連絡
するためのものだったのだ。私の乗っていた戦闘機はもともプー
ランクの戦闘機だ。プーランク機からのSOS信号を拾って、DD
Dを追っていたハラウェイに拾われたのだ。

アレンは私を抱きしめたまま、いった。

たぶん、ミアはプーランクの国籍を取得できる。

俺が身元引受人になるから、一緒に暮らそう。

8 夜のタワー（前書き）

アレクシア視点です

8 夜のタワー

ルーナ女医、今は政治家のルーナ・マクバガン議員がゴリ押ししてくれた通りの筋書きとなった。ミアはプーランクの傭兵として海賊DDDの討伐に加わって大きな功績をあげたことになり、その功績によりプーランクへの帰化が認められ、傭兵から正規軍人への格上げも決まった。これでミアが望もうと望むまいと、ミアはプーランクの住人であり、軍人である。自由に国外に出ることは許されない。ミアには栄誉ある勲章まで授与されることになった。

それに伴う様々な手続きをミアに代わって全てやり、身元引受人であることを理由にミアをプーランクの首都にある自宅へ連れ帰った。

ミアは親鳥を追うヒヨコのように必死に俺についてきた。望んでもいないのに突然プーランク国民になったと聞かされ、様々なわけのわからない手続きを突き付けられ、途方に暮れていたのだらう。俺がいうままに書類にサインし、俺の差し出す手を素直に握りしめる。

・・・俺はずるい人間だろうか。
ミアを守るといいながら、ミアを囲い込み、逃げ出せないようにしている。

自宅に着いたのは夜だった。

自宅は高層マンションにあり、眺めがいい。
長期宇宙勤務なので、自宅にいるのは休暇と地上勤務のわずかな間だけだ。それゆえ、室内にはあまり物も無くガランとしている。

酒を出し、ソファに腰をおろす。

ミアは外をみていた。

ガラスにおでこがくつつきそうなくらい近づいて壊れそうな後ろ姿に胸が苦しくなる。

「ミア」

俺が呼ぶと、ミアは振り向かずにガラスの中で目を合わせてきた。外は暗く、ミアの姿はガラスに映りこんでいる。

「なに？」

消えそうな、ミアの声。

「そつえば、ルークはどうした？」

何でもない事のように、さりげなく問う。

「……結婚した。ハニガンさんって子と。だいぶ前に」

ミアはつぶやくようにいうと、再び、ガラスの中の俺から目を逸らし、外の夜景をみつめる。

思い出す。

あのときの背中と同じだった。

空母「アース」のラウンジに夜、一人ポツンと座っていたミアと。

「そつか」

俺が言うと、そうよ、とミアはそっけなく返す。

会話が途切れる。

ミアの視線の先には、タワーの赤い光が静かに点滅している。外の景色が見やすいよう、室内の明かりを暗く落とした。

「明日、タワーにいつてみようか」

俺が言うと、ミアは体ごと俺の方を向いて小首をかしげる。

「・・・何のために・・・？」

返事に窮する。

熱心にタワーをみているから、ミアはタワーが好きなのかと思って。まるで、中学生か高校生だ。

「いや、まあ、観光スポットだし、ミアがタワーに登ってみたいのかと思って」

俺がいうと、ミアは目を輝かせた。

「それ、登れるの？ 知らなかった。上まで登れるの？ 行く！ 絶対行く！」

ミアが嬉しそうに、子供みたいにぴょんと跳ねるのがわかった。

それだけで、なぜか胸がいつぱいになる。

「じゃあ、明日行こうな」

俺が言うと、ミアはソファによじ登り、俺の膝によじ登った。

よじ登るといふ言い方は変だが、ミアの動きはやっぱりそう形容するのがふさわしいように思う。

ミアは俺の膝にまたがり、向い合せに座る。
考えようによってはかなりキワドイ恰好だ。

「アレン」

ミアが心細そうにいった。

「ん？ どうした？」

ミアの目を覗き込む。

「アレンのこと、好きになっていい？」

小さな消え入りそうな声だった。

ミアの細い体を思い切り抱きしめる。

ミアは目をつぶり、小さな唇をそつと押し当ててきた。

彼女の白い体をタワーの赤い点滅が微かに照らしていた。

タワーの赤い点滅が消え、部屋が日の光に満たされるまで、白い体を抱いていた。

アレン。

ミアの擦れた声が耳の奥に焼きついた。

9 ドッグタグと花嫁（前書き）

アレन視点です

9 ドッグタグと花嫁

結婚予定日と二人のイニシャルが彫られたプラチナの指輪をミアは物珍しそうにみていた。

ミアのまわりには結婚指輪をはめていた人がいなかったのだろうか。

「結婚指輪、めずらしいものでもないだろう？」

俺が言うとミアはうなずく。

「うん。でも、内側に文字が彫られていたなんて初めて知ったの。これでドッグタグが無くても安心だね」

ミアはニッコリ笑って言う。

ドッグタグが無くても安心。

ドッグタグは兵士に配られる個人認識票で、薄い金属板に名前や所属などが刻印されている。戦死時に遺体が原形を留めないほど損壊しても、タグが無事ならば個人識別が可能というわけだ。チェーンに通して首からかけることが多く、犬の鑑札になぞらえて、皮肉を込めてこうよぶ。死んでも指輪があればドッグタグのかわりに身元証明になる、とミアはいつているのだ。

ブランクの正規軍人は体内に個人情報に記載したチップを埋め込んでいるので、ドッグタグなど使用しないが、傭兵は未だにドッグタグを使っている。それも、宇宙で戦死すれば、ドッグタグすら回収できないことの方が多い。

俺は何も言えなくて、ミアを見た。

ミアは単純に嬉しそうに俺とミアの名が並んだ指輪をみていた。

俺たちはもうすぐ結婚する。

ミアと暮らし始め、すぐに籍を入れることを決めた。

ミアがもと異邦人であることから反対される可能性もある。

傭兵の荒れた実態を知っている叔父などは絶対に反対するだろう。

2人きりでひっそりと結婚式をしてしまおうと思い、教会にお願いした。

プーランクの正規軍人幹部ともなると身元にうるさい。組織に予め結婚相手を報告しておくのが慣例で、組織は結婚相手の素性を調べあげるのが普通だ。傭兵としての功績でプーランクに帰化し、正規軍人となったミアだ。結婚禁止はないはずだが、最近また見合いの話が多い。横やりを入れられる前に結婚してしまいたかった。何よりも、早くミアを自分の手元に、自分のものにしてしまいたかった。

両親や親族にたてついたことなど無く、優等生を地でいていた俺の初めての暴挙だったかもしれない。

.....

そうやって迎えた結婚式の当日。

ミアの花嫁姿はあまりにも清楚だった。

圧倒的な無垢。

それは、悲しいほどだった。

花嫁を見慣れているはずの神父ですら、ミアを見て一瞬、目を見開いていた。

触れれば消えてなくなりそうだった。

少し淋しげに、でも嬉しそうに、恥ずかしそうに微笑んで、俺の耳元でミアは囁いた。
アレン、好き。

1 撃沈（前書き）

シンの視点です

1 撃沈。

「シン、元気ないね」

「シーッ！！ シンはな、失恋して落ち込んでいるんだ！ 今はそつとしておいてやれ。温かく見守ってやろう！」

ばかりでかい大将の声がする。

そして、暑苦しい視線。

見守らなくていいから、どこかへいつてほしい。

僕は救護室にある事務机につっぱしたまま、撃沈していた。

小鳥ちゃんが結婚してしまった。

アレン・シーモアと。

ブーランクのニュース報道でそれを知った。

小鳥ちゃんは勇ましかった。

海賊船DDDに単機で突っ込んでいった。

慌てて大将とルークが小鳥ちゃんを回収にいったけれど、一足早くブーランクの精鋭部隊に回収されてしまった。そして、それから間もない内にアレン・シーモアとの結婚報道があった。

小鳥ちゃんは、ブーランクのニュースやドキュメント番組で取り上げられるほどの有名人になってしまっていた。クールなエリート軍人アレン・シーモアと小鳥ちゃんはブーランクでは今、最もホットなカップルらしい。

小鳥ちゃんは傭兵「ベビードール」の愛称で紹介されていた。

正規軍精鋭部隊と組み、大物海賊DDD討伐に成功（なぜか、そういうことになっていた）。

セクサロイド「ベビードール」そっくりの容姿。

神業とよばれる戦闘機乗りの腕前。

ブランク帰化を認められた小鳥ちゃんを、エリート軍人アレン・シーモアが奪うように連れ去り、結婚してしまった、とゴシップ誌には紹介されていた。

小鳥ちゃんが無事だったのはもちろん嬉しい。

小鳥ちゃんが幸せになるのも嬉しい。

でも、僕は悲しい。

蕩けるような小鳥ちゃんの笑顔が眩しい。

アレン・シーモアに腰を抱かれて微笑んでいる小鳥ちゃんは、明らかに綺麗になっていた。

惚れ直してしまう。

いや、惚れ直してどうする。人妻に。

撃沈している僕を見かねたのか、カーラ艦長がとどめを刺しにきた。

「こういうのはだな、めぐりあわせというか、運命というのかな。

シンだっていい男だとは思うぞ。思いやりはあるし、頭いいし、仕事が早くて手も抜かない。ただなあ、色恋に関しちゃ、手えだすの遅いし、詰めが甘すぎるんだよなあ。まあ、元気出せ？」

カーラ艦長は、ぼむ、と僕の肩をたたいた。

・・・どう元気だせと？

「しかし、最近ブランクもきな臭くなってきたな。新興国の帝都国が領空侵犯を繰り返している。そのうち戦争になるぞ。ビッグマザーに火の粉がかからなければいいが」

いつの間にか艦内の設備調整の総括をしているジーンさんもきている。

ジーンさんはプーランクからの亡命組だ。

昔、プーランクの軍にいたことがあるらしい。

「ビッグマザー」はプーランクからの亡命組が多い。

レントン博士はプーランク軍の兵器関連の研究をさせられていたし、モーガン博士は、軍を批判する内容の文を書き、裁判にかけられていた。レントン博士の助手とその家族も乗っている。

かくいう僕も、プーランクの医科大学に留学した後、製薬会社に移り、戦闘薬の研究をしていた。

一度でも軍の機密に触れてしまうと、勝手に辞めるのは難しくなる。そうなると、嫌でも軍の意向に従うか、亡命するか、あるいは消されるか。

プーランクとは、みな、手を切った。

けれど、嫌な不穏な空気が「ビッグマザー」を包んでいた。

なにより、プーランクに帰化してしまった小鳥ちゃんが心配だった。

2 約束と報道

大きなステンドグラスがはまった美しい教会で、アレンと約束をした。

ずっと一緒にいるという贅沢な約束。

神様にアレンを一生愛しますと誓うことはできるけれど、神様がアレンと私を引き離さないと約束してくれるわけじゃない。

本当に人間の一方的な祈りではないと思う。

（注：ミアはもともと無宗教です。結婚前に教会で神父様からいろいろ教えていただいたはずですが……。上記はミアの個人的考えで、実在の宗教、結婚観等とは無関係です）

アレンは私のプーランク帰化にあわせ、長期休暇をとってくれていた。

何もわからない私に、一つ一つ丁寧に教えてくれる。

マンションの入り方、買い物の仕方、プーランクの交通網、料理の作り方、緊急時の連絡先、近寄ってはいけない場所、軍の派閥、プーランクの文化や歴史、シーモア家の人間関係……。

今までの生活が良くも悪くもシンプルだったので、突然大量のことを教えられ、面食らう。軍やシーモア家の人間関係など、ややこしくて聞いた端から忘れた。

とりあえず、軍の偉い人にアレンの叔父さんがいることは覚えた。アレンのお兄さんも軍関係で働いているらしい。アレンの叔父さん、ゴドウィン・シーモアは、傭兵の頃から名前だけは知っていたが、会うこともなく雲の上の人だった。

そういえば、アレンの家族に会う前に結婚しちゃったけど、よかったのだろうか。

私がよかったの？　ときくと、アレンは何も言わず、そつと私の鼻にキスをした。

アレンに抱きしめられると、自分が今までどれほど巨大な不安や孤独や恐怖と一緒に生きてきたかに気がついてしまう。

不安や恐怖や孤独。

心の奥におしこめ、気付かないフリをしていたそれは、アレンの腕の中であっけなく消え、代りにアレンの温もりが心も体も満たしてゆく。

本当は、気がついてはいけなかったのかもしれない。

それは、アレンを失うことへの不安や恐怖を背負うことを意味しているから。

傭兵「ベビードール」の活躍と結婚は大きく報道された。

「傭兵の成り上がりがエリート軍人と結婚」という一種のシンデレラストーリーとして雑誌に紹介されたり、故郷を失った可哀そうな子供が傭兵となり、終に勲章までもらう英雄となった成功ストーリーとして番組で紹介されたりした。

私の今の身分はプーランク国籍の正規軍人だ。

ゴシップ以外の正規取材は全て軍を通すことになる。軍の広報が受けた取材を、軍の広報が書いたシナリオどおり読み上げ、写真をとらせる。そこに私の言葉は全くない。「ベビードール」に似た容姿、

成り上がりの成功者としての私には、若者を中心とした支持層がいるようで、軍の宣伝としてそれなりの価値があるらしい。

もちろん私がドラッグ漬けだったことには全く触れていない。シームア夫人が、勲章持ちの「ベビードール」が、ドラッグ漬けというのは甚だ外聞が悪いのだ。

アレンの妻の伝説の「ベビードール」それが私だった。

健康診断を受け、簡単な研修を受けた後は、所属が決まるまで自宅待機となった。

アレンは長期休暇を全て私のために使い、また宇宙へ帰って行った。プーランクの戦闘用空母「アース」にアレンは常駐している。私はプーランクの首都にあるアレンの自宅に一人取り残された。アレンはいつでも優しくかった。可能な限り電話もくれた。

それでもアレンのいないマンションは灰色の牢獄だった。シートにくるまり、窓から見えるタワーの赤い点滅をぼんやり眺める。

ずっと一緒に約束したのに。

宙軍の「アース」所属の希望届を出した。

「アース」勤務になれば、アレンと一緒にいられるから。

ドラッグ無しじゃ戦闘機に乗れない私に宙軍の辞令がおりる可能性は低い。

正規軍人は規律が厳しく、ドラッグ漬けは有り得ない。

それに、今まで知らなかったけれど、宙軍の戦闘機乗りの職場は人気があるらしい。

独り、家で引きこもりになっていた私にようやく辞令がおりた。

それは、無所属のまま、あるプロジェクトチームに参加しろという、よくわからない辞令だった。

3 仕事1

無所属のまま、あるプロジェクトチームに参加しろという、よくわからない辞令だったけれど、勤務場所が「アース」だったので、私は大喜びで準備して、「アース」行きのシャトルに乗りこんだ。「アース」はブーランクの宙域に浮かぶ空母であり、要塞であり、宙軍の象徴でもある。定期的にブーランクと「アース」を結ぶシャトルが出ている。その他にも宙軍基地はコロニーなど宙域にたくさん存在する。

「アース」にシャトルが着いた。
もうすぐ、アレンに会える。

傭兵として「アース」にいた頃が遙か昔のように感じる。
ゲートをくぐってすぐにアレンの姿を見つけた。
嬉しくて、思わずアレンの方へ駆け出そうとして、でも、躊躇に変わった。

「ミア」

アレンが険しい表情で、大腿に歩いてくる。
・・・どうしてそんなに怖い顔をしてるの？

「なぜ、アースに来た？」

アレンは厳しい口調でいう。
会いたくて、会いたくてここまで来た妻にという言葉がそれ？

「だって」

思わず抗議しかけると、アレンは小さく笑って、私を抱きしめた。

「ミア、会いたかったよ。でもアースは今、あまり安全な場所じゃない。次のブランク行きのシャトルが出るときに帰るんだ」

アレンの言葉に泣きそうになる。

アレンと一緒にいる約束をしたのであって、遠いところで待っている約束をしたわけじゃない。

「アース勤務の辞令をもらったの」

私がいうと、アレンは首を横に振った。

「そんなものはすぐに取り消してもらっ。ミアはもう戦闘機には乗らないだろう？」

確かにアレンと約束した。

危険だから、もう、戦闘機には乗るな。
ドラッグも絶対にだめだ。

「でも、そうしないと」

アレンに会えない。

ここにいられない。

だって、戦闘機乗りしか、私にはできないことがないのだから。

でも、私の言葉は口に出る前に消えた。

アレンが私の言葉を食べたから。キスをしたから。

「安全な場所で、俺の帰りを待っていてくれ」

アレンが私の頬を両手ではさんでいう。

私がおも抗議しようとしたら、後ろから陽気な声がふってきた。

「よう、相変わらずの溺愛ぶりだな、アレン。今回ミアちゃんをここへ呼んだのは俺なんだ」

振り向くと、金髪碧眼のガタイのいい男が笑って立っていた。

ノールな顔立ちだけれど、どこか野性的な――抜け目のない狼のような――印象の男だった。

「ハラウェイ、お前か。なぜ、ミアを呼んだ？」

幾分怒りを含んだ声でアレンがいう。

ハラウェイという名に覚えがあった。アレンの友人で、海賊船DDと私を回収した精鋭部隊の人間だ。

「別に戦闘機に乗せるつもりじゃないから、安心してくれ。本艦から出なければ、そう危険なこともないだろ？ ミアちゃんにはちょっと俺のプロジェクトを手伝ってもらいたくてね。アレンだって、可愛い新妻と一緒にいられるのは嬉しいだろ？ 感謝してほしいね」

そういつて、ハラウェイはニヤリと笑った。

「プロジェクトですか・・・？」

宙軍のアースに行けという辞令はきいたが、仕事内容まではきいていなかった。そういえば以前アレンから、ハラウェイはちょっと難ありのミッションの処理班として動いていると聞いたことがある。

ミッションごとに所属、階級関係なく人を集め、プロジェクトチームを作り、遂行するらしい。

「そう。ビッグマザー回収プロジェクト」

ハラウェイは真面目な顔をして、そういった。

4 仕事2

「ビッグマザー回収プロジェクト？」

嫌な予感がする。

「ミアちゃんが捕虜として捕まっていたビッグマザーには、プーランクからいろいろな軍事技術を持ち逃げしたやつらが沢山いてね。それらを取り返すのが今回の任務なんだ」

シンは、ビッグマザーには亡命した人や脱獄した人、ヤバい組織から追われている人が乗っているといっていた。プーランクから亡命した人々もいたはずだ。レントン博士はプーランクで兵器関連の研究をさせられていた、と聞いたことがある。

「亡命した人を連れ戻すということですか？」

私がきくと、ハラウェイは呆れた顔をした。

「亡命？ プーランク側からすれば、軍の金で研究しておいて、嫌になったら技術を持って逃げだすやつなんか、略奪、横領をしているのと変わらないよ。しかも、やつらはビッグマザーの中に研究施設まで作って、パトロンから金を受け取って研究を続けているらしいじゃないか。どちらにしろ、ビッグマザーにはプーランクの軍関係の技術、情報が蓄積されている。ビッグマザーごと取り返すしかないんだよ」

ハラウェイは当たり前のようにいう。

「ビッグマザーごとって、ブーランク軍に関係ない人がたくさん乗っているのに？」

私ができると、ハラウェイは肩をすくめた。

ビッグマザーにブーランク軍関係から逃げてきた人が乗船しているのは確かだが、ビッグマザーの船自体はブーランクとは何のかかわりもないはずだ。それをビッグマザーごと取り返すというのは、略奪と大差ないのではないのだろうか。

「そんなことまで構っちゃいけないよ。ビッグマザーは空母としての利用価値が高い。空母が手に入るなら、それに越したことはないさ。それにビッグマザーはどの国にも属していない。ビッグマザーがどうなろうと、誰も文句はいわないよ」

簡単にサラリといったのけるハラウェイに、言葉が出なかった。

「ただ、理由も無しにビッグマザーをいきなり『回収』するわけにもいかないからね。とりあえず、軍の技術・情報を持ち出してビッグマザーに逃げ込んだ連中のリストが必要なんだ。ミアちゃんはビッグマザーにしばらくいただろう？ リストの照合を手伝ってほしい」

自分の背を嫌な汗が伝うのを感じる。

こんなはずじゃなかった。

私はアレンと一緒にいたかっただけで。

「今回のプロジェクトは所属、階級関係なくメンバーを集めている。おいおい他のメンバーも紹介するよ。ミアちゃんは「アース」に長い間いたから、艦内の案内はいらないよね。あと、プロジェクト期間中は「アース」に常駐してもらうから、アレンと一緒に住めるよ。

えーと、今日はこんなところかな。あ、そうそう、新しい身分証もらってきておいて。じゃあ、あした1階F・2室に9時集合ね」

ハラウェイはそういうと、ひらひら手を振って行ってしまった。

どうしていいか、わからなかった。

その夜、アレンの部屋に入れてもらった。

「移動時間が長かったから、疲れただろう？」

元気の無い私を、移動の疲れとアレンは解釈したらしい。
アレンに優しく抱きしめられる。

いつもなら安心するはずの腕の中なのに、私はいつまでも眠れなかった。

5 仕事3

「え？ わからない？ 誰も？ もう一度よく目を通してくれ」

ハラウェイは苛立ちを押し殺した様子で私にモニターを指し示した。モニターには顔写真が映し出され、名前、経歴なども簡単に記されている。

ブランク軍の技術・情報を持ち出してビッグマザーに逃げ込んだ連中のリストの照合をしてほしいと頼まれた。私がビッグマザーに滞在していたときに見かけた人間を教えてほしいという。

レントン博士、モーガン博士、ジーンさん・・・見知った顔がたくさんモニターに映し出される。

「ビッグマザーには短期間、捕虜として乗っただけなので、わかりません」

冷や汗をかきながら、顔に表情を出さないようにしている。

レントン博士の真面目くさった顔が、モニターに映し出されたままになっている。

レントン博士にはチョコレートをもたらったことがあった。

「ビッグマザー」にいたとき、ルークや他の若者達が戦闘機乗りの訓練をしているのを見かけた。「ビッグマザー」から飛び立ち、周

辺の宙域をまわっているのが窓から見えたのだ。ルークがハニガンさんと結婚してしまい、自分は戦闘機に乗ることもできず、どうしていいかわからなくなっていた頃のことだ。窓から見える訓練の光景をぼんやり眺めているうちに、いつのまにか、泣いていた。

馬鹿みたい。泣くなんて。

顔をこしこし袖で拭きながら、窓から背を向けたところに、ちょうどレントン博士が立っていた。

気まずかった。泣いているところを見られた私も気まずかったけど、レントン博士も気まずかったのだと思う。ものすごく困った顔をしていた。見なかったフリをして立ち去ることも、気の利いた言葉かけすることも、レントン博士はできない。

不器用なのだ。

それがよくわかる。

レントン博士は困った顔のまま、ポケットに手を入れた。

それから、ポケットから銀紙で包まれた小さな三角錐の形のモノを取り出して、私にくれた。

小さな銀の三角錐の中身はチョコレートだった。

無言でくれたソレを、無言で食べてしまった。

一個食べると、もう一個くれた。

それも食べると、もう一個くれる。

いったい、いくつチョコレートを持っているんだろう。

そう思っただけでレントン博士のポケットをみると、ポケットはお菓子でいっぱい膨らんでいた。なんだかおかしくなって笑ってしまった。笑った私を見て、レントン博士はホッとした顔をした。

それだけのことだ。

でも、私はレントン博士がビッグマザーに乗っていたと、どうして

もいえなかった。
いえるわけではない。

「わからないって、そんなはずはないだろう？」

ハラウェイは暫くして、私が答えられないのではなく、答えたくないのだ、と感づいたらしかった。

「君は傭兵の頃は反抗的な事で有名だったようだけれど、正規軍人になったのなら、直さないかね。君の態度はアレンの評価にも結び付くよ。きちんと答えてくれ。」

穏やかな表情を崩さないままハラウェイは言うが、独特の凄みがあった。

「でも」

思わず言いかけた私をハラウェイはキツパリと遮った。

「君は全てイエスと答えればいい。君の意見を聞いているわけじゃない。これは命令だ」

当たり前のことだった。

ハラウェイの冷たく澄んだ青い眼が私を見下ろしていた。

「そういえば、アレンが惑星ロペでサルを頭に乘せた男が君を迎え

に來たといつていたな。リストにサルと一緒に逃げた馬鹿が載っていた。プーランク医科大学出の秀才君か。軍と共同研究をしていた製薬会社のデータを破壊し、出奔。アレンが見たといつていたのはこの……シン・ジルフィードじゃないのか？」

シンの顔がモニターいっぱいに映し出された。
思わず息を飲む。

「……知りません」

私は言つたが、シンを見たときの一瞬の顔の表情をハラウェイに全てみられていた。

「いい加減にしろ！」

ハラウェイは手近にあつたイスを蹴り飛ばし、私の胸倉をつかむ。
苛立つた冷たい青い眼がすぐ間近にあつた。

「お前はもうプーランク人で、プーランクの軍隊にいるんだぞ」

それでも、私にはいえなかった。

ハラウェイは突き飛ばすように、胸倉をつかんでいた手を離れた。

ハラウェイはそれなりに手加減していたと思う。

が、如何せん体格差がありすぎた。

私は思い切り後ろに倒れこみ、部屋の隅に積み上げられていたイスに突っ込んだ。

派手な音を立てて積み上げられていたイスが崩れ落ちる。

近くにいた女性事務員が物音に驚いて顔を出し、私を見て悲鳴をあげた。

イスで額を切ったらしい。

派手に血が流れ、ちょっとしたスプラッターになってしまっていた。

ハンカチを傷口にあて、止血する。

これくらいならすぐに血は止まるだろう。

頭の周辺は血管が多く、出血は派手だが、脳が無事なら大したことは無い。

「ミア、どうし・・・」

アレンがあわてて駆け込んできた。

さっきの女性事務員が血だらけの私をみて動転し、アレンを呼びに行ってしまったらしい。

呼びに行くならまず保険医だ。全く持って、失格だ。

アレンも、軍人がそんなことで慌ててどうするの？

「どこを怪我した？」

アレンはすぐに膝き、怪我を点検する。

「大丈夫。勝手に転んでイスで額を切っただけ。血も止まりかけてる」

「傷は・・・深くはないな。痛むか？」

落ち着いた言葉とは裏腹に、頬に伝った血を拭ってくれるアレンの手は冷たく、微かに震えていた。

「平気」

ちよつとズキズキするけれど、たいしたことないと思う。

ハラウェイの持ってきたタオルで血をふき取り、包帯を持ってこさせ、手早く頭に巻いてくれた後、アレンは重いため息をもらした。

「・・・ハラウェイ、後で話がある。ミアは保健室へ行って消毒と検査をもらえ」

アレンは突っ立っていたハラウェイにいい、私の頬にそつとキスすると、何事も無かったかのように部屋を出て行った。

6 仕事4（前書き）

アレク視点です

6 仕事4

夜、ミアの包帯を換えてやると、血はほとんど止まり、傷は治りかけていた。

血だらけのミアを見たときは息が止まるかと思ったが。

ミアは俺の前に大人しく座っていた。

ハラウェイの言葉を思い出す。

怪我の事は、オレが悪かったと思っている。でもな、ミアちゃん、ビッグマザーの事を知っているはずなのに、いつさい話そうとしない。軍でそれが通じると思っているなら、大きな間違いだ。態度も反抗的だし、ただでさえミアちゃんはいろいろな連中のやつかみをうけている。ビッグマザー回収プロジェクトでわかりやすい手柄をたてられれば、と思ったけれど、あれでは手柄どころか足を引く張る事になる。

戦闘機にも乗せられないんだろ？ 悪いことはいわない、早く軍を辞めさせた方がいい。

ハラウェイはそういつていた。

ミアに怪我をさせたのは許せないが、ハラウェイのいう事はもつともだった。それに、ハラウェイだからあの程度ですんだが、他の連中だったら話すまで殴られていただろう。

ミアは傭兵をしていた頃から、生意気な態度で有名だった。

ただ、戦闘機乗りとしての腕は確かだし、どんな危険で難しい任務も決して嫌がらなかったから、重宝されていたのだ。若年の戦闘機乗りの中では抜群の経験と実績を持っていた。

ミアの健康診断記録には良好、と書かれていたが、ミアがドラッグ漬けで戦っていたのは明白な事実だ。

ドラッグ漬けの毎日からミアを救い出したのは、俺ではない。皮肉なことに、捕虜として拘留されていたビッグマザーで、戦闘からドラッグからも解放され、元気になっていた。捕虜というよりは、仲間として認められていたのだろう。惑星ロペへミアを迎えに行つたときに、それを思い知らされた。そのビッグマザーの連中を、ミアが売るようなマネをするだろうか？

ミアには絶対にできないだろう。

そして、ミアがどれほどさやかな抵抗を試みたとところで、ビッグマザー計画は必ず進む。

これ以上、ミアが傷つくのは見たくなかった。

「ミア、軍を辞めるか？」

俺がいうと、ミアの肩がぴくん、と動いた。

「プロジェクトに参加するのは、もう無理だろう？」

ミアが泣きそうな顔をあげる。

「・・・役にたてなくてごめんなさい。ビッグマザー計画は無理だけど、でも」

「与えられた任務を遂行できなければ、軍は務まらない」
俺がいうと、ミアはさすがのような目でみあげてくる。

「・・・でも、戦闘機乗りなら」

戦闘機乗りなら？

絶対にだめだ。

そんな、危険な仕事はさせられない。

ドラッグだって絶対にだめだ。

「戦闘機乗りはだめだといっただろう？ ドラッグももちろんだめだ。軍を辞め、アースを降りるんだ」

ミアの目から涙が零れ落ちるのがわかった。

新婚早々、なぜこんなことになってしまうのだろう。

ため息をつき、ミアを抱き寄せる。

だが、俺はまだ事態の深刻さに全く気が付いていなかった。

宙軍には、本土に妻子を残してきている人間はごまんという。

ミアが、結婚して軍を辞めて、プーランク本土で俺の帰りを待つ。

別に珍しいことでもなんでもない。

ミアが軍を辞めれば、なんとでもなる。

そう思っていた。

悪いことは重なる。

ゴドウィン・シーモアがアースを訪ねてきたのだ。

俺の叔父で、宙軍の大将を務める。

ビッグマザー計画は現段階では一応極秘扱いとなっているが、ルーナ・マクバガン議員をはじめ、一部議員の支持も受け、政治的局面から注目されている。

ゴドウィンは普段はプーランク本土の本部に常駐しているが、巡回を兼ね、様子を見に来たのだ。

「お前の嫁は、どこだ？ 結婚式にも呼ばず、事後報告とはあきれた。あれだけ可愛がつてやったのに、見合いも勝手に断るとは。私の面子は丸つぶれた」

叔父は最初から機嫌が悪かった。

高官の娘との見合いを叔父からすすめられていた。

結婚を焦り、叔父を通さずに勝手に先方へ断ってしまったのは、確かにまずかった。

ミアが青白い顔で現れ、ハラウェイもビッグマザー計画責任者として呼ばれていた。

「・・・随分貧相な娘だな」

ミアを紹介した後の、第一声がそれだった。

ミアは顔色が悪く、頭に包帯まで巻いている。

「ビッグマザー計画は上手くいつているのか」
アゴをあげて、ハラウェイを一瞥する。

「は・・・。世論もあり、ビッグマザーにいきなり奇襲をかけるのも時期尚早かと。ビッグマザーに奪われた軍事技術等あることを示したうえで・・・」

「あまり悠長なことも言っていられない。対・帝都国用に空母が必要だ。ビッグマザーを少し改修工事すれば、空母として十分使える。ビッグマザーを狩った上で、理由などで持ち上げればいい。中にいるのは軍を逃げ出した屑ばかりだ。レントン博士は保護依頼が来ているが、他はどうなってもかまわない」

叔父はミアに視線を戻した。

「何だ、その包帯は？ 怪我をしたのか？ クスリをやってラリツて転んだんじゃないだろうな？ ドラッグ漬けの傭兵風情が」

叔父は吐き捨てるようにいった。あまりの暴言にさすがに叔父を諫めようとしたとき、ミアの口から細い声が漏れた。

「傭兵にドラッグを渡して戦わせているのは、誰です？ クスリで恐怖を消して前線に立っている傭兵はたくさんいます」

ミアは青白い顔のまま、呟くようにいう。決して、感情的になって話しているわけではないが、今ここで叔父を刺激しても何一ついいことはない。大将とヒラという天地の階級の差においても。

「噂通り生意気な小娘だ。その体で子供が生むつもりか？ ジャンキーが」

「・・・そんなこと・・・」

ミアが壊れそうだった。

「妻を侮辱するのは止めてください。失礼します」

ミアを抱き上げて、部屋を出る。

最悪だった。

最初から叔父に期待などしていなかったが、最悪の顔合わせとなつてしまった。

腕の中で体を小さくして、涙をこらえているミアを抱きしめる。

叔父の毒舌には慣れたつもりだったが、こうして大切な人を傷つけられると怒りがわく。

いつまでも、こんなことをしていても落ちが明かない。

ミアを説き伏せて退職届を書かせ、元気の無い、泣きそうな顔のミアをプーランク行のシャトルに乗せた。

ミアに乗せたシャトルはあっという間に宇宙の暗闇へ消えた。

本当に、これでよかったのだろうか。

ミアを守るはずが、ミアを傷つけてばかりいる。

ミアの泣きそうな顔が浮かび眠れなかった。

7 取材

アレンの疲れたような、悲しい顔が胸に刺さる。
アレンにはふさわしい女性がたくさんいたのよ。

私に言うでもなく、でも聞こえるようにいう職員達の言葉。
傭兵仲間の所にも、もう戻れない。

そして、何よりも不安なのは、ビッグマザーのことだった。

ブーランク宙軍とビッグマザーが戦ったとして、ビッグマザーが勝つことは万に一つも無いだろう。ビッグマザーはそれなりに軍事設備が整っているし、戦闘機も多数所有している。人間さえ揃えば、かなりの防衛能力はあるように思える。が、大将やカーラ艦長をはじめ、防衛意識があまりにも低い。傭兵の命を塵のようにあつかう連中が、ビッグマザーを狩った後、中の人々をどう扱うか、考えただけでも恐ろしい。

戦って勝てるとは思えない。でも、遠く離れた所に逃げるとか、何か策はあるはずだ。何とかして、ビッグマザーのみんなに知らせないと・・・。

ブーランクは一見自由な国に見えて、裏では情報規制され、監視されている、と聞いたことがある。知識の無い私には、そういった規制を免れて情報のやり取りをする術がない。

ブーランクにはアレン以外、知り合いも伝手もない。
一体どうすればいいのだろうか？

退職届の受理は難航していた。「ベビードール」に似た容姿、成り上がりの成功者として、私には若者を中心とした支持層がいる。軍

の宣伝塔として広報の仕事に移ってはどうか、という意見が出たらしく、当の私は蚊帳の外のまま、もめている。
現在は怪我で療養のためという名目でプロジェクトからも除名されていた。

一人ぼっちの家にいても気が滅入るし、すぐ近くにある公園に散歩にいった。セントラルパークとかいう、やけに細長い長方形の公園で、木立ちと芝生と人工の小川なんかがある。アイスクリーム屋とサンドイッチ屋の屋台がいつも出ているので、そこでハムサンドを買った。

木陰のベンチに腰を下ろすと、タワーがみえた。

大好きなアレンと一緒に出かけした場所。

でも、そのアレンもすごく遠くにいる。

サンドイッチをくるんでいた紙を開き、もそもそ食べ始める。

「そのサンドイッチ、そんなに不味いの？」

いきなり目の前にぬっと現われた男に尋ねられて、サンドイッチを落としそうになった。

「は？」

「いや、ものすごく不味そうな顔で食べていたから」

考え事をしていたから、眉間に皺をよせで食べていたかもしれない。
男は人懐っこい笑みを浮かべ、私の横に腰を下ろしてしまった。

「ミア・アランフェスさんだね。すぐにわかった。本当にベビー
ドールに似ているんだね」

私はちよつと警戒してサンドイッチを食べる手を止めた。
浅黒い肌に生き生きとした黒い瞳、笑うと白い歯が目立つ。中肉中
背の知らない男。

どこことなく愛嬌があるというか、馴れ馴れしいというか。

「僕はフリーで記事を書いている。アル・マンセルだ。よろしく。
アルってよんで」

いきなり、勝手に握手してきた。

「もし、取材なら軍を通す規則になっているんですが」
私がいいかけると、アルは頷いた。

「わかっているよ。でも、正式に取材しても、わからない事多いで
しょ？ ミアさんって、前は傭兵していたんだよね？」

「・・・ごめんなさい。何もお話しできることはないの」
早く話を切り上げたくて、相手の顔を見ないようにしていったが、
アルは気にせず話し続ける。

「いきなり何もかも聞けるなんて、思ってないよ。モーガン博士、
知ってる？」

モーガン博士。
宗教学者だと聞いたことがある。ビッグマザーに乗っていたことは
知っているけれど、お話ししたことはない。たまに、ちらりと姿を見
かけたただけだ。

「モーガン博士？」

「うん。モーガン博士が裁判にかけられた経緯とかを記事にして、それ以来プーランクには出入り禁止になっていたのよ、僕」

飄々とした態度、物言いについて警戒心が緩む。

「じゃあ、なんでここにいろの？」

思わず私がきくと、アルはすました顔をした。

「それは、いろいろな手を使うんだよ。もちろん。で、モーガン博士はなんで裁判にかけられたか知ってる？」

「……さあ？ 軍を批判する文を書いたとかじゃないの？」

「そう。子供の傭兵がドラッグ漬けになって戦っていることとか、批判して」

「……」

「ね、ミアさんのこと、話して」

「……無理よ」

「うーん、無理かあ。まあいいや。じゃあ、またね。今日の所は写真撮らせて」

アルは止める間もなく、私の写真を撮ると手をひらひら振って去ってしまった。

.....

アル―あのとときの記者には、あの後も一度公園で会った。無理に私から話を聞きだすでもなく、世間話をして帰っていった。

彼がどういう人間かよくわからない上、私は軍にまだ籍がある身だ。アレンにも迷惑がかかるかもしれない。

何も話せないとおっぱねるしかなかった。

外に出れば、アルに会うかもしれないと思うと、次第に外に出るのも億劫になって家にこもるようになった。

そんなある日、軍の本部に呼び出された。

退職届の手続きのことかと思っただけだったが、待っていたのはゴドウィン・シーモア、アレンの叔父だった。

こうして一対一で向かい合えば、嫌でも貫禄の差を感じる。

階級でいえば、向かい合って話すことなど叶うはずがない。甥の嫁として話があるのだろうか。

「これは、なんだ？ え？」

いきなり突き付けられた写真画像に覚えがあった。

公園を背景に、困った顔をして立っている私。

自称記者のアルが私を勝手に撮った写真ではないだろうか。

「お前は、軍の機密を記者にもらしたのか？」

「何も話していません」

いいながら、背筋が寒くなる。
確かに何一つ話してはいない。
だが、目の前のゴドウィンは怒っていた。

「クソ記者は、お前がジャンキーだった過去を詳細に綴ったファイルを持っていた。この記事が外に出てみる、シーモア家の人間にジャンキーがいると世間に公表することになる。その前にヤツを拘束できたからよかったものの」

「拘束……ですか？」

「豚箱にぶち込んである。あいつは軍のブラックリストに載っている記者で、常にマークされている。それより、貴様は記者の人間と外で頻繁に会って情報を漏らしていたのか？」

会いたくて会ったわけでもないし、情報をもたらしたわけでもない。

「アルが――記者が話を聞きたいとやってきたので、軍を通してくださいとお願いしただけです」

「なぜ、軍にその日の内に報告しない？」

「あ……」

報告なんて、思いつきもしなかった。

ダン、と机を叩き、ゴドウィンは私を睨みつけた。

「ビッグマザー計画を漏らしたのか」

「そんなこと、していません」

「じゃあ、何故ヤツはビッグマザーのことを詳細に調べ上げている？ ビッグマザーのファイルも持っていた。まあいい。記事になる前にクソ記者を拘束できてよかった。ヤツはいつも単独で動いているし、他に情報が漏れることはないだろう。ビッグマザーについてここまで詳細に調べてくれてるのは、逆に助かる。大いに利用させてもらおう」

「何が、書かれているのですか？ ビッグマザー計画、どうなっているのですか」

思わず私が乗り出して聞くと、ゴドウィンは露骨に顔をしかめた。

「貴様には関係ない。貴様はこれにサインすればいい」

卓上がモニターとなり、書類ファイルが映し出された。退職届関連の書類かと思って、映し出されたファイルを見て、固まる。

離婚届だった。

確か、教会の教えでも、離婚はできないはずなのに。

「ジャンキーは、シーモア家には要らない。アレンにはふさわしい女を娶らせる。さっさとサインしろ」

ゴドウィンはモニターを指でコツコツと叩く。

モニター上にミア、とサインし、認証欄に指を置いて光照合するだけで、私は離婚に同意したことになるってしまう。

そのとき、ためらいがちにドアがノックされた。

姿勢の良い若い男がゴドウィンに来客を告げ、ゴドウィンは慌てて部屋を出て行った。

温度の下がった部屋で、私はしばらくそのモニターをみていた。

モニターには離婚届が大きく映し出されたままになっていた。

ながいあいだ、身動きできず、ただそのモニターを見ているうちに、一定時間がすぎ、自動的にモニターの画面が消えた。

私は立ちあがり、のろのろと部屋を出る。

どうやって家に着いたかわからない。

ぼんやりとソファに座っていると、電話のコールサインが鳴った。

アレンからだった。

慌ててモニターをonにして電話にでる。

モニターに大好きなアレンの顔が映った。

「はい」

「もしもし？ ミア？ どうかしたのか？」

一瞬の顔の表情と、はい、という声だけでアレンには全てがわかってしまう。

どうかしたのか、という問いにすぐに答えられない。
泣きそうになりながら、言葉を探す。

ゴドウィンが・・・。

「ミア？ 何かあったのか？」

「・・・何でもないよ」

ゴドウィンが結婚に反対なことなど、アレンは百も承知だろう。だからこそ、二人きりで内緒で結婚したのだ。ゴドウィンのいうことなんて、関係ない。私はアレンとずっと一緒にいる約束をしたのだから。

それでも、アレンの顔を見ると、気が緩み、涙が出そうになる。おかしい。

私はこんなに弱い人間じゃなかったはずなのに。

「・・・ミア、ちゃんと話してくれないとわからないよ」

アレンは優しくいう。

アレンはいつでも、優しい。

「記者が取材に来て・・・、私は取材は断ったのだけれど、その取材で勝手に軍の機密を漏らしたとゴドウィンに疑われて・・・」

話しながら、こんな説明じゃ、アレンには半分も伝わらないだろうと思う。

「取材？ 記者が家に押しかけてきたのか？」

「そうじゃなくて・・・」

上手く伝えられないうちに、アレンの電話に緊急のコールサインが割り込んできた。

「ミア、すまない。またすぐに電話する。近いうちに必ず帰るから。」

アレンはそういつてくれたけれど、私のために長期休暇をとったばかりだ。

忙しい身のアレンに、私に割く時間など無い。

アレンは軍人を輩出する名門一族の出で、宙軍エースパイロットとなり、エリートとよばれるにふさわしい人生を歩んできたらしい。彼の人生の中で、妻が私ということだけが想定外の出来事だったのだのかもしれない。

今日も窓の向こう側でタワーが静かに点滅している。

ぼんやりタワーをみていると、赤い点滅がばやけてにじんでいた。

8 逢瀬（前書き）

アレンの視点です

8 逢瀬

ミアの様子がおかしい。

電話では、何がどうしたかよくわからないが、叔父がミアに何か酷いことをしたのだろうと見当はついた。あの後電話をしても、ミアは大丈夫の一点張りで、何があったか話そうとはしなかった。

子供のいない叔父夫婦に、俺は随分と目をかけられてきた。叔父と同じ士官学校を卒業し、同じ宙軍を選んだ事を本当に喜んでいた。叔父がやり手で情け容赦のない人間であることは知っていたが、その牙が自分に向く事は今まで無かった。俺は常に叔父の自慢の甥だったのだ。

叔父が用意した縁談を断るまでは。

家に帰るため、無理やり本土にあるプーランク本部に用事を作り、アースを降りた。

本部で用事を済ませ、家へ向かう。

ドアを開けるなり、ミアが子犬のように飛びついてきた。

「アレン、淋しかった。おかえりなさい」

ミアの潤んだ目をみて、胸を突かれる。

「遅くなって悪かった」

ミアを抱きしめると、嬉しそうに首に手をまわし、キスしてくる。

ミアの小さな唇。

小さな体。

柔らかな白い髪。

ミアの輪郭を確かめながら、ソファへ移動する。

ミアを抱きしめながら、また、ミアが少し痩せたことに気付く。

私達、ずっと一緒だよな？

ミアが俺を見あげていった。

不安そうな眼差しに胸が痛む。

大丈夫だよ。ずっと一緒だ。

そう答えると、ミアは微笑んで目を閉じ、俺の胸に耳を押し当てる。

アレンの腕の中は安心できるから、好き。

ミアがつぶやくのが聞こえた。

タワーの赤い点滅がガラスの向こうに見えた。

ミアは俺の腕の中で、すやすやと眠っている。

喉が渴き、ミアを起さないよう、そっとベッドを抜け出した。

キッチンの水道の横に見慣れない小さな箱を見つけ、愕然とする。

睡眠薬の類の箱だった。ミアはいつから薬を常用しているのだろうか？

傭兵の頃、ミアは戦闘薬と一緒に睡眠導入剤も使っていた。

眠っているミアは、小さく、頼りなく、あどけなかった。

宙軍パイロットになるために、ずっと子供の頃から努力してきた。
宇宙を飛ぶのが好きだった。

立派な軍人になるために、生きてきた。
それが、当たり前だった。

だが、そろそろ地上に戻るときが来たのかもしれない。
地上でもやることはたくさんあるはずだ。
地上勤務なら、もっとミアのそばにいてやれる。

タワーの赤い点滅が消え、窓から明るい陽射しが差し込んでくる。

俺は「アース」を降りることを決めた。

9 記念講演

ある日、軍経由のメール便で講演のお知らせが届いた。しかも、わけのわからない学会の記念講演。

どうして、私に？ と思って、よくみると、講演者の中にマッド博士の名前が入っていた。なんとか学会の賞を受賞した人達の記念講演で、場所はここからそう遠くないプーランク工科大学の講堂と書いてある。

軍を経由しているが、マッド博士本人が講演のお知らせを送ってくれたらしい。

「ビッグマザー」に乗船していたとき、私によく似たセクサロイド「N209」の治療をした博士だ。マッド博士は定住することなくあちこちの宇宙船やコロニーなどを定期的に移動しながら生活しているトラベラーズだ。

講演内容は難しそうだけど、せっかくマッド博士が知らせてくれたのだし、行くことにした。プーランクに来てから、初めて「ビッグマザー」の知り合いに会える。嬉しかった。

学会の記念講演という先入観のせいか、会場にいる人は皆頭がよさそうに見えてしまう。ひどく場違いな気がした。講演の内容は、人工知能の情報の共有がどうのこうのと、案の定さっぱりわからず、途中で眠くなってしまった。

講演が終わり、マッド博士に挨拶に行こうと探していると、耳元で声がした。

「ミア、こんにちは」

みるとN209が立っていた。

「エヌ？ 博士と一緒に来たの？」

私ができるとN209はニッコリ笑った。

「はい。私は故障が多いので、直してもらったために、博士と一緒にきました。プーランクにアンドロイドの製造工場があるのです」

博士もN209の後からやってきた。

「そうなんだよ。プーランクには馴染のアンドロイド工場があるから、学会のついでに寄って、部品をもらってN209の修理をしようと思ってね。ミア、久しぶりだね。今日は来てくれてありがとう。結婚したんだってね。本当におめでとう」

そういつてマッド博士は大げさに私を抱擁する。

「マッド博士も、受賞おめでとunggざいます」

私がいうとマッド博士は笑った。

「実は学会でプーランクに行くっていったら、ビッグマザーの連中がミアの様子を見て来いってうるさくてね。でも、ミアの住んでいる場所も連絡先もわからないから、知り合いの軍の研究所で働いているヤツに頼んで講演案内を転送してもらったんだ。プーランクは情報規制が厳しいから、変なメール便送って検閲にひっかかってはいけないと思って、あえて講演案内にしたんだ。呼び出してしまったようで、申し訳なかったね」

「・・・いいえ」

「そうそう、ビッグマザーの連中からミアの結婚祝いを預かってきたんだよ。車に積んであるから、ちょっと一緒に取りに来てもらえ

ないかな」

ビッグマザーと聞いて泣きそうになる。

博士は怪訝な顔をして私を見た。

車、ときいていたが、とんでもなくデカかった。

キャンピングカー以上のデカさで、トレーラー並み。

それがプーランク工科大学の駐車スペースを大きく占領していた。中に入るとそこは、立派な研究室だった。寝泊りできる空間もある。アンドロイドの部品と思われる手足があったりしてかなりシユールな光景だ。

「博士、もしかしてこれで宇宙をまわっているんですか？」

「宇宙船にこの車ごと乗せてもらうんだ。体一つであちこち移動できたらいいけれど、どうしても研究材料などを持ち運ばないといけないからね。だんだん荷物が大きくなって、ついには研究室ごと移動している。キャンピングカー生活が子供の頃からの夢でさあ。定住は性に合わないんだよ。一週間後には、プーランクを出て別の宇宙船に乗りこむ予定なんだ」

そういつて笑う博士は無邪気で楽しそうだった。

アレン以外の人と気兼ねなくお話しするのは本当に久しぶりだった。

「これ、ビッグマザーのみんなから預かっていたお祝い。ビッグマザー製造のワインらしいよ。それからこっちはシンからお手紙と、何かプレゼント。あいつも諦め悪いよなあ。ハハハ」

ワインと封筒と小さな包み。

小さな包みを開けると、瓶に入っただちみつれもんだった。

私のお気に入りやつ。シンの手作りに違いない。
手渡されたワインと手紙と小瓶を抱きしめる。」

「・・・ミア？ 何か、元気ないね。どうしたの？ まさか、暴力夫だったとか？ 借金？ 女？ ビッグマザーのやつら、本当にミアのこと、心配してて・・・」

博士の言葉に涙が出そうになる。

「マッド博士、ビッグマザーのみんなに伝えたいことがあるの」

思わず、私はマッド博士に話してしまった。
プーランク軍にビッグマザーが狙われていることを。

私の話を聞き終えたマッド博士はじっと考え込み、やがて、重い口を開いた。

「軍の機密をもらすのは大罪だよ、ミア。軍にバレたら豚箱一年じやすまない。下手すれば消されるよ。プーランクは情報規制が厳しい。何気なく送っている通信にも複数のスパイ機能が働いて、監視している」

「・・・」

「ビッグマザーに宇宙メール便や電話で伝えるのはかなり危険だと思う。僕は通信関係には疎いから・・・よくわからないけれど。僕からビッグマザーに連絡できればいいけれど、僕も今はプーランクからマークされている身だからなあ。」

マッド博士はそういつて、首をすくめた。

「プーランクと何かあったのですか？」
私ができくと、博士はため息をついた。

「以前、プーランク工科大学と人工知能の共同研究していたんだ。そのとき、僕の研究データが勝手にプーランク軍の研究施設に流されていてね。工科大学と、軍の研究施設は裏でつながっていたんだよ。契約違反だって怒ったら、いつの間にか、プーランク工科大学とプーランク軍と僕と一緒に共同研究していることにされちゃってね。そのときの研究成果も特許も全部軍と共有する羽目になった。」

「そのときの研究は、簡単にいえば、人工知能と人間の頭脳の垣根を取り払う作業をしていたんだ。例えば、百戦錬磨の戦闘機乗りのミアの記憶や経験をデータとして人工知能に移し替える。そうすれば、ミアと同等の能力をもつ人工知能つき無人戦闘機なんかもできちゃうわけだ。あくまで理屈としては、だけどね。人間の記憶を持つアンドロイドだってできる。過去にもあったよ。死んだ娘そっくりのアンドロイドを作らせて可愛がっている夫婦とか。でも、娘の記憶すらアンドロイドの中に再現できてしまうことになる。さすがにいろいろまずいだらうと思って、研究継続や利用にあたつてのガイドラインを作るべきだと学会で発表したら、研究の邪魔になるって軍に睨まれてねえ。軍と対立関係になっちゃったわけ。特許やいろいろな利権も軍と共有しているし、相当目障りだらうね、僕は。そうこうしている内に、帝都国が嗅ぎ付けて、僕に共同研究を持ち掛けてきたんだ。それを知ったプーランク軍の研究所もまたウチと共同研究しようとして、折れてきた。帝都国と僕が組むのを恐れたのか、脅迫まがいのことまでされてさ。もう、いろいろ面倒くさくて。軍事産業に興味はないし、帝都国もプーランクもどっちも断るつもりなんだ。学会も終わつたし、まずはプーランクに正式に断りの連絡をしようかな、と思っていた所だったんだよ。そういうわけ

で、今はちょっとタイミングが悪いんだよ。どうすればいいだろうねえ。」

マッド博士と二人、トレーラーの中で、考え込んでいた。

10 死の知らせ（前書き）

アレन視点です

10 死の知らせ

「アース」を降りるため、地上勤務の希望を出した。

もちろん、異動希望が通るとはかぎらないし、異動できるとしても半年以上先になるだろう。最近、帝都国の領空侵犯が頻繁になっている。こんなときに異動希望など、出すべきではなかったかもしれない。国を守らなければ、ミアを守ることもできないのだから。

ミアのことを気にながらも、「アース」での任務に忙殺されていた。

そんなとき、業務のため、プーランク本土に戻っていたハラウェイから緊急の電話が入った。

「どうした？ 何かあったのか？」

俺の問いに一瞬の重い沈黙があった。

その沈黙で、何かまずいことが起こったことがわかった。

「ミアちゃんが」

ゾッとする。

何か、一番嫌な事が起きている。

「亡くなった」

電話の向こうでハラウェイはそういった。

「・・・待ってくれ。いつたい、どういう・・・」

ミアが？

「アンドロイド工場爆発の事件は知っているか？ あの爆発に巻き込まれて亡くなったそうだ」

「・・・それは、本当なのか？」

アンドロイド工場とミアに何の関連があるというのだ？

「アンドロイド工場にマッド博士というアンドロイドの世界権威が来ていて、ミアちゃんも同行していたらしい」

「ミアが・・・？ 聞いていない」

ミアとマッド博士の接点が全く思い浮かばない。
何かの講演会を聞きに行くという話は聞いていたが。

「何かの間違いじゃないのか？」

ハラウェイの話を聞いても信じられなかった。

「俺もそう思いたいが、ミアちゃんの個人認識チップの位置を照合しても間違いないそうだ。遺体は・・・損傷が激しくて回収できなかったらしい。マッド博士は大怪我をしたが、命は助かったそうだ」

正規軍人は体内に個人情報に記載したチップを埋め込んでいる。

ミアも正規軍人となり、チップを埋め込む処理をした。
個人認識チップを確認したということは・・・。

そんな、馬鹿な。

ミアの安全を願ってアースから降ろし、退職届も書かせたのに、なぜ・・・。

「爆発って、いったいどうして・・・」

「狂信的なアンドロイド排除団体がいくつかあるのは知っているだろ？ アンドロイドを世界から撲滅させようとしている団体。マッド博士もアンドロイド工場も恒常的に脅迫されていたそうだ。そいつらが爆発物を仕掛けたとみられているらしい。ミアちゃんはマッド博士と一緒にいたせいで巻き込まれた可能性が高い」

どうしても、信じられなかった。

プーランク行のシャトルを無理に出してもらい、プーランク本土の空港から軍用ヘリをチャーターしてその現場に向かった。ハラウェイが全て手配してくれていた。

視界に奇妙な光景が広がっていた。
微かな違和感があった。

アンドロイド工場が爆発したと聞いていたが、アンドロイド工場自体は無傷で、駐車スペースにあるトレーラーらしきものが大きく破損し、めちゃくちゃになっていた。

この中にミアがいるというのか？

嘘だ。

個人認識用チップの位置は軍のヘリのレーダーにも映し出されていた。

ミアに埋め込まれた個人認識チップの位置は界下の破損したトレーラーを指している。

ミアがここに、この瓦礫の中にいるというのか。

嘘だといってほしい。

ミアは悪運が強い。

こんなことで死ぬはずが、ない。

ヘリを降りたところで状況は何一つかわらなかった。

トレーラーは、前半分が大破し、後ろ半分は何とか四角い形を保っている。これでは、マッド博士が生きていたことが奇跡のようだ。

マッド博士は、大怪我をおい、治療のため面会謝絶らしい。

ハンドモニターには、ミアの個人認識チップの位置が示されていた。チップの示す場所には焼け焦げた何かの形のものが折り重なっている。

そこには、人間と思われる姿形のものに残ってはいなかった。

花嫁姿で微笑んでいたのはついこの間のことではなかったのか。

アレンの腕の中は安心できるから好き、といていたのは、束の間、宇宙から戻ってミアを腕に抱いたときだった。

まだ数える程しか腕に抱いていない。

奪うように籍を入れ、ミアをプーランクに閉じ込めてしまった。

ミアと一緒にいるために、ミアを守るためにアースを降りる決意をしたばかりだというのに、どうしてこんな・・・。

「アレン」

ハラウェイに肩に手を置かれ、ようやく我に返る。

ずい分長い間、立ちつくしていたらしい。

「そろそろヘリを戻さないと。・・・いこう。本部の人間が話をしたいといっている」

ハラウェイはヘリの方をふり返って言った。

ヘリを急ぎよ無理やり出させた。

そろそろ戻らなければならないのはわかる。

なぜ、ミアはアンドロイド工場などにいたのか。

もしどこかへ出かけるならいつもは連絡ぐらいはくれる。

それなのに、移動の連絡も何もなかった。

ミアは俺が帰るのを心待ちにしていた。

俺が帰ると子犬のように飛んできて飛びついてくる。

アレン、淋しかった。

おかえりなさい。

ミアの笑顔。

それから、キス。

それから・・・。

「アレン。聞いているのか」

モニターが示すチップの位置にはミアの気配すらない。

だがへりに戻ったところで、話をきいたところで、ミアはいない。
何の意味もなかった。

「・・・わかった。お前はへりで戻ってくれ。俺はもう少しここに
いる」

ミアのチップの居場所。

そこには何もなかった。

それでも、もう少しだけそばにいたかった。

11 怒り1（前書き）

アレン視点です。なんか長くてすいません

11 怒り1

ミアの死がどうしても受け入れられない。

今でも、家へ戻れば、アレンおかえりなさい、といってミアが子犬のように飛びついてくるのではないかと思ってしまう。

そんな俺をよそに、「ベビードール」の死は大きく報道されていた。アンドロイドの権威、マッド博士が大怪我、「ベビードール」死亡。マッド博士のトレーラーが、アンドロイド排除団体がしかけたとみられる爆弾により爆発、二人はそれにまきこまれた模様。そのような内容の報道がほとんどだった。

なぜマッド博士にミアが同行していたのかは謎だ。

マッド博士とミアの仲を邪推するような報道も一部あった。

ミアの死を認めたくないのに、事務処理は待ってくれない。事務職員にミアの死亡届を出せといわれ、ミアは死んでないくつてかかり、気の毒そうな顔をされた。

わかっている。認めなければならぬのは。

リーダーに映ったミアの個人認識チップはミアの死を物語っている。ブーランク本土にある本部で、さまざまな事務処理に追われていると、一番顔をみたくない人物に出会った。わざわざ会いに来たらしい。

「お前がアースを降りるといったときは呆れたが。これで降りる理由もなくなっただろう」

叔父は機嫌がよかった。

ミアのそばにいるため、宇宙空母「アース」から地上勤務の異動希望を出していた。

叔父にしてみれば、宙軍の象徴である「アース」を降りることを希望するなど、あつてはならないことだっただろう。ましてや、女の為に。

「報道のほとぼりが冷めたら、例の娘と結婚しろ」

叔父は機嫌よくいった。

呆れる。

ミアを失ってまだまもないのだ。

報道の問題ではない。俺の問題だ。

ミアと結婚する前、叔父が見合いの話を進めていた女性がいた。

叔父は最近、政界とのつながりに執心していた。

その女性が政界へのパイプと成り得るらしかった。

ある高官のお嬢さんで、語学が堪能。戦争で親を失った子供達のケアをするボランティアもしているといっていた。あらゆる意味でミアとは対照的な女性だった。

一度会って食事をしたが、決して嫌いなタイプではない。

ミアを知る前なら、特に異存もなく結婚していたかもしれない。

なぜ、ミアなのか、自分でもわからない。

ミアを抱く以前から、気付けばいつもミアを目で追っていた。

傭兵の中でも、戦闘機乗りの連中は妙にプライドが高く、それでいて捨て鉢なところがあり、扱いに困ることが多かった。一匹狼の集まりのようなその連中を、年若い傭兵隊長のルークが上手くまとめていた。その中でも、特に目立っていたのがミアだった。ドラッグ

漬けの荒んだ態度は他の傭兵と変わらなかったが、ミアの上官を上官とも思わない生意気な態度も孤独感も、俺には妙に自由に、眩しく見えた。俺にはけっして向けることの無い、ルークだけに時折向ける無邪気な笑顔にも惹かれた。夜、ラウンジに一人ポツンと座っているミアの背中が、まるで全ての人間を拒絶しているようだった。それでもその小さな背中を知らず知らずのうちに探していた。

恋をしているという自覚もないまま、その小さな背中を見るたびに抱きしめたいという衝動にかられるようになった。ドラック漬けで激務をこなす小さな体が痛々しく、心配でもあった。声をかけても、ミアは常にそっけなく、俺をまともにみようともしない。

戦闘前夜、夜遅くにラウンジにすわるミアをみかけた。

ミアは戦闘がわかっていいる前夜は、必ず早めに自分の部屋に戻って休息をとる。

珍しいこともあるものだと思って、声をかけた。

無視されるか、悪態をつかれるかと思ったが、思いがけないことにミアは黙ったまま、俺の首に手をまわし、抱きついてきた。

思わず抱きしめると、長い睫をふせ、キスをせがむように唇を押し当ててくる。

そこから先は夢中だった。

小さな人形のような唇を吸い、抱きしめ、自分の部屋へ連れ込んだ。ミアは全く抵抗することなく、身をまかせようについてきた。

ベッドへ押し倒し、ミアの体をまさぐり、服を脱がせる。

ミアは長い睫をふせ、華奢な手足を絡めてきた。

真っ白な体をなぞれば、潤んだ目で俺を見あげ、微かな喘ぎ声を漏らした。

どんな女よりもみだらで綺麗だった。

壊れそうな小さな体が壊れてしまいうくらいに抱いた。

翌朝、戦闘になるというのに、俺はまだミアを手放せないでいた。小さな肩を抱く。

唇が欲しい。ミアの小さな頭に口づける。

まわりの人間が驚いた顔で俺の痴態を見ている。それがわかっていても、どうしようもなかった。

ミアは俺に肩を抱かれても、冷めた表情で知らん顔をしている。

ルーク傭兵隊長がミアの肩を抱く俺を見て驚いた顔をするのがわかった。

ルークがミアを特別大切にしていることはわかっていたが、ミアは俺のものだ。

そして、戦闘。

けっして難しいミッションではなかったはずだ。

不味いな、とは思った。

傭兵を取りまとめるルークが動揺しているのが伝わってきたからだ。

ルークは常に沈着冷静で、こちらの指示を的確に実行する。

が、今日ばかりは冷静ではいらなかったようだ。

そういう自分も普通ではないことを自覚している。

ミアだけがいつもどおり、冷静にみえた。

が、ミアが冷静にみえたのは見かけだけだった。

ミアが戦闘機で宇宙に出て十五分経ったところだろうか。

突然、ルークがミアに退却するよう命令を出した。

いつも冷静なルークが怒鳴るようにミアを誘導しようとしている。

ミアは、息もできないような状態で、完全に操縦不能になっていた。一機、流されるように遠ざかっていく。

ミアが戦闘薬無しで宇宙に出たせいで、パニックになった、と後でわかった。

敵艦ビッグマザーにミアが捕らえられてしまった後で。

ミッションは失敗に終わった。

敵艦にミアと高価な戦闘機一機奪われ、プーランク領空侵犯を許した。

自分のこなしてきたミッションの中で、有り得ない失敗だったが、そんなことよりもミアを奪われた事だけがショックだった。

ミアに惚れていること、そして一夜でミアに完全に溺れたことを自覚した。

自覚しても、ミアはいない。

自分のせいで、ミアは敵艦に囚われたのだ。

なりふり構わず、出来る限りの事をしてミアを取り戻そうとしたが、叶わなかった。

ミアへの想いだけが募ってゆく。

何をしていても、ミアのことが頭を離れなかった。

ミアは無事なのだろうか。

ミアが誰かに傷つけられていたら？

気が狂いそうだった。

そんな俺にまわりの連中は呆れ果てていたが、ルーナ女医だけは、呆れながらもいろいろな情報を流してくれた。

惑星ロペでミアの捕らわれた宇宙船ビッグマザーと接触できるとわ

かり、ミアを連れ戻しに行った。

俺はミアを愛していたが、ミアにとって俺はどういう存在だったのか。

ミアの困惑したような表情が全てを物語っていた。

ミアは俺を愛しては、いなかった。

ビッグマザーへ帰ってゆくミアを見送り、空虚な気持ちを抱きながら帰途へつく。

ミアが無事で、元気なことがわかったんだから、それでいいじゃないか。

ミアのことはもう、忘れればいい。

それから、いろいろあった。

どう考えても、ミアよりいい女はたくさんいる。

ミアへの想いが恋愛ではなく、ただの執着かもしれないと思い始めた頃、ハラウェイから連絡が入った。

ハラウェイからの、ミアの乗った戦闘機を回収したという知らせを受け、自分がまだミアを想っていることにハッキリ気付いた。

今度こそ、ミアを逃す気はなかった。

ミアも俺を頼り、俺にすがりついてくる。

ミアをブランクに閉じ込めてしまえば、俺しか頼れる人間はいないし、俺のところには帰る場所はない。

ようやく、ミアが俺をみつめ、好きだといい、求めてくれるようになったばかりなのに。

やっと手に入れたと思ったのに。

今度こそ、大切に守ってやりたいと思ったのに。

何故。

俺を見あげるときの、少し潤んだ瞳や、目を閉じて胸に耳を押し当てるしぐさは、たまらなく愛おしい。

ミア。

「妻を娶る気はもうありません」

俺が言うと、叔父は機嫌を悪くしたようだった。

「もちろん今すぐにとは、いわない。だが、もともとあの娘はお前にはつりあわなかった。傭兵で、ドラッグ漬けで、体もボロボロで、頭も悪い。軍人としても、生意気で反抗的で、おまけに記者に弱みを握られる始末だ。シーモア家にあんな女はいらない」

「シーモアには必要なくても、俺には必要だった」
叔父と話するのが苦痛で、背を向けた。

必要だった。

なぜ、俺は過去形で話している？

今も必要なのに。

どうすれば、いい？

ミアの甘い声も、唇も、小さな臍も、何もかも今すぐに欲しい。

目を閉じれば、ミアの笑顔が浮かぶ。

ミアの花嫁姿も。

ミアは笑顔でも、どこか寂しげだった。

心からの笑顔が欲しかった。

それでも、まだまだ2人の時間はあると思っていたのだ。

寂しい思いをさせたまま……。

ミア。

どうしてミアが死ななければならぬ？

アンドロイド排除団体？

ならば、マッド博士だけ殺せばいい。

なぜ、ミアを巻き込む？

そもそも、なぜマッド博士はミアをアンドロイド工場に連れて行くとしたのだ？

しかも、自分は怪我はしたらしいがのうのうと助かって……。

マッド博士が悪いわけじゃない。

それは、わかっているが……。

マッド博士とミアの仲を邪推している一部の報道が微かに胸にひっかかっていた。

ミアを疑う気持ちは微塵も無い。

微塵も無いが、それでも、一度マッド博士に会って話をききたいと思った。

今更、マッド博士に会ったところで、ミアが帰ってくるわけではないが、今博士に会わなければ一生会うこともないだろう。博士に会いにアンドロイド工場に向かった。アンドロイド工場内で博士が療養中と聞いたからだ。

事故直後は面会謝絶だったが、そろそろ話ぐらいはできるだろう。

訪れたアンドロイド工場には、この前のトレーラーの残骸は片付け

られ、焼け跡だけが残っていた。息が苦しくなる。

「アレン・シーモアさんですね。このたびは……」

出迎えてくれたアンドロイド工場長という男は、細身の生真面目そうな面立ちの中年だった。

「マッド博士に少しお話を伺いたくてお邪魔した。こちらにみえると聞きましたが」

俺がいうと、工場長は気の毒そうな顔で首を横に振った。

「マッド博士はすでに国外へ出られています」

初耳だった。大怪我で療養中ではなかったのか？

「国外へ？ いつ？」

「つい先日です。このアンドロイド工場は、もともと義足や義手の製造から発展しました。だから、工場内には人工細胞で作った義手や義足を人に接続するための医療施設も整っています。マッド博士は我々に指示を出し、工場内で手当をされた後、国を出られたのです。本当は安静にしていなければならぬような状態でした」

「…そうだったのか。まあ、アンドロイド排除団体に命を狙われていることを考えれば、国外へ逃げたくなって当然かもしれないな」

俺の言葉を工場長は神妙な顔をして聞いていた。

「ミアをまきこんでおいて、自分だけはさっさと逃亡か。なぜ、ミアをこんな所へ連れてきたんだ。博士がミアを連れまわさなければ、

「こんな……」

博士だって被害者だ。

それは、わかっているが、やり場の無い怒りがどろどろと俺の中に渦巻いていた。

アンドロイド排除団体の仕業と目されながら、犯人逮捕へは至っていない。

「ミアさんは、アンドロイドと友達になった最初の人間なんですよ」
工場長はポツンといった。

「友達？ 何だそれは」

「アンドロイドと人間は友好的な関係を結んでいます。でも、それはあくまでも、命令としてインプットされているだけの話。老人の話し相手や子供の世話など、一見友情に似たような関係はありますが、アンドロイドが自発的に友達を作ることはありません。でもN209というアンドロイドはミアさんを友達と認識したそうなのです。マッド博士からお聞きしました。実に不思議な現象です。N209は故障が多く、今回マッド博士がこの工場で修理と調査をする予定になっていました。そういうわけで、ミアさんは友達の入院のお見舞いのつもりで、博士と一緒にアンドロイド工場を訪ねてくれたのではないのでしょうか。結局、お会いすることは叶いませんでしたが」

そうなのか。

そうなのかもしれないが、だからといって何故、ミアが犠牲にならなければならない？

「アンドロイド排除団体の仕業といいながら、爆破されたのはトレイラーだけで、工場は全く無傷だ。マッド博士への個人的な恨みか

何かにミアがまきこまれたということか？」

俺がいうと、工場長は暫くの沈黙の後、口を開いた。

「我々はこの爆発について、いつさい口をはさまないよう、軍から釘をさされています。が、一つ気になる事があります」

軍がわざわざ口止めをしている？ 違和感を覚えた。

通常の交通事故や、殺傷事件などは普通の警察が対応する。が、爆発事故や大量殺人などテロや政治事件に発展する可能性がある場合は軍警察が動く。今回の管轄は軍警察だったはずだ。

「爆発のとき、ちょうど軍用機が空を巡回していたらしいのですよ。まるで、爆発を予知していたみたいに。」

「軍用機が巡回？」

「ええ。私は飛行機の類は詳しくないんですが、詳しいやつが一人いましてね。軍用の偵察機っていうんですか？ あれがしばらく巡回していたらしいんです。偶然かもしれませんが、でも、偶然でなかったとしたら、軍の方は爆発物が仕掛けられるという情報をあらかじめつかんでいたことになります」

トレーラーに爆弾が仕掛けられている情報を、軍がつかんでいた？

「マッド博士は困っていたみたいですよ。ブランク軍から様々な圧力をかけられていたようです」

「軍が、博士に圧力を…？」

驚く俺を工場長は冷ややかに一瞥した。

「マッド博士は人工知能の権威ですからね。人工知能を搭載した無人戦闘機の開発など、軍事産業の要となる人物と評されているのです。しかしながら、博士はそういった産業利用に懸念を示され、人工知能の利用制限を国際会議や学会で訴えて、プーランク軍と敵対してしまいました。その他にも、利権のからみでプーランク軍ともめていたそうです」

「……何がしたい」

「マッド博士を嫌っていたのは、アンドロイド排除団体だけじゃないってことです。軍人のあなたにわざわざ言うことじゃないですけどね」

工場長は俺の目をみて、いった。

12 怒り2 (前書き)

アレク視点です

12 怒り2

トレーラーの爆発跡を見たときに感じた違和感の理由がわかった。トレーラーの破壊のされ方だ。あれは、素人が使う爆弾の類ではない。軍が開発した特殊な爆弾で爆発したものだ。宇宙空間などでは下手に爆発させると味方にまで害が及ぶ。破壊の距離や程度をかなり正確に制御できる爆弾が開発された。爆発の威力は半径数キロから数メートルまで様々な種類が作られた。その爆破実験に立ち会ったことがある。離れた所から、遠隔操作で爆破させるのだ。あのときの、爆破跡によく似ている……。

・・・まさか、この爆発に軍がからんでいるのか？

プーランク軍が一番恐れているのは、軍事技術が帝都国へ渡ることだ。

調べてみると、マッド博士は帝都国へわたる可能性が高い危険人物とされていた。マッド博士が帝都国入りすれば、技術情報が大きく帝都国に流れ、何よりその破壊的に凄まじい頭脳が帝都国のものとなってしまう。癖のある人物で、なかなか思うようにならない男らしい。また、マッド博士が利権の一部を持っているせいで、プーランクの軍事産業の一部が思い通り進まず、停滞しているとの報告書まであった。

マッド博士の頭脳や利権が帝都国にわたるのを防ぐために、殺そうとして、失敗した？

有り得ないわけではない。

そもそも、アンドロイド排除団体だったら、工場もろとも爆破させようとするのではないだろうか。マッド博士のトレーラーに爆発物を仕掛け、遠隔操作で爆破。

あまりにも簡単だ。

偵察機を目撃したという工場勤務の男はかなりの飛行機マニアで正確にどの型の機かを予想し、教えてくれた。

彼の情報を頼りに、空軍の情報を探る。昔、空軍から出発して宙軍ができたため、今では宙軍の一部に空軍が位置している。調べるのはそれ程難しいことではなかった。

はたして、偵察機の種類と、爆弾が爆発した日付、時間を照合すると、確かに一機、出ている。詳しい飛行記録は無く、「巡回」とだけ記されている。搭乗者―パイロット名も記されていた。

パイロットを探し出すと、警備巡回や、軍の研究施設の実験補助を受け持つ地味な部署にその男はいた。

少年といってもいいほど若い男だった。男は俺をみるなり、驚愕の表情を浮かべ、すぐに土下座していった。

「申し訳ありません。命令で、逆らえませんでした」
顔を上げようとしない男に、確信するよりなかった。

この男がトレーラーの爆破に関与していたのは間違いない。

やはり、マッド博士のトレーラー爆破には軍がからんでいたのか・・。

「お前がマッド博士のトレーラーを爆破させたのか」

ミアを殺したのか、という言葉を辛うじて飲み込む。

彼もミアを巻き込むつもりはなかったのだろう、そう思っていた。

「トレーラーの爆破命令を受けましたが、中に人がいるとは知らさ

れていませんでした。既に爆発物は仕掛けてあるので、起爆スイッチを押し、状況を報告せよとの命令でした。爆破前に軍の個人認識チップがリーダーに映っていることに気が付き、驚いて報告したのです。ですが、関係ないからすぐに命令を実行しろといわれて・・・」

関係ないから命令を実行しろだと？

「まさか、貴様、ミアが下にいるとわかって爆破させたのか？」

「爆破しろと・・・そういう命令だったのです」

「ミアごと殺せと？」

「・・・」

殴りかかっていた。

完全に、相手を殺す気で殴っていた。

四方八方から人に抑えられた。

「離せ、殺してやる」

「待ちなさい、シーモア中佐。その命令をしたのは、あなたの叔父です」

俺を押さえていた人間の一人がそういった。

叔父が・・・。

絶対に許さない。

あたりを見わたす。

いったいどれだけの人間が知っていたんだ？

許さない。

ミアを見殺しにしたやつも、叔父も、軍も、
なにもかも。

12 怒り2（後書き）

読んでくださってありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0428r/>

漂流者のログブック

2011年10月11日05時52分発行